

第7節 弥生時代後期、古墳時代

A. E区

E区の第4遺構面は、第5遺構面までの沖積堆積が終了し、その起伏を平坦に整地する作業によって形成される。

第4遺構面b・cの下面は、第5遺構面aの河道I・II上層とも共通する遺構が顕著である。

溝S D61は、河道I上層南肩と共通する。幅6.0m、深さ0.4mの断面「U」の字形を呈する東西方向のもので、荒砂及びび砂が細層として下部に顕著に堆積するが、全体に砂質シルトを主体としている。その南側法面上には、高坏形土器のほか完形品と変形土器が押しつぶされたような状況で出土しており、畿内第V様式古段階に属すると考えられる。

また、河道IIの中央部上に溝S D59・459の両下層を検出している。これは、河道IIの最上層にも相当するが、溝内堆積土は溝S D61と共通する。差異としては、それよりも土器と荒砂を多く含んでいることである。幅は西側が現代のため池に攪乱を受けているため明らかでないが、ほぼ南北方向を軸として、深さは最上部から、1.4m程である。出土遺物は、流木とともに杭などの木器類と畿内第V様式古段階に属する土器が多く出土している。それらは特にh3区の北側に集中する。

第4遺構面bのその他の遺構は、主に溝である。南北、東西それぞれの方向のものがあるが、それらの中で、東西方向のものに人為的な掘削によるものと考えられるものが多く、南北方向のものは浅く不明瞭な落ち込み状のものがほとんどである。以下は、東西方向のものを主にとりあげることにする。

溝S D62 E区の北端に位置する東西方向に直線的にのびる溝で、断面逆台形を呈する幅1.3mのものである。堆積土は、黒味を帯びた砂を主とする。溝底は一様ではなく、Eトレンチ部分の

中央にあたりとこ
ろが最も深く明瞭
に切り込まれてお
り、そこでは黒褐
色系と黄褐色系の
粘土が下層に堆積
する。そして、そ
の南北両端では浅
く不明瞭なもの
となっている。出土
土器は細片のみで
ある。

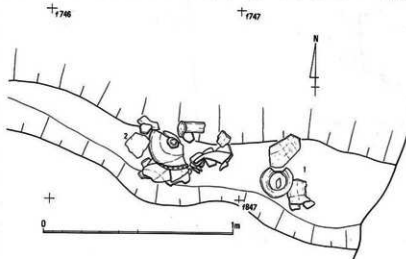


fig.78 Eトレンチ第4遺構面c 溝S D61土器出土状況図

溝SD60 この溝は、Eトレンチ中央部を横切る東西方向の溝で、やや弧を描く。幅2.0m、深さ0.9mを計り、断面は「V」の字形に近い逆台形状を呈し、堆積土はやや粘質気味の砂質シルトが主体であり、黒味があった暗灰褐色系のものである。これも出土土器は細片のみであるが、溝SD62とともに、畿内第V様式新段階から、庄内期の幅でとらえておきたい。

溝SD59・459 この溝はE4グリッドからEトレンチにまたがりほぼ南北方向にはしる溝で、下部の河道の影響を受けた河道状のものである。荒砂を多く堆積土に含む。砂層中より、流木、

木製品、土器を多く含み、畿内第V様式に属している。

Eトレンチ南端 Eトレンチの南端は北側ほど削平されておらず、3面に細分でき溝S-S D12が各面で主体的な役割を果たす。c面は幅1.4~2.5mのS-S D12下層の断面「V」の字形の溝を検出している。深さは0.8mで、暗緑灰色砂質シルトが下部に、暗オリーブ灰粘質シルトが上部に堆積するが、遺物は土器片がわずかに出土したにすぎない。他には、溝の南東部に落ち込みが見られる。

第4遺構面bでは、幅1.6~4.0mで断面皿状に落ちる深さ0.7mの溝S-S D12上層を検出している。

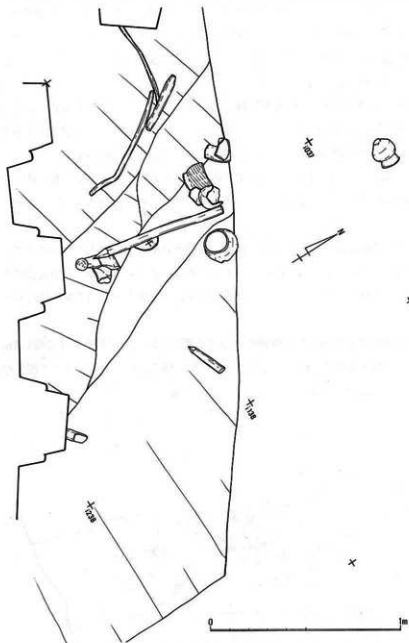
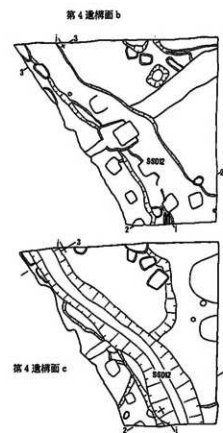
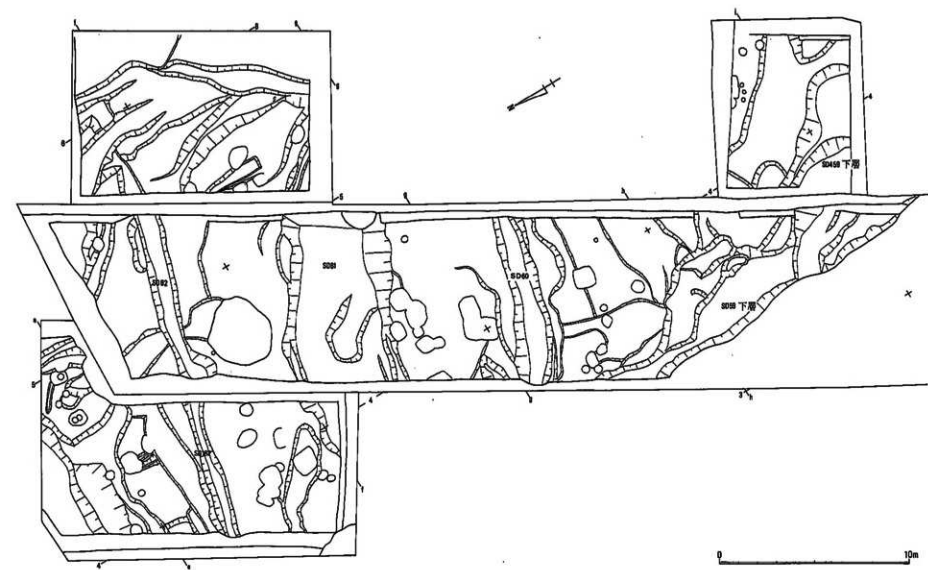
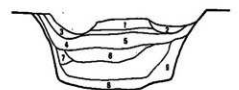
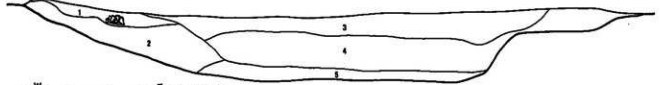


fig.79 E4グリッド第4遺構面b
溝SD459下層遺物出土状況図



0 10m

Eトレンチ第4-c SD60
Eトレンチ第4-b SD60
T. P. 6.0m



Eトレンチ第4-b SK46 T. P. 6.0m

1. 灰褐色土、やや砂多心
2. 緑灰色粘質シルト、褐色粒、砂まじり

1. 灰色シルト
2. 灰オリーブ色砂質シルトと薄灰色粘質シルトの互層
3. 灰色土、砂まじり
4. 灰白色泥砂、中砂互層
5. 灰オリーブ色中砂

1. 灰色粘質シルト
2. 灰オリーブ色細砂質土
3. 薄灰色シルト、粘質おびる
4. 灰色土、砂まじり
5. 灰オリーブ色中砂
6. 灰色粘質シルト、砂まじり
7. 緑灰色粘質シルト
8. 薄オリーブ灰色粘質シルト、砂まじり
9. 緑灰色シルト、やや粘質

0 2m

fig.80 E区第4遺構面b・c 平面図及び横断面図

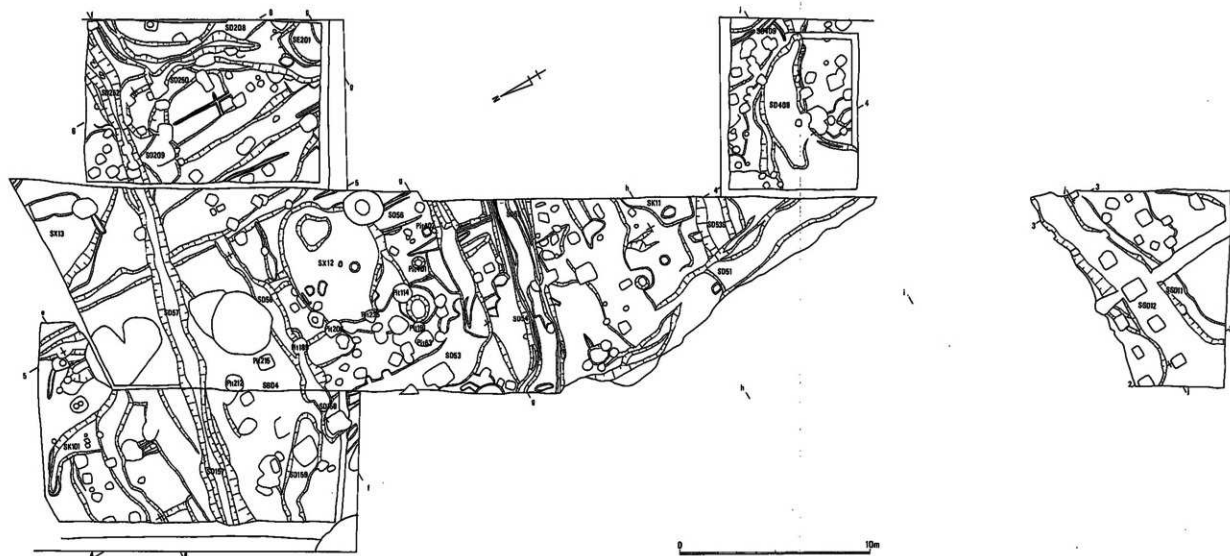


fig. 81 E区第4建群面 a 平面图

灰褐色系の粘土を埋土とし、c面の溝S-S D12下層とは溝肩を異にする。これは、c面の溝の落ち込みの影響を受けたものと考えられる。

第4遺構面aは、その溝の落ち込み状態の起伏となっており、遺構面全体は極度に酸化を受ける。

第4遺構面aは、上位の第3遺構面の影響がそのまま残っており、そのd面とはほぼ同一レベルである。したがって、かなり複雑な遺構面となっているにもかかわらず、この期の遺構がE区にまんべんなく認められる。それらには、円形落ち込み、溝、土壌がある。円形落ち込みS X 13 これは下面のE区北端の溝の落ち込みを利用したと考えられる深さ0.4mのものである。平面形態については、北側が調査区外であるため、その全容は明らかでない。その中央部に相当する位置には、南北方向に幅1.28m、長さ2.77m以上の2段に掘り込んだ深さ0.3mの長方形土壌を検出している。その土壌の西側側縁中央には、本来、完形で正立させていたと考えられる壺形土器が出土している。後述する円形落ち込みS X 12の状況と考え合わせ墓墳である可能性が極めて強いものである。

円形落ち込みS X 12 Eトレンチ北側に位置するもので、これも、下部の溝S D61の落

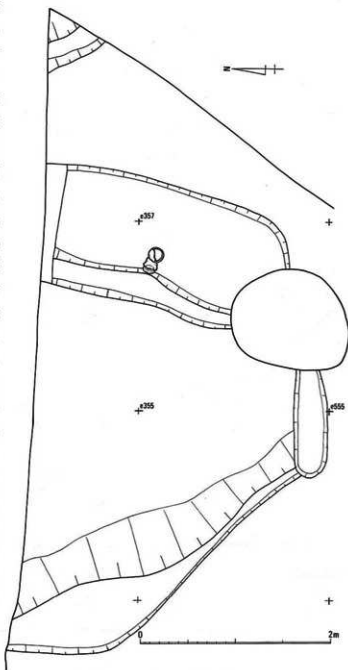


fig. 82 Eトレンチ第4遺構面b
円形落ち込みS X 13土器出土状況図

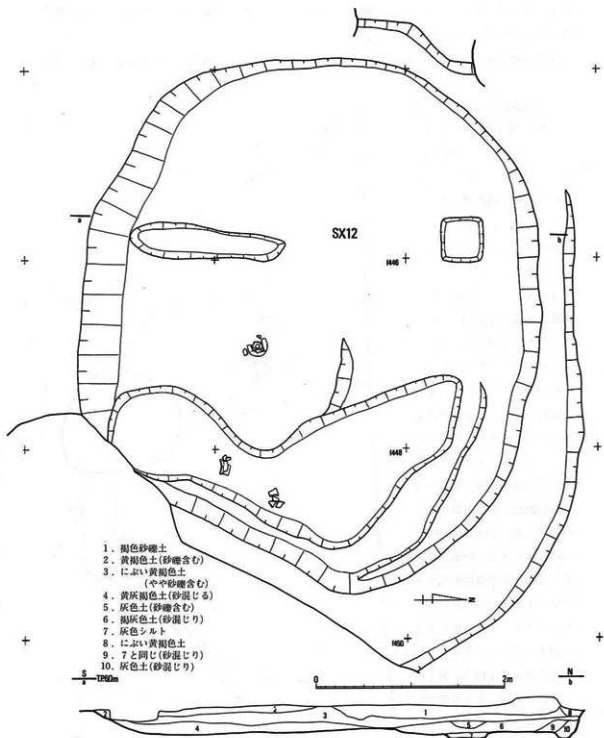


Fig. 83 Bトレンチ第4遺構面a 円形落ち込みSX12平面、土層断面図

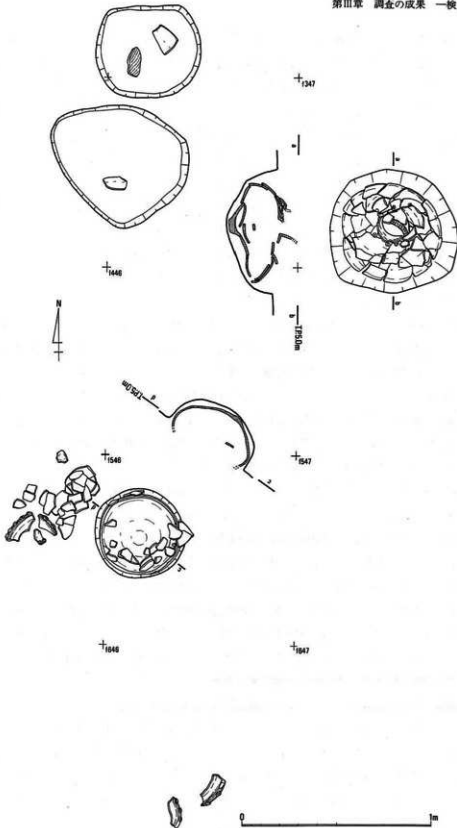


Fig. 84 Eトレンチ第4遺構面a 円形落ち込みS X 12内土器棺他出土状況図

ち込みを長径7.0m、短径5.68m、深さ0.3mの楕円形に整えたものと考えられるものである。その際に、東側が深く掘り込まれ、淡青灰色砂質シルトを含む日月形の落ち込みとなっている。下層の凹凸を平坦にならすように、灰褐色系の土が厚さ0.15m堆積している。その上面から径0.5mをこえる位の円形のピット4個が切り込んでいる。北西側の2個には、土器片のみが出土するだけであったが、東、南側の2個には大形の壺形土器が正立して埋め込まれていた。

東側のものは頸部を打ち欠いた上に、その上部の穴を隠すように別個体の3分の2程を用い被せている。双方の土器は肩部付近に刻み目突帯、円形浮文という装飾文が付く。南側のものは下半部のみが出土しているが、その北西側と南方に同一の壺形土器の口縁部付近の一部が散らばっている。これは、その上部が奈良時代頃に擾乱された結果と考えられる。両者は畿内第Ⅴ様式新段階に属すると考えられ、土器棺として使用されたものと推定される。上層は黄褐色系の土で埋没するが、これらには、奈良時代頃の土器片を含んでおり、この落ち込み上部を削平、整地した際の堆積土と考えられる。

溝S D57・157・257 この溝は北端に位置し、下部の溝S D62を掘り直したものと考えられ、幅0.8～2.0mの東西方向の直線的なものである。断面は「V」の字形を呈し、黒褐色の砂質シルトを埋土とする。埋土中よりは、布留期古段階の土器が入る。この溝と平行して南側に落ち込み状の溝S D58・159が存在する。またE1グリッドでは落ち込みS K101、E2グリッドでは溝S D209、250、208の南北方向の不安定な形状のものが溝S D57群と合流ないし切り合う。

溝S D53、54 この溝もまた、Eトレンチ中央に位置する溝S D60の上にある。ただ、溝S D60の埋没後、その両肩付近を0.2～0.5mの幅で断面「V」の字形に掘り込んでいるだけである。その2本の小溝は東西方向で平行し、トレンチ西端で北へ屈曲して「L」の字形気味になる。堆積土は黒褐色系の粘質シルトであり、布留期と考えられる。

この2本の小溝と平行して幅2.0mの広い溝S D53が2～3m北側に存在する。この溝は深さ0.1～0.2mの浅いものであるが、明瞭に「L」の字形に周っており、先の円形落ち込みを囲むようにしている。これと溝S D58が同一の溝とすると一辺9.0m程の周溝基と考えられなくはない。また、同様にE2グリッドの東端にも溝S D208で囲まれた円形状隆起を呈するものがある。

溝S D51 この溝もまた、下部の溝S D59の影響を受けた南北方向のもので、幅2.5mと推定されるものである。堆積土は黒褐色系の粘土であり、東西方向の溝S D53、408を切っている。また、溝S D53に切られて、不定形な土塊S K11がある。

第4遺構面aでの確実なピットはf4区南東隅のPit 401と402である。径0.4～0.5mのもので、柱穴と考えられるが建物として成立しない。埋土中より、高環形土器片などが出土する。

E区の第4遺構面は、以上のように削平がはなはだしく、溝状遺構の検出が主なものであったが、それらの溝には周溝基の周溝の可能性のあるものがある。特に削平が大きいa面において、溝S D53、54、58、159、208、250、408、S K101などがそれとしてあげることができる。したがって、8基の可能性はある。

B. F区

F区の第4遺構面も、第5遺構面の砂層堆積が微高地状となっている。そして、F区の特徴としては、それらを利用して周溝墓を築いていることである。

第4遺構面dは、周溝墓を築く前段階のゆるやかな起伏をもつ面であり、上部の影響以外にはF1グリッドで落ち込み状の溝を検出したにとどまる。ただし、Fトレンチについては、周溝墓保存のため掘りおろしを行っていないため分からない。

第4遺構面cより上部は、それぞれの面に周溝墓を検出しており、層的にもその前後関係を把握することが可能である。以下、周溝墓との関連性を考慮に入れ、各遺構面を見ていきたい。

第4遺構面c 第4遺構面cは、1ラインに沿って微高地状に南北に起伏するが、その上に2基の周溝墓が南北に並んで築造される。南側に第1号墓、北側に第2号墓が位置し、それぞれの周溝が0.5m程切り合っており、第1号墓が先行する。それら主軸とは10m程離れ南北方向に平行するF2グリッドの溝SD206が存在する。

溝SD206 溝の東側が調査区外であるため、幅などの全容は不明であるが、断面逆台形を呈するものと考えられる。この南北溝の延長はB区で見当たらないことから、周溝墓の周溝の可能性もある。溝底は比較的平坦な面をなし、その上に0.3mの厚さの暗灰褐色荒砂を含むが、遺物はほとんどない。それに対して、青灰色系のシルト質を埋土とする上層からは、完形の土器を含んで、約20個体分程の土器群が出土している。土器は西側法面の北半分に集中するが、出土のあり方に統一性はない。これらの土器群は第1号墓と併行ないし、やや滞る時期と考えられ、畿内第V様式新段階に属する。

F3グリッドは第4号墓の周溝SD320と重複した南北溝SD321とピット3個を検出している。溝SD321 溝SD321は南北方向の幅1.8m、深さ0.3mのものである。断面皿状を呈し、埋土は暗茶灰色の粘、砂質シルトである。

〈周溝墓〉

周溝墓と判明するものは全てで4基を検出しているが、第4遺構面cでは2基が上げられる。第1号墓 第1号墓は群中の南側に位置し、その北側半分を検出した。墳形は非常に特徴的であり、幅6.5m、長さ4.5mの方形の突出部を有するもので、その主丘は一边12m以上の長方形状を呈すると考えられる。一見、前方後方形状をなす特異なものである。

墳丘はわずかな微高地上の主軸ののって立地し、その上に盛土を少なくとも0.4mの厚さで施して形作られている。盛土は暗茶褐色砂質シルトの表層の上に盛られ、使用盛土のほとんどは黄褐色系の砂質及び粘質シルトで、表層付近の土砂によって主に供給されている。ただ、土中の鉄分の酸化によって、土色に変化をきたしている可能性が大きく、土砂採取範囲の限定は困難である。盛土方法については、基本的には周縁から盛っているが、それより中を2～3mの範囲に薄く敷きのばしているのが特徴的であり、使用土砂の土質から生じるものであろうか。また、主丘部分の盛土を先行させているようである。この墳丘隆起の最終的な削平は近世に至る。

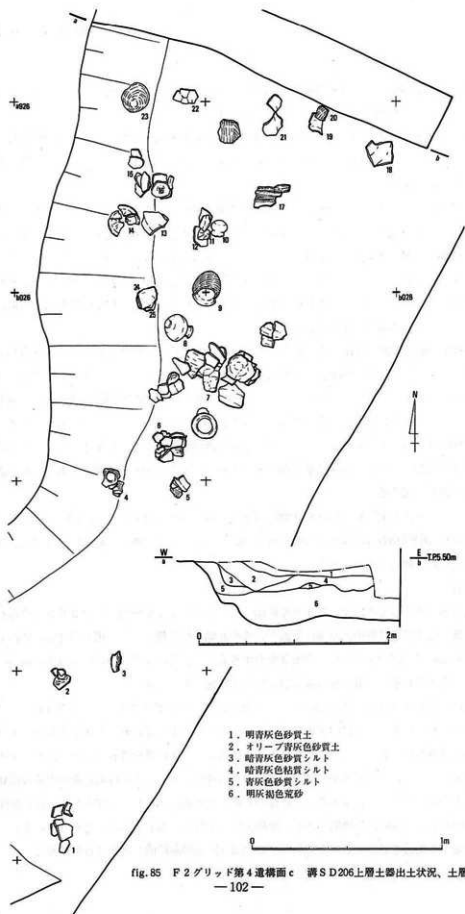


fig.85 F2グリッド第4遺構面c 溝S D206上層土器出土状況、土層断面図

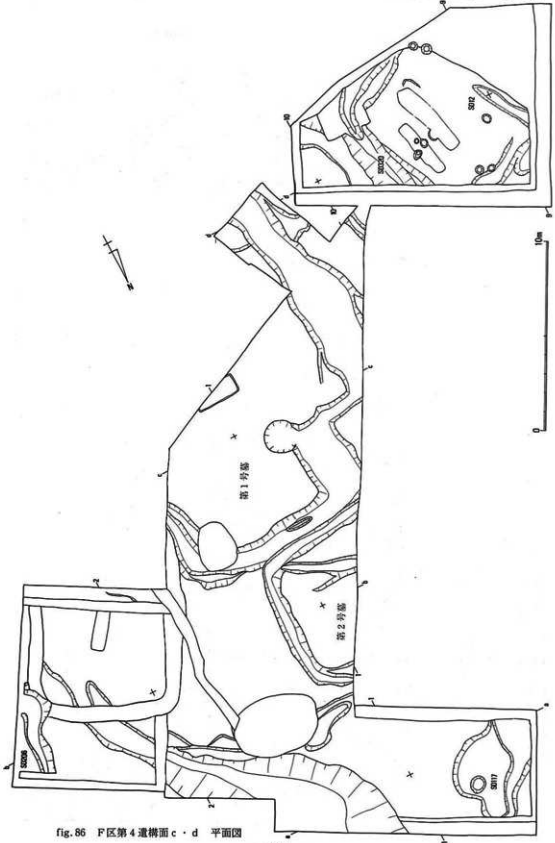


fig. 86 F区第4遺構面c・d 平面図

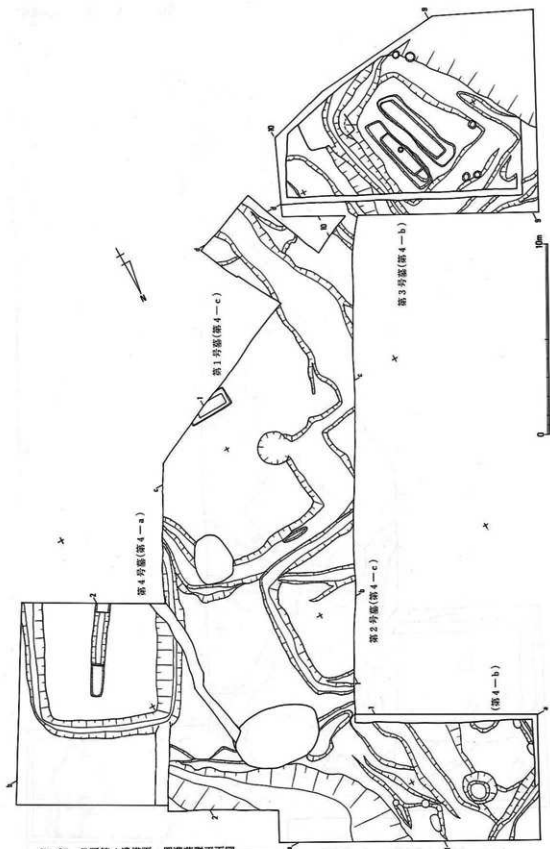


fig. 87 F区第4号坑面 周围墓葬平面图

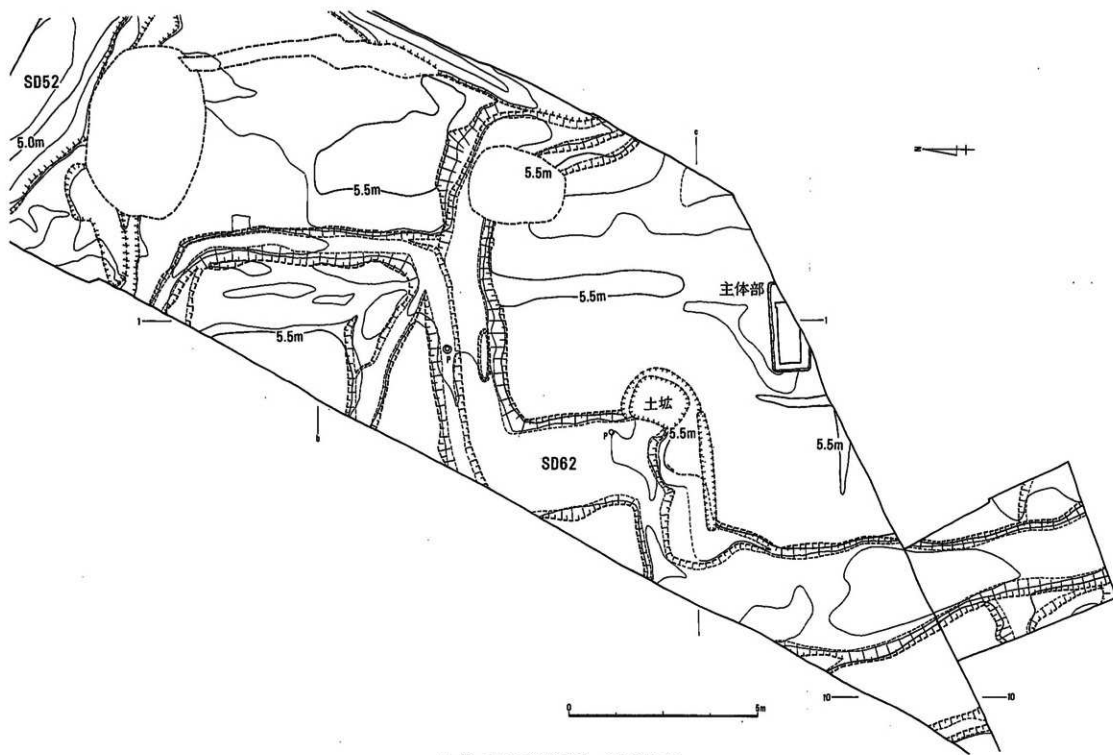


Fig. 88 Pトレンチ第4連構面c 第1号基平面図

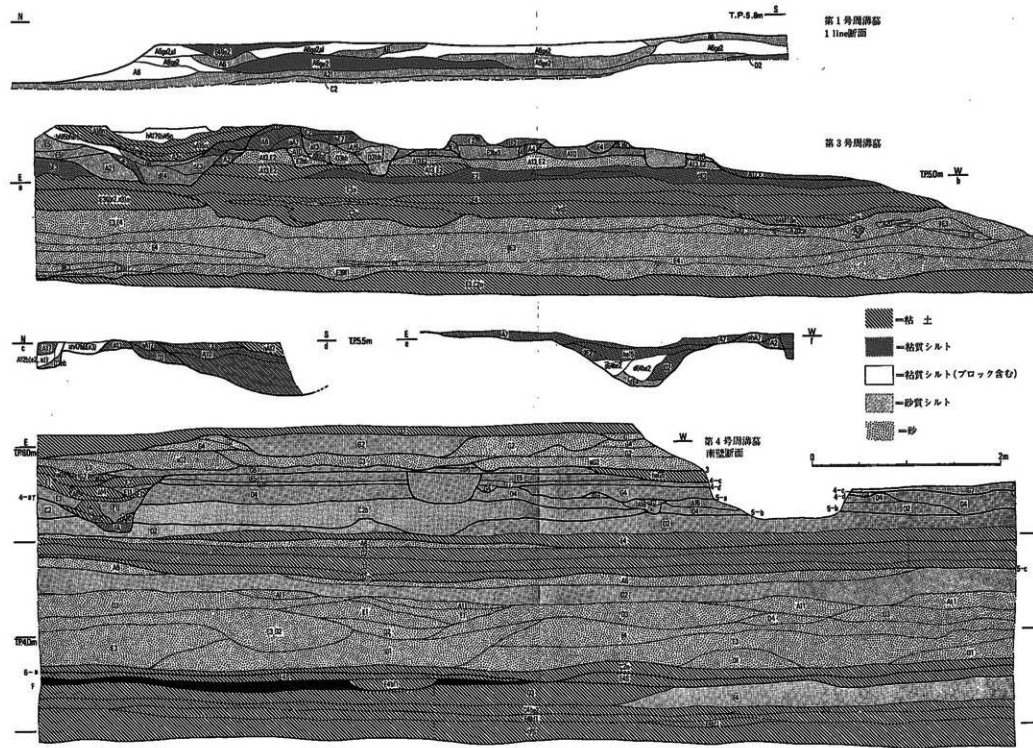


fig. 89 F区第4連構面 第1、3、4号基土層断面図

周溝 S D62は、幅1.2～3.0mの比較的に幅広いもので、断面「コ」の字形を呈する。ただ、墳丘側が比較的に急な斜面で、外側がやや緩慢である特徴をもっている。また、全体に西側及び南北（主軸）方向が幅広く、東側及び東西方向が幅せまくなっている。特に、東側は「U」の字形及び「V」の字形を呈する。これは、墳丘が微高地状地形に立地するとはいうものの、東側が全体に高くなっていることと、墳丘主軸の長軸側面からの土砂採取が中心となったための差であろう。この周溝は、墳丘の突出部の北側端を完全に輪郭づけ区画しており、それ以前の側辺中央で溝が切れる陸橋部的なものをもつ方形周溝墓とはやや異なるものである。

周溝内埋土はやや暗い黄褐色系の粘質がかった砂質シルトが主体であり、墳丘盛土と共通することから、そのほとんどが第一次墳丘崩壊土であったと考えられる。周溝内より、西側くびれ付近の最下層より完形の壺形土器が転落した状態で出土している。また、同じくその付近の上部から切り込む溝 S D55の埋土中より、二重口縁の大形壺形土器片が多く集中して出土している。この溝 S D55は、第4遺構面 b に属するが、周溝 S D62の埋没後、新たに第1号墓の墳丘裾の輪郭を幅0.5～0.7m、深さ0.4mで帆立貝状に掘り直したものである。その埋土は淡茶褐色系の粘質シルトで周溝 S D62とやや異なるが、埋土中より出土した壺形土器片は第1号墓墳丘上に本来、存在したものと考えて間違いないであろう。これらの土器より、第1号墓は畿内第V様式新～末段階（～纏向1式）に属すると考えられる。

主丘中央のやや北よりのFトレンチ南端に東西方向の主体部を検出している。2.3×1.1mの長方形で深さ0.3mの墓壇である。掘り方内は、黄褐色のブロック土を含む灰色シルトを埋土としており、その西よりに木棺の痕跡が認められた。木棺は外寸で1.36×0.58mを計り、厚さ8cm程の側板及び小口の輪郭を確認した。木棺内埋土はオリーブ褐色の砂質シルトで、底板の確認は

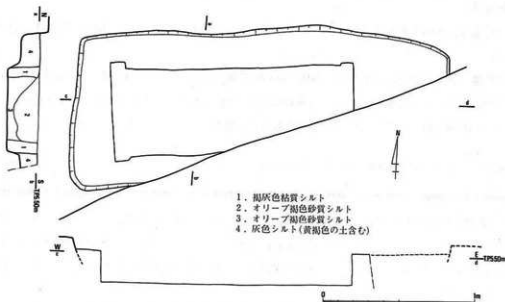


fig.90 Fトレンチ第4遺構面c 第1号墓第1主体平面、土層断面図

できなかったが、側板を小口板によってはさみ込んだ形式の組合せ式木棺と推定される。墓域内よりは、土器片2点が出土したのみである。

主体部は他に検出できなかったが、主丘の中央北よりに検出していることから、複数主体であると見てさしつかえないであろうが、極めて限定的な配置であったであろうことが推測される。第2号墓 第1号墓に北接して位置する周溝墓であり、両者周溝が切り合っている。それは、第1号墓周溝S D62がある程度、埋没した後に北端肩部に南側周溝を切り込んでいる。周溝S D53・54は、幅は均一で0.8~1.0mを計る。断面は「U」の字形を呈し、深さ0.35mである。埋土は第1号墓のものと同様な組成をなすが、暗く、より粘質がかったものである。周溝内よりは、土器片が主に南東側に集中する傾向を見せるがまとまらない。

ただ、第4遺構面aで検出した土器群4が、周溝墓南東の墳丘上隅にあたることから、墳丘上に置かれていた可能性があり、早期に破損転落したものの断片が周溝南東側に入り込んだ可能性がなくなはない。また、土器群1、2に関しても北接することから、その関連性を考えることができる。こうした関連性を認めるならば、上部での土器群の検出は、墳丘頂部が高位置にあることから、その隆起面を上面扱いで調査してしまったことになる。第1・4号墓の主体部についてもその上層面から、輪郭が描ける状況であった。これら土器から推測される時期は、庄内期古段階(纏向1~2式)と考えられる。

なお、第2号墓の墳丘は、一辺6.5mの方形と考えられるが、北側でややふくらみをもつ。墳丘上において主体部は検出していない。

第4遺構面a・bは、第3遺構面の影響が残っており、やや煩雑な面となっている。検出した遺溝は、周溝墓、溝、土塹、ピットなどである。

〈周溝墓〉

周溝墓は、b面でF3グリッドより第3号墓、a面ではF2グリッドより第4号墓を検出している。

第3号墓 第3号墓は、第1号墓の西側5m程の距離をあけて、ほぼ同じ様な軸で並列する。墳丘の西南側は、第3遺構面の河道、溝S D311により切られているためもあり、いびつな台形状をなす9.0×6.3mの長方形を呈するものであるが、墳丘のほぼ全容が分かる。周溝底よりの高さは、0.6mを計る。

墳丘はその上坦面も上部の削平のため凹凸面がはげしく、東側のみ良好に遺存する。西下がり地形上に立地する墳丘には、約0.25mの盛土が残存するのみである。c面で検出した周溝S D321の東側とはほぼ同方向で切り合う溝S D320の埋土である暗茶灰色の粘質及び砂質シルトと類似する茶灰色粘質シルトが、墳丘東縁部に顕著に認められることから、周溝掘削土を横積み状態で盛土したものと考えられる。また、墳丘中央部は、下部の第5遺構面の堆積土と考えられる灰色系の土砂がのる。

周溝は、旧地形の上昇する東側に掘られた部分が良好に遺存する。その東側部分は幅2.0m、

深さ0.6mの断面逆台形の明瞭な溝で、旧地形の微高地を掘り割ったような状況である。そして、墳丘南側部分に周り込み、断面「U」の字形に転じ、墳丘南東隅を明確に輪郭づけている。しかしながら、北及び西側は削平を受けているためもあり不明瞭となり、判然としないが、北側で幅3.0m、深さ0.4mの断面皿状に近い形状を呈する。それは、東、南側のものより幅広いものとなるようである。そして、これがより一層、墳丘を台形状に見せている理由であろう。周溝内埋土は大きく上下2層に大別できる。下層は主に墳丘第1次崩壊土で構成されており、青味の暗灰色系の粘・砂質シルトである。それに対して、上層は第4遺構面aを覆う暗褐色系の粘土が有機質とともに皿状に堆積しており、次の面に至るまで周溝上部は落ち込みみとなって存在することがうかがえる。この土層中及びその上の赤褐色、濃茶褐色の粘質シルトには、多量の土器片を含む。

こうした周溝埋没のパターンは、加美遺跡のE F III N区検出の庄内、布留期の周溝墓と共通したものである。周溝墓に伴うと考えられる土器は、周溝南東隅の下層上において変形土器の完形が出土しており、庄内期新段階（纏向3式）に属する。

墳丘上坦面には、いびつな長方形土壇を2基検出した。それらは南北方向に並列しており、1基は上坦面中央に、もう1基は東側に存在し、双方は主体部と考えられる。両者は0.15~0.2m

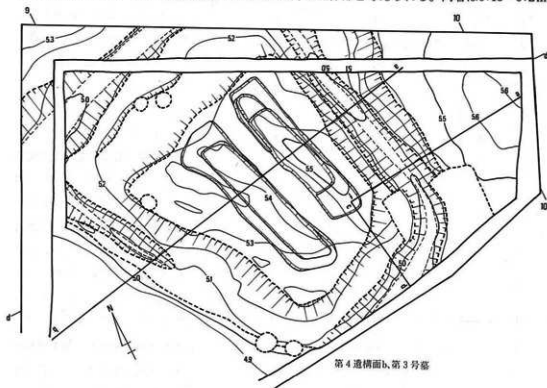


fig.91 F3グリッド第4遺構面b 第3号墓平面図

の深さのみの遺存状態で、底面の不安定な部分の検出であったと考える。したがって、墳丘上坦面西側にはもう1基、主体部が存在していた可能性がある。

中央のものは、長さ5.0mの長いもので幅は1.3mである。そして、その内側東側によって輪郭があり、長さ4.2m、幅0.8mを計る。前者は墓壇掘り方、後者は木棺の輪郭と考えられ、埋土は前者が、暗灰褐色、灰白色の粘土及び粘質シルト、後者が灰色系の砂質シルトであり、下部に暗灰色ブロックを含んでいる。両者とも南西隅が削平されており、もう少し長大なものになるかもしれない。ちょうど、削平を受けた箇所からは、上層のa面としてとらえている土壌があり、それより完形の平底の甕形土器が横位で3個体分出土している。これは第2号墓と土器群との関連性と共通するものかもしれない。

東側のものは、比較的安定した長方形を呈する。長さ4.45m、幅1.1mの大きさの掘り方の

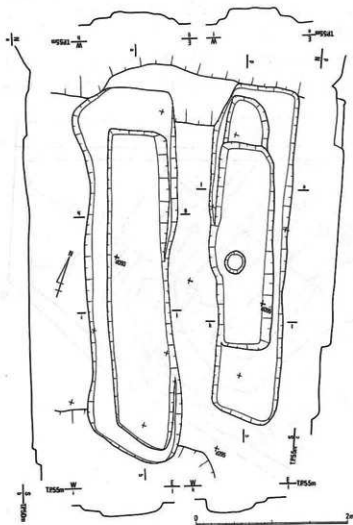


fig. 92 F 3 グリッド第4遺構面 b .
第3号墓主体部平面、断面図

中に2.75×0.75mの輪郭を検出しており、中央のものと同様に解釈できる。木棺の輪郭にあたるものは、逆に西側によっている。埋土は、前者が淡赤褐色、明黄褐色の砂質シルト、後者が暗青灰色砂で黄灰色砂質シルトブロックを含んでいる。また、中央は上面より切り込まれたピットによって乱されている。

第4号墓 第1号墓墳丘の東側くびれ部に合わせたように、墳丘南西隅で両者の周溝が切り合う。無論、第4号墓の周溝が切り込んでおり後出するが、そのため4基の周溝墓中、唯一、軸を異にする。この軸のずれは、周辺遺構の空間に当てはめたようなあり方を示し、第4号墓周辺の東側にも周溝墓が存在することを示唆するのかもしれない。

墳丘は、北側の3分の2程を検出しており、ほぼその形状と規模をつかまえることができる。

その規模は第3号墓と類似し、9.0×7.0mの大きさに明瞭な長方形を呈する。墳丘上坦面は若干、平行四辺形気味であるが、その裾部は整然とした矩形を削り出してあり、その景観は前三者とは異なり、丘陵上にある前期古墳となんら変わらない。

墳丘は、後で述べるb面の溝SD252の東端を切っはいるものの、全体に西下りの平坦な面をなす。墳丘盛土は、当時の旧地表面と考えられる淡オリブ、淡灰黄色の砂質シルト上に積まれたと考えられるが、その大半は削平され、主に、西側上坦面にオリブ系の粘質シルトが薄く被っているにすぎない。したがって、調査によって検出した墳丘部のほとんどは、周溝による削り出しの部分となる。

周溝は東、北側が幅1.0mと安定しており、東側が1.5mと幅広い。深さは0.6mであり、断面「レ」の字形を呈する。つまり、墳丘側斜面の勾配は強く、外側は緩慢な傾斜であり、墳丘側を力強く削り出している。

埋土は、第3号墓で触れた暗褐色系の粘土がその上部に3分の2以上を占め、第4遺構面a上部の遺構埋土の特徴をよく示している。最下層は東側周溝が黒褐色の粘質シルト、西側周溝が黒味の青灰色粘質シルトである。西側周溝SD58最下層よりは、ミカン割りした断面三角形を呈する2.0m前後の長さの角材状の木材が束ねられていたのが分離したような状況で出土している。そして、

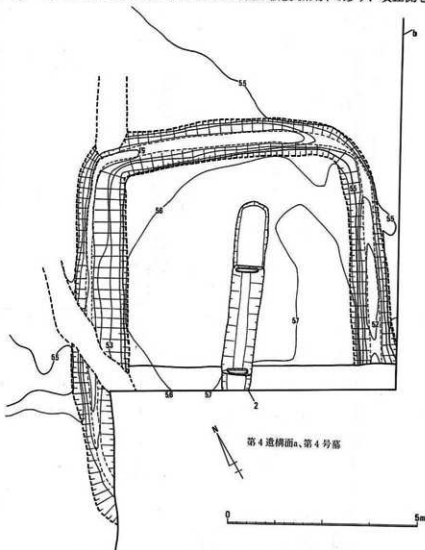


fig. 93 F2グリッド第4遺構面a 第4号墓平面図

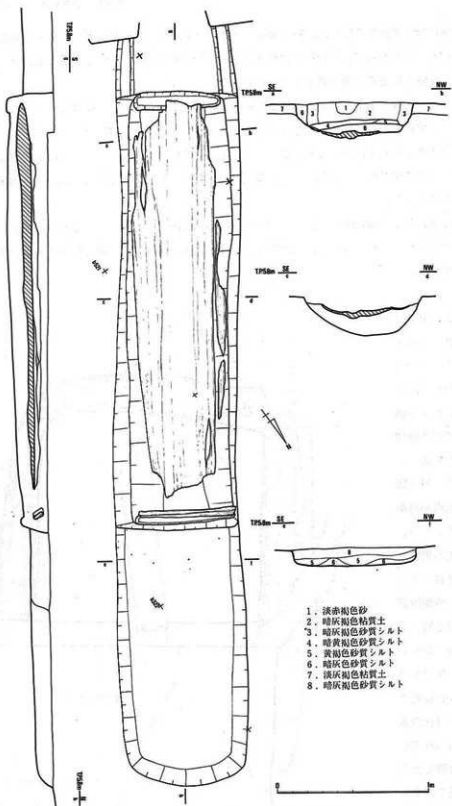


fig.94 F 2 グリッド第4遺構面 a 第4号墓 墓壁及び木棺

その間の直下より、小型丸底壺が出土している。当周溝墓に関連する遺物はこれのみであり、他に東、北側周溝内より出土する遺物があるが、その全ては溝 S D252の土器片の混入である。この小型丸底壺より、当周溝の時期は布留期古段階（纏向4式）に該当すると考える。

周溝の掘削は、弥生時代からの方形周溝墓の掘削パターンをよくとどめる。それは、東西の周

溝によく看取され、一側辺中央の掘削深度が深く、幅もふくらみ気味となる。これは墳丘側の溝肩が明確な方形をなすのに対して、外側肩が隅丸方形になることにもまた表現されている。ただ、西側の北隅が深くなるのは旧地形が西下がりであり、しかも北西にも傾くことにより、北西隅の掘削深度が大きくなったと考えられ、盛土採取量の増大の必要性も生じたことに間違いない。北側短辺は、これと同じ理由でその溝底が西側に下降する。こうした前時代からの特徴をもつものであるが、墳丘四隅を掘り残さずに、その墳丘隅を明確化していることに前時代との差は大きく導き出せる。

墳丘上平坦面中央には、墳丘主軸よりやや東にふって、長い墓塚を検出した。墓塚内には木棺が納まるが、木棺掘り方と墓塚掘り方で2段になっている。墓塚掘り方は南側が調査区外となり、全長は分からないが、調査区内で5.0mに及ぶ。木棺が中心に据えられていたと仮定すると6.24mの長さとなる。この掘り方は幅が0.83m、深さが0.13mで、底は平らな断面「コ」の字形を呈する。埋土は、灰褐色系の砂質シルトである。この墓塚の中央あたりであろう部分に、木棺の輪郭に合わせて、深さ0.25mまでさらに掘り込んでいる。それは長さが2.88mで幅が同一である。小口には、板をあてるために幅0.1m前後の溝を掘り込んでいる。そして、その中に木棺身を納めている。

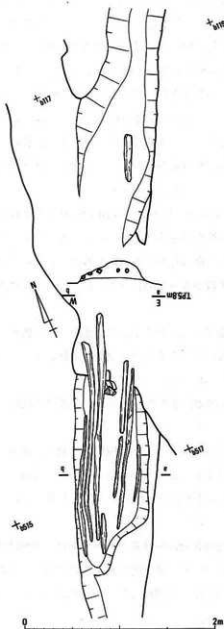


Fig. 95 Fトレンチ第4遺構面 a 第4号墓西側周溝 S D58遺物出土状況図

木棺は、下端のみ木質を残している。その残存範囲は2.6×0.63mであり、断面三日月状を呈する。木質の周囲は粘質化しているが、わずかに木質を残すものがあり、最も厚いところで10cmある。それらと連続して、掘り方側面に粘質化した土と木質が立ち上がっていき、中央部では特に顕著であった。調査時の所見を総合すると、少なくとも木棺身下半部は割竹状を呈しており、割竹形木棺と称する範囲と理解した。

そうであるなら、墓壇の深さは最低0.68mが必要であり、墳丘上部には0.5mの厚さの盛土を必要としたことになる。また、0.5mの後世の削平を受けたことになるが、これを傍証するものとして、第3遺構面の奈良時代を中心とする掘立柱が、第1～4号墓上には顕著に検出できなかったことをあげることができ、本来、掘立柱建物が存在したかどうかはともかくとして、F区の奈良時代前後の時期には、これら周溝墓の起伏が少なからず影響していたと考えられるのである。

さて、上蓋については、南側の断面の木質上に2～3cmの細層が見えるが、これは、この層及び下層が砂質シルトであり、上部が暗灰褐色粘質シルトであることから考えると、砂質シルトは埋棺後、早期のうちに堆積した土砂であり、上部は残された空間を徐々に埋没させた土砂と理解することが可能であり、上部空間が長く保たれたものであると考える。

この木棺の木質の北側小口部には、長さ62cm、幅8cm、厚さ2～3cmの板材状の木質を検出しており、これが小口板として、中央部の割竹形木棺をはさみ込んでいたと考えられる。その下に先述したように小溝を検出しているので、この溝に板材をあてがったと考えられる。南側に関しても同様であり、小溝の中央あたりまで棺身の木質が及ぶため、組木として板材には納溝が掘り込まれていたであろう。

ところで、この木棺の南北両小口に残された墓壇掘り方であるが、木棺部分はその掘り方を一旦、埋めてから掘り込んだものなのか、木棺を据置いてからその小口両側を土砂によって充填したものかは判断しがたい。ただ、土砂は丁寧に埋められていたようである。

これら墓壇内からは土器片が出土するが、溝S D 252に伴う時期であり、直接に当周溝墓に伴うと考えられる遺物の出土はなかった。

溝S D 52・152・252 この溝は、Iトレンチ及びI1・2グリッドで検出しており、南東-北西方向に蛇行するものである。明瞭な掘り込みはなせずに、なだらかに落ちる不安定な溝で、F2グリッドからはじまり、その南側で最大7.0m幅が見込まれる。断面は全体として、皿状を呈しているが、大きく2段の肩をもつ。

堆積土は粘質系で、下部程、粘性が強く、おおむね3層に分けることができた。上層は淡茶灰色、中層は暗青灰色、下層は暗灰色系の色調を呈している。最下面にわずかの砂質シルトが認められるものの、ほぼ水流の痕跡は残さず、泥土状態で徐々に埋没したものと考えられる。中層の前後に132個体分としての土器のとり上げを行っている。

器種別の各内訳は、図化192点に対して、壺22%、甕42%、高坏25%、鉢10%、器台・甕形土器1%の各々の土器の比率であった。この数値は、甕形土器が全体の5分の2以上を占め、壺、

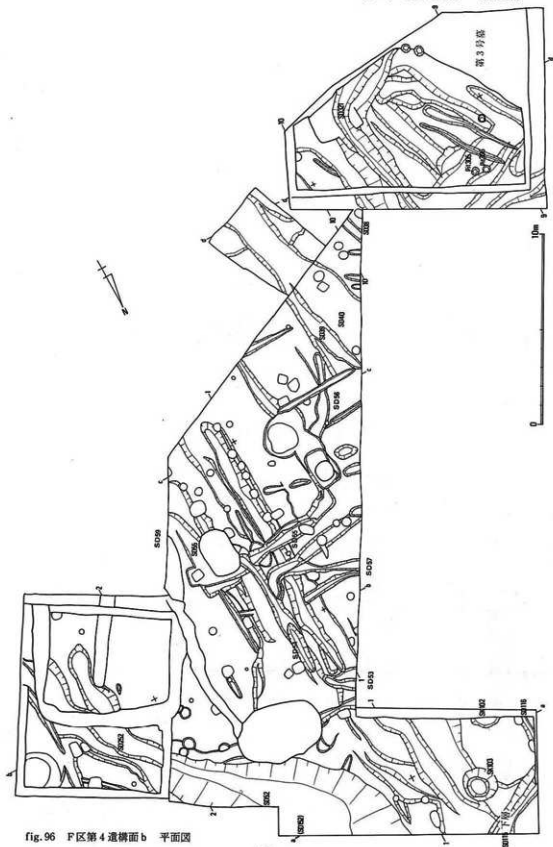


fig.96 F区第4遺構面b 平面図

高坏形土器が同等の比率で続くが、F2グリッドのE・F群がほとんど甕形土器で構成されることから、それらを差し引くと、F1グリッド、Fトレンチのこれら三者の割合は同様な比を示すこととなる。

特にFトレンチで出土した土器群は、一般的に考えて高坏形土器の出土率が高い。高坏形土器は横位のもの、正位であったものが倒れたものや正位のまま脚部が土圧により坏部を突き抜けたものが見られる。それらは0.5m位の間隔で、法面下沿いに本来、設置されていたとも考えられる。そして、それらを中心として他の器種との組み合わせがあるのかもしれないが、検討していない。また、F2グリッドの甕形土器群は横位の状況のもので占められている。本来、正位ないし横位で置かれたのであろう。

こうした状況から、溝SD52・152・252内の土器群は、かなり意識的に据置かれた祭祀的な色彩が濃いものと考えられるが、時期的には弥生時代末から、庄内期（纏向1～2式）の時期が考えられる。この時期は、第1、2号墓と併行することや、a面の土器群との関連性を考え合わせると、それら相互の関係において興味深いものがある。

特異な土器としては、底部が平らで、楕円形を呈する口縁部外面に沈線をもち、そのすぐ下の楕円形の長径両端にあたる部分に2つの孔を穿つ鉢形土器が出土する。

溝SD41 a面を覆い、しかもその遺構埋土が特徴的なのは暗褐色系の粘質シルトであるが、第3、4号墓の周溝に認められる以外にも、その埋土として明瞭に見られるものがある。この溝はその一つである。幅0.3～0.4m、深さ0.4mの、大まかには断面「V」の字形を呈するしっかりとしたもので、Fトレンチの北半において、南北方向にわずかに弧を描いている。

土壌SK37/Fトレンチの第1号墓西側くびれ部に穿たれた、やや楕円形気味の土壌である。長径2.62m、深さ0.5mを計り、上部はゆるやかな勾配で、下部は摺鉢状に落ち込み、その底部は凹凸面をなしており、いびつなものである。埋土は上層では褐色がかかるが、下層はやや暗い青灰色の粘質シルトである。

出土した遺物は土器細片ばかりであり、そのうちには、下部の第1号墓に伴うと考えられるものが含まれるが、小型鉢の下半が出土しており、その時期に当たることが適当であろう。

土器群1 F区のア面には明瞭な掘り込みをもたずに、土器が集中する部分があまべんなく見られる。土器群1は

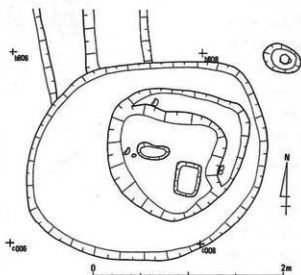


fig.100 Fトレンチ第4遺構面a
土壌SK37土器出土状況図

Fトレンチ a 1区に見られたもので、幅0.8mの溝S D46の上部に堆積する。土器は西側に集中する傾向が認められるものの、その出土状況には規則性が見い出せない。また完形品に近い土器もあるが、破片となっているものにはその接合関係がほとんど見られない。このことから、土器群1の土器類は、近辺に存在した土器類の原初の位置から、溝のくぼみに引きずり落とされたと推定される。土器類自体の時期は、弥生時代末（纏向1式）前後になり、a面としては溯るものである。

土器群2 土器群1に東接するもので北東-南西方向の長さ2.3mの長円形の土壌状の落ち込みを中心として土器が出土している。土器の出土状況は、土器群1と類似し、時期も同様である。土器類は落ち込み中央部でとぎれ、両端2群に分かれて出土し、変形土器の比率が高い。

土器群1、2は、第2号墓と北東隅で近接することから、その関連性が考え

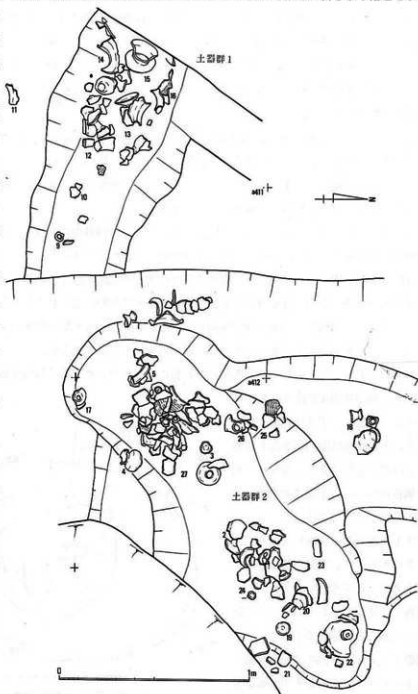


Fig.101 Fトレンチ第4遺構面 a 土器群1及び2出土状況図

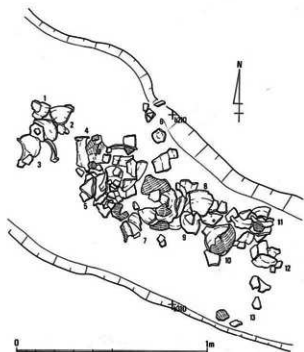


fig.102 Fトレンチ第4遺構面 a
土器群 4 出土状況図

られる。

土器群 4 Fトレンチ中央西側に北西—南東方向にはしる溝 S D48の東半部上層にまとまって出土する土器群である。溝 S D48は、第4号墓と軸が共通する。土器群 1、2 に比べて、比較的土器各個体がまとまっており、土器片がばらつくといった感じは受けない。したがって、かなり原初的位置に近かったものと考えられる。

拡張区の土器群 第1号墓の西側周溝 S D62の上部に位置する地点で、7群の小さな土器のまとまりが認められた。それぞれの群及び、土器に統一性はまったく見られない。また、土器の時期も弥生時代末～庄内期(纏向1～3式)にかけての幅が考えられる。したがって、土器群

1、2と同様なあり方であろうか、一部は第1号墓と共通した時期のものがあるので、第1号墓墳丘上に存在していた可能性が高い。

これらの土器群は、ほとんど原初的位置から二次的な移動を伴ったと考えられるものであり、F 3グリッドにおける第3号墓上の土壌 S K301も同様な扱いが考えられる。

以上のようなF区の第4遺構面を検出する遺構の多くは、周溝墓群を中心として展開しているようである。また、各周溝墓の築造時期が層位的にも順をおって追えることから、他の遺構との関連性も考えることが可能である。

各周溝墓は、第1～4号墓の順に築造され、トレンチ部で検出した第1、2号墓の保存のために、道路橋脚の位置変更を行ったF 2・3の各グリッドにおいて、第3、4号墓を検出することになった。これは、前者より後者が後出し、後者の築造においても当方の調査においても、前者の墳丘をさけたという共通性に他ならない。それぞれ、第4遺構面の時期において、周溝が埋没した後も墳丘隆起の中心部には、先行するものを回避していたと受けとれる。また、南側のH区と北側のEトレンチ南端には、(Eトレンチ中央より北側は周溝墓の可能性のあるものがある。)これら周溝墓が連続して分布しないことから考えると、少なくともF区で検出した周溝墓4基は独立した系統性ある一支群として見なされるべきであろう。また、b面の溝 S D52やa面の各土器群などは、それらに付随するものとして大いにその系統性の墳丘構築以外の行動の証として評価できるものと考えられる。

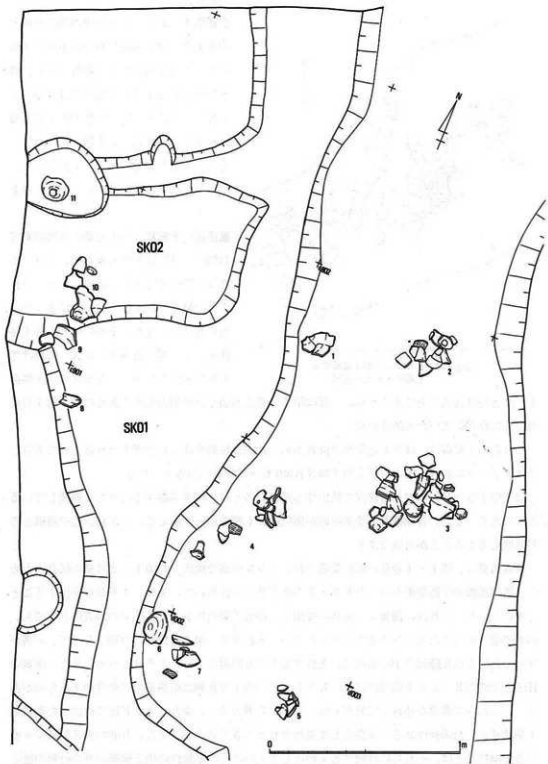


fig.103 Fトレンチ拡張区第4遺構面a 土器出土状況図

C. H区

H区の第4遺構面は、全体的には4面に細分層でき、一部、それに2分層が追加される北端部がある。それらの面はほとんど自然埋没ではなく人為的な整地によるものであり、その範囲はI区中央部までにおよび、弥生時代末から古墳時代前期にかけての主体的な居住域の様相を呈している。その主な遺構は、掘立柱、櫓列、ピット、竪穴式住居、土壇、井戸、落ち込み、溝等である。特に、H区の北端、a～c 4～7区において検出している溝群は、前段階の溝SD80を踏襲し、当遺構面の中心的な時期、全期間におよんで溝の修正と掘削がなされ、維持、管理されているようであり、当該期出土の半数に近い土器がここで出土している。

それぞれの検出面の起伏も安定しており、北端の溝群の谷状の落ちと、H区中心から南へゆるやかに下降する起伏が存在しているだけである。

当該遺構面においては、遺構を多く検出しているのので、主にトレンチ部の土器を出土している遺構を中心に記述を行うこととする。

第4遺構面 d 当面は、第4遺構面を覆うあらかじめの整地土を除去した面である。H区中央部のみが第5遺構面堆積土の微高地に相当し、一部、第5遺構面aと重なっている。掘立柱、土壇、溝が遺構の主なものである。それぞれの埋土は、検出面の黄褐色系の粘・砂質シルトとよく似た土質であり、それより灰色及び粘質がかかるものを主体としており、F区の第4遺構面cと比較的に共通している。

掘立柱 H区中央部に掘立柱が集中し、心柱が良好に遺存しているものが認められる。主にc d 5区で心柱4本、礎板と考えられるもの2本がある。心柱のうち、最も長いものは48.6cmの長さを計り、太いものは径16.7cmを計る。いずれも、立木を切断する際に生じた凹凸を残しており、若干の調整を行っているだけである。したがって、柱底面は中央部が少しふくらむか、尖った形状を呈している。その柱底面下には、pit 451と452において草木を塊状に重ねて敷かれており、ちょうど柱底面を被せたようになっている。建物は柱の検出量の不足から復原することは困難であるが、あえて一間単位で復原するならば、北側のpit 450を中心とするものと南側のpit 451～3のものがある。その場合、柱間は前者が1.2m前後、後者が1.4m前後となる。これらの掘り方内よりは遺物の出土はなく、埋土は、検出面のシルトと変りない場合と暗灰色系の粘質がかかった砂質シルトが主体であり、これらの状況から、第5遺構面に属させることも可能である。

他に当期のものとして、北端溝群法面に存在する遺構が中心的である。その溝群の南側肩口には、土壇SK49が存在する。

土壇SK49 この土壇は、cライン上で検出しており、北側が直線的で南側が弧を描いた東西に細長い半円形状の平面形を呈する。長さ1.89m、幅0.67m、深さ0.2mの大きさのものである。南側法面の勾配は急で、中央が平坦、北側法面がゆるやかで、総じて「レ」の字形の断面を呈する。これは、南側斜面ということもあり、本来2.2m前後の円形の掘り込みであった可能性が強い。また、南側に同様に弧状を描く0.1m程の段もまた、これに伴ったと考えられる。埋土は、

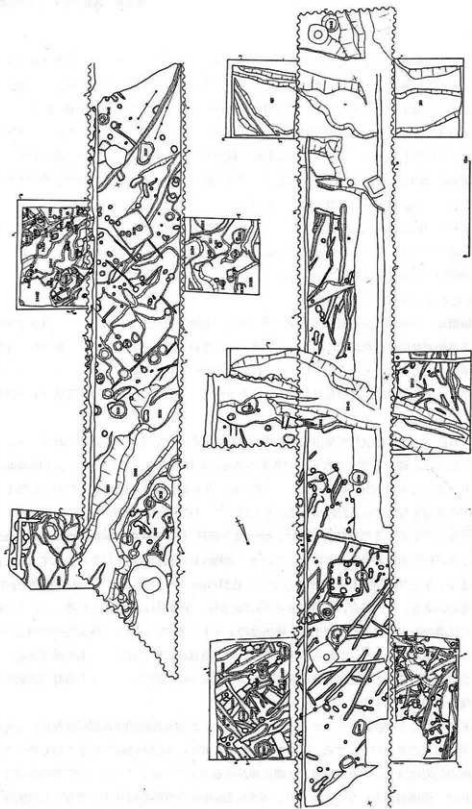


fig. 104 H · I 区第 4 道構面 c 平面図

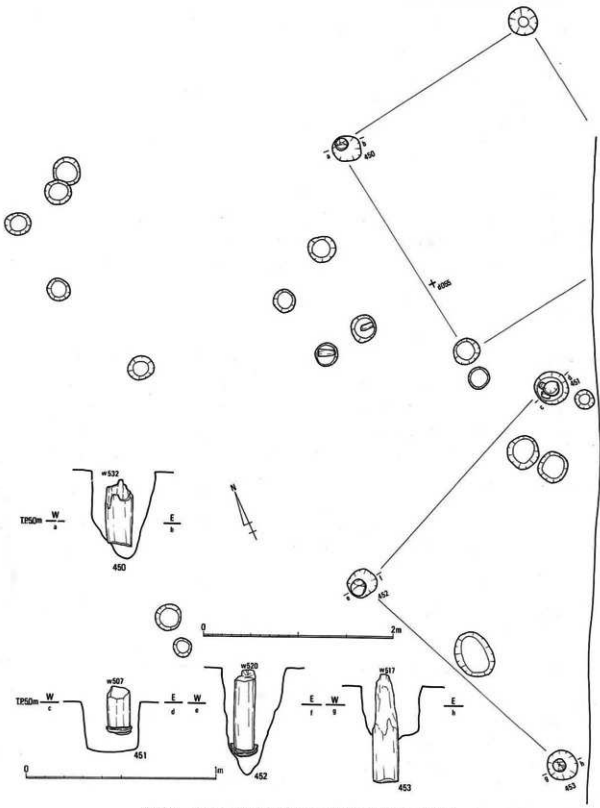


fig. 105 H トレンチ第4遺構面d下 掘立柱集中区平面、断面図

検出面と同様な黄灰褐色の色調を呈しているが、土質が粘質シルトである。出土遺物は、主に東に片寄って、壺、甕、高坏形土器が出土している。

土壌S K61 H区中央南よりのd 4区で検出した土壌である。北西方は調査区外に出るため、その全容はつかめないが、H 3 グリッドにはかからないので、半分近くは検出していると考えてよい。一辺2.0m以上の方形の平面のもので、断面は半円形を呈する。上層は褐色系、下層は青灰色系のややにごった粘質シルトを埋土とする。上層には暗灰色の小ブロックを含むことから、人為的に埋め戻しを行っている可能性がある。上層の出土遺物に関しては、S X10として遺物のとり上げを行っている。深さは0.5mを計り、土壌底はやや不安定であるが一辺0.8m以上の平坦面を作り出し、その中央やや南よりに倒位で据えられたと考えられる完形の二重口縁の壺形土器が一点、出土している。土器は庄内期に属し、土壌は埋土の状況と土器の出土状況とから墓墳であった可能性が高い。こうした検出状況と類似するものに、c面の土壌S K31、b面の土壌S K30、a面の土壌S K07などがある。

溝S D205下層 H 2 グリッドで検出しており、c面として検出する土壌状の溝であるが、トレンチ部のd面に相当する遺構である。その中心部は、H区溝群に2m程離れて存在するが、その北側において溝群に流れ込むような形状で合流、接続している。大きくは、径3.4mの不安定な円形の平面を呈する。断面は楕円状をなし、深さは1.2m程でその斜面は不規則であり、その上部は落ち込みとしてa面まで影響を及ぼしている。最下層の部分は、暗青灰色系の粘質シルトの埋土で長径1.82m、短径1.32mの長円形に落ち込む。埋土中には幅0.5m程の整状の木製品が切断された状況で出土し、その上に、完形の甕形土器を中心に壺、高坏、鉢、甌形土器と石が集中

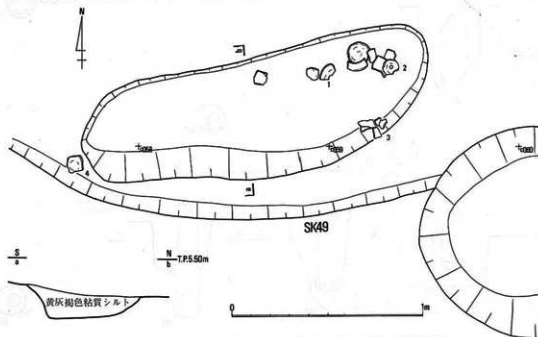


fig.106 H トレンチ第4 遺構面d 土壌S K49土器出土状況、土層断面図

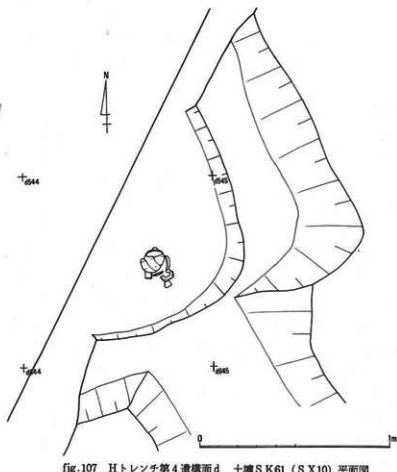


fig.107 Hトレンチ第4遺構面d 土壌SK61 (SX10) 平面図

して出土している。これら遺物については弥生時代末（纏向1式）に相当すると考えられる。この溝は、井戸状のもので理解することが可能かと考えられる。第4遺構面b・c H区の中では最も良好に遺存する面であり、遺構もまた多く検出している。まず、a面も含めて、北端の溝群の記述を中心的に行った後に、他の各遺構を記述することとする。

〈北端溝群〉

H区の北端溝群は、幅8.0mの範囲で検出しており、ちょうど中

中央部の溝S D60を最深部として約1.0mの深さがある。層的には溝S D70が灰色、オリーブ黄褐色系粘・砂質土を埋土として、南側法面にある。その上部には、黄褐色粘質シルト系を主体とした溝S D51の埋土が堆積する。この2者と中央部の灰黄色、緑灰色系の粘質シルトの埋土を中心とする溝S D60の最下層とは土層的には漸移的に変化し、連続性を呈し、明瞭な分層ができない。しかしながら、各溝内よりの出土土器群単位からは明瞭に分離できることから、溝S D60最下層掘削の際に溝S D60、70の土器群が露出していたことが想定される。

そして溝S D60を隔てて、黄褐色、灰色系の粘質シルト主体の溝S D42下層（落ち込みSX46）が北側法面上に堆積する。中央部の溝S D60が再度、掘削され、灰色粘質シルトの下層と灰黄色砂質シルトの上層の堆積が認められる。その上には、明褐色系の微砂質と黄褐色系の砂まじり土を主体とする溝S D42上層土と溝S D241、41、40などの落ち込み状の溝群が覆う。

これら溝群は以上のような堆積順位をたどったと考えられるが、多量の土器が各溝間で接し合うため、それぞれの溝群の境界は必ずしも明瞭には追えない。しかし、溝内出土土器の出土状況はそれぞれに異なった状況を呈し、中央部の土質もまた特色を示すことから、上記した層序を呈していたと考えて差しつかえない。以降はこの順で、しかも土器の出土状況を中心に記述する。

溝SD70 この溝は、Hトレンチの西側において主に検出しており、b5区南半に東西方向に若干のくぼみをもつ地点があり、それを中心として土器150個体以上が集中する。その集中する部分の土器の遺存状況は良好であり、その範囲外のもののはまとまりをもたない。

出土土器は、甕形土器の比率が高く、P38、58、60のように正立して接し合うものとそれ以外では横位のものも多く、倒立状態にあるものは散見されるにすぎない。各々の土器が接し合った状態で出土するが、規則性は今一つ認めがたい。他に、壺、高坏、鉢、甌、手埴り形土器及び袋状土器が出土している。うち特異なものは、線刻のある甕形土器体部と彩色した高坏形土器があげられる。土器群の上下には有機物層が部分的に含まれており、西側下では炭化物も認められた。時期は弥生時代末～庄内期古段階（纏向1・2式）に属すると考えられる。

溝SD51・251 この溝からは、Hトレンチ東側とH2グリッドにかけて土器が集中しており、その中央が最も顕著である。その部分は、幅3.0mの広い平坦面をなすところで180個体以上中の3分の2程が出土している。それぞれ列をなして群を構成しているようにも見え、本来、そういった状況にあったものが倒れ込んだのかもしれない。出土土器は溝SD70と同様に甕形土器が主体的であり、完形に近いものはほとんど全ては横位で出土している。その他は、甕形土器の口縁部のみや鉢、甌形土器が倒位を示すのが特徴的であるが、甕形土器の完形に近いものは横位である。高坏形土器は非常にアトランダムな出土状況である。この他に、厚手の小型器台や手埴り形土器が出土する。また、楕円形の口縁に刻み目をもつ鉢形土器も出土している。庄内期古段階（纏向2式）に属すると考えられる。

溝SD60・260最下層 この溝の下底は褐色系の砂層をベースとしており、下面の溝SD80に伴ったと考えられる長頸壺や高坏形土器を含む他、南側法面側に先の溝SD70の遺物を混入し、その出土遺物はバラエティーに富んでいる。溝最下層の掘削に伴った土器群が比較的によく遺存するのは、H2グリッドの北側の溝東法面沿いの部分においてである。上半部だけを残す甕形土器が倒位で2個体、並列し、その周囲に壺、高坏形土器が見られた。時期は庄内期新段階（纏向2式）に属すると考えられる。

溝SD42下層群（SD42下層（落ち込みSX46）、SD43中央落ち込み） 溝SD42という名称を与えているものの、その下面で検出する落ち込みSX46という深さ0.2～0.4mの遺構内に溝SD70、51のような状況で土器が存在していたものが削平を受けたことにより、土器群が散乱状況で混じる整地層を形成していたと考えた方がよさそうなのである。堆積土の砂まじりもこうした性格のものであったことを物語っているようであり、溝SD42の最下層ともなるべき落ち込みSX46の土器群のあり方が安定的であるのに対して、その上部の溝SD42下層やSD43中央落ち込みは土器片のばらつきが特に目につくのも特徴的である。全体的に弥生時代末から庄内期古段階（纏向1・2式）が大半を占めるのに対して、下半には庄内期新段階（纏向2・3式）、上半には布留期古段階（纏向3・4式）が含まれることも示唆的で、古い段階の土器群が少なくとも2度の削平、整地を受けたことになる。なお、これら土器群に混ざって、溝SD42下層の北西隅

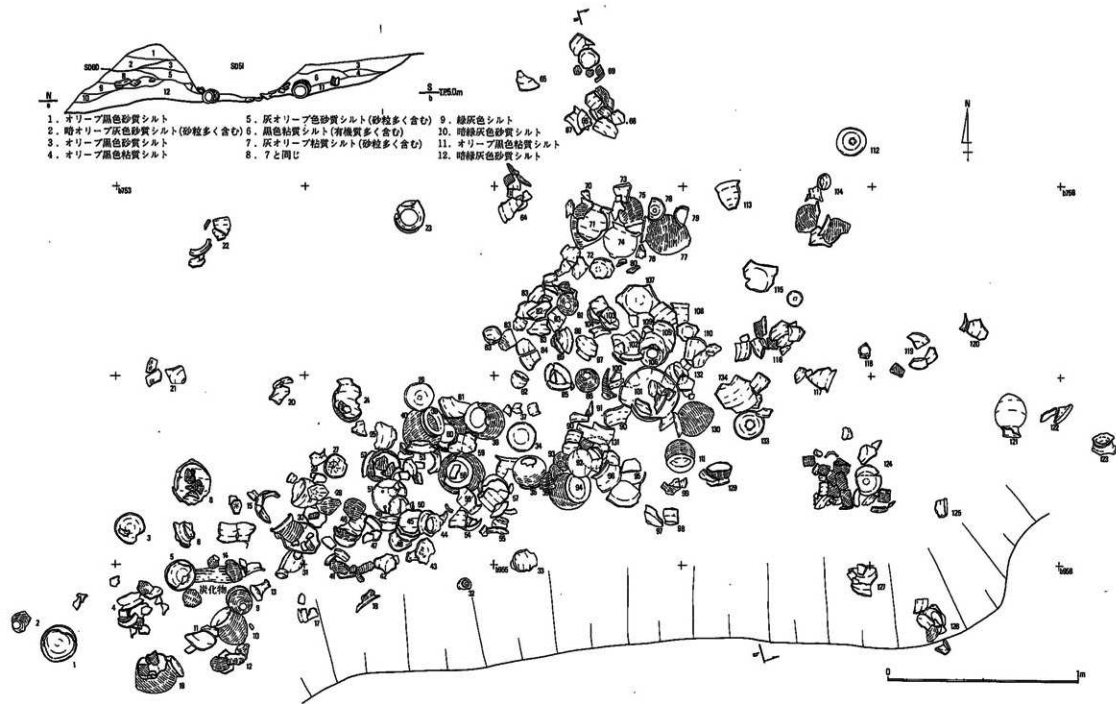


Fig. 108 Hトレンテ第4連構図c 構SD70平野、土層断面図

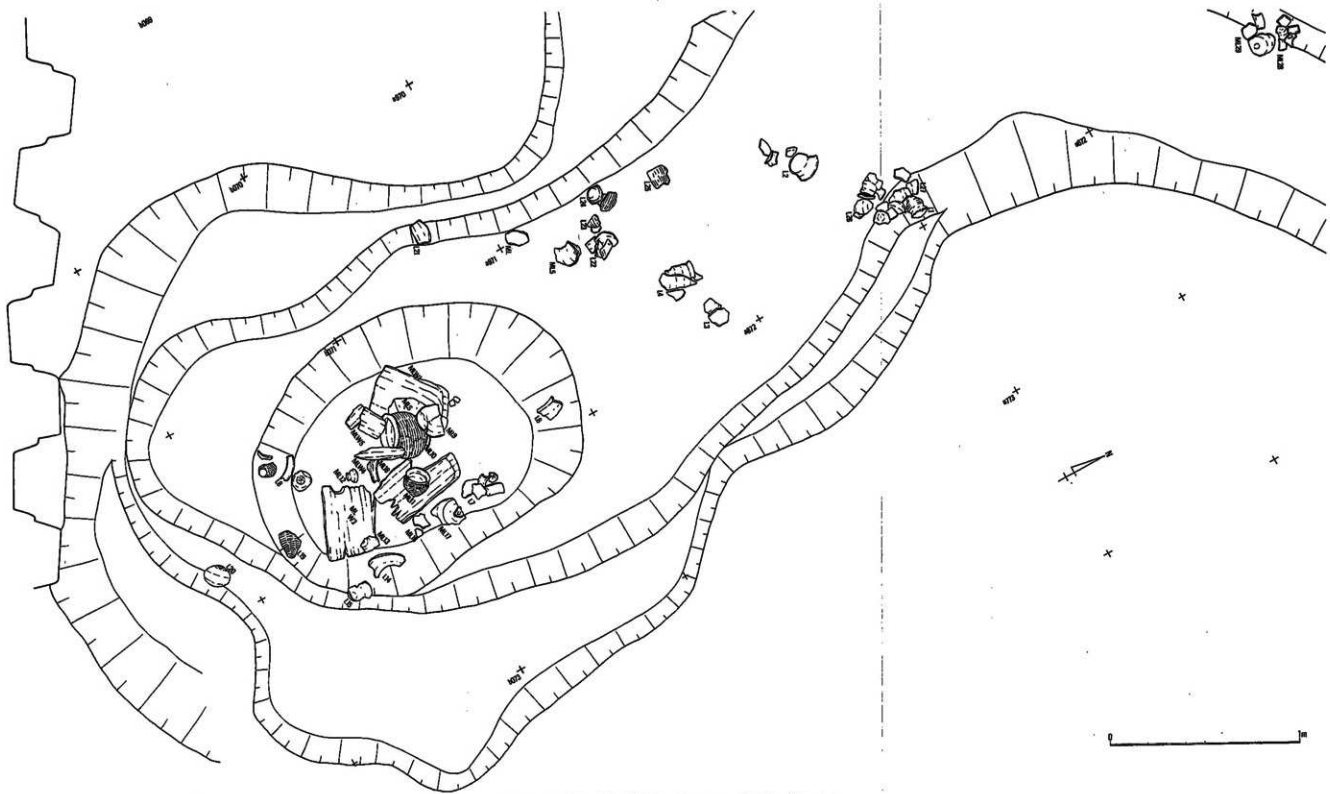


fig.109 H2グリッド第4連検面c 碑SD251 下層(左)、碑SD205
 敷下層(右) 遺物出土状況図 (ML=敷下層、L=下層)

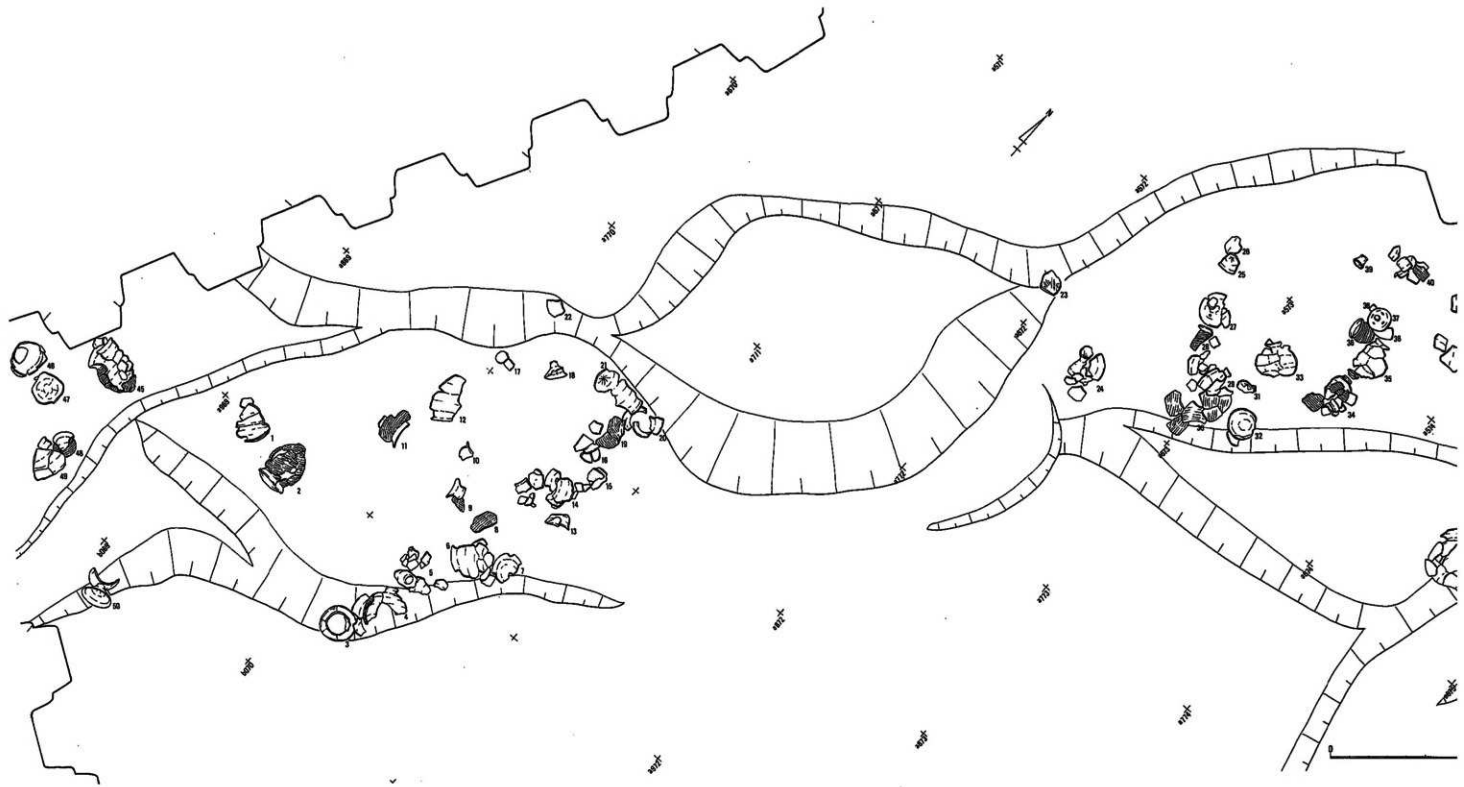


fig.110 H 2 グリッド第 4 遺構面 c 溝 S D 251 土器出土状況図

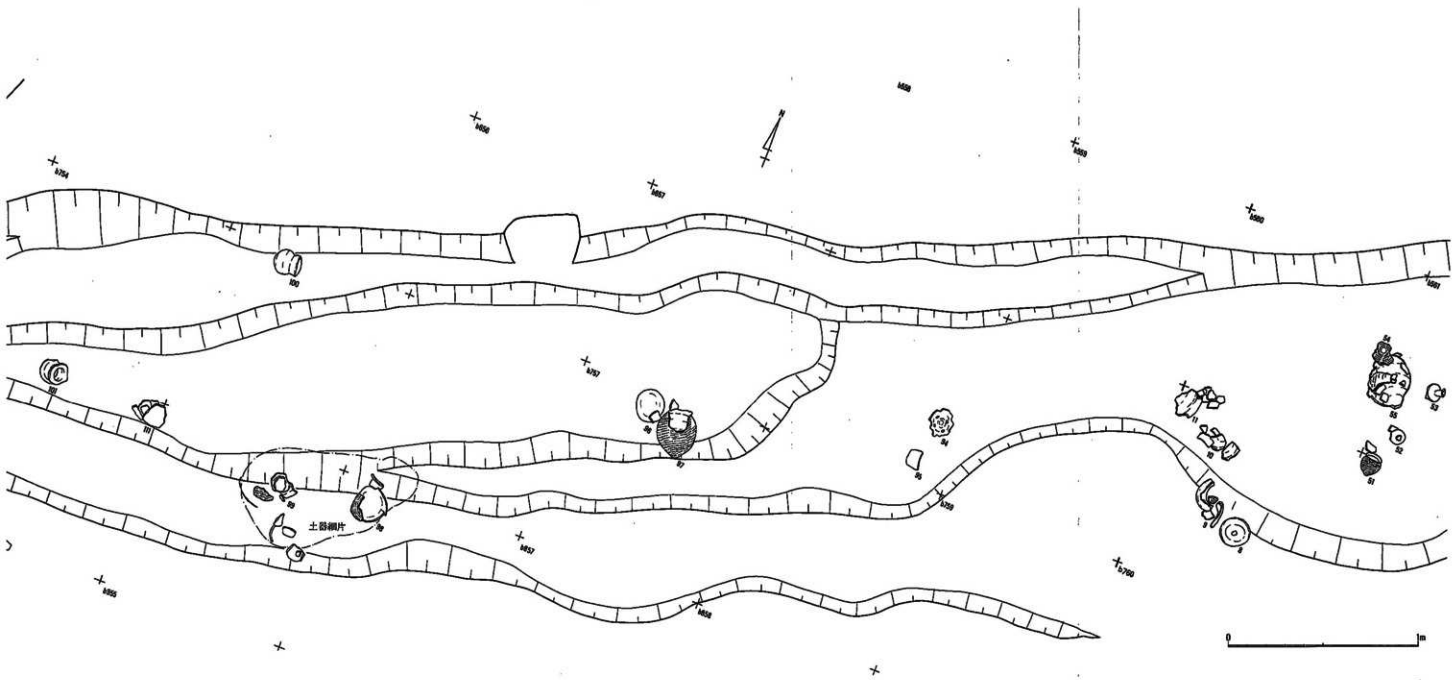


Fig. 111 Hトレンチ第4遺構面b下2 溝S Ds2 (SD51) 土器出土状況図

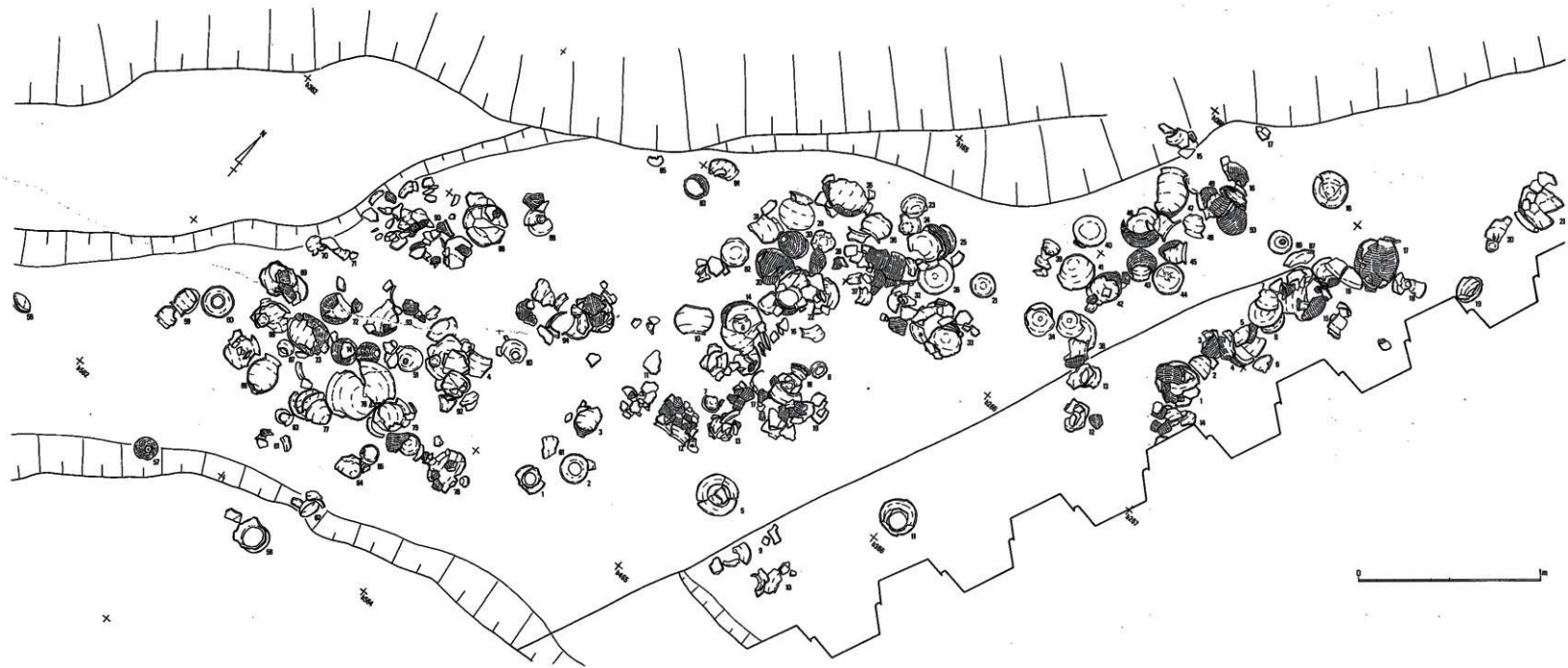


fig. 112 Hトレンチ第4遺構面b 溝S D51下層土器出土状況図

W E T. P. 6.0m



Hトレンチ第4-c SK37

1. 褐色まじり黄褐色土
2. 暗灰黄色土、砂含む
3. 灰色シルト、やや粘質
4. 灰色土、やや粘質
5. 灰色粘質シルト

S N T. P. 6.0m



Hトレンチ第4-c SK39

1. 黄褐色土及び細かい灰色シルトとの互層、ブロック、土層析あり

S N T. P. 5.5m



Hトレンチ第4-c SK40

1. 黄褐色土、褐色まじり
2. 灰色土、やや粘質および

W E T. P. 5.5m



Hトレンチ第4-c SK32

1. 灰色シルト、やや粘質
2. 灰色シルト、砂含む
3. 灰色粘質
4. 灰色粘質シルト
5. 灰色シルト、やや粘質
6. 灰色粘質、シルトまじり
7. 灰色粘質シルト
8. 黄褐色粘質砂層
9. 灰色土

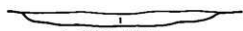
E W T. P. 6.0m



Hトレンチ第4-c SB21

1. 黄褐色土、やや砂含む
2. 黄褐色土、やや砂含む、褐色まじり

SE NW T. P. 6.0m



Hトレンチ第4-c SK38

1. 灰色シルト、やや粘質

0 2m

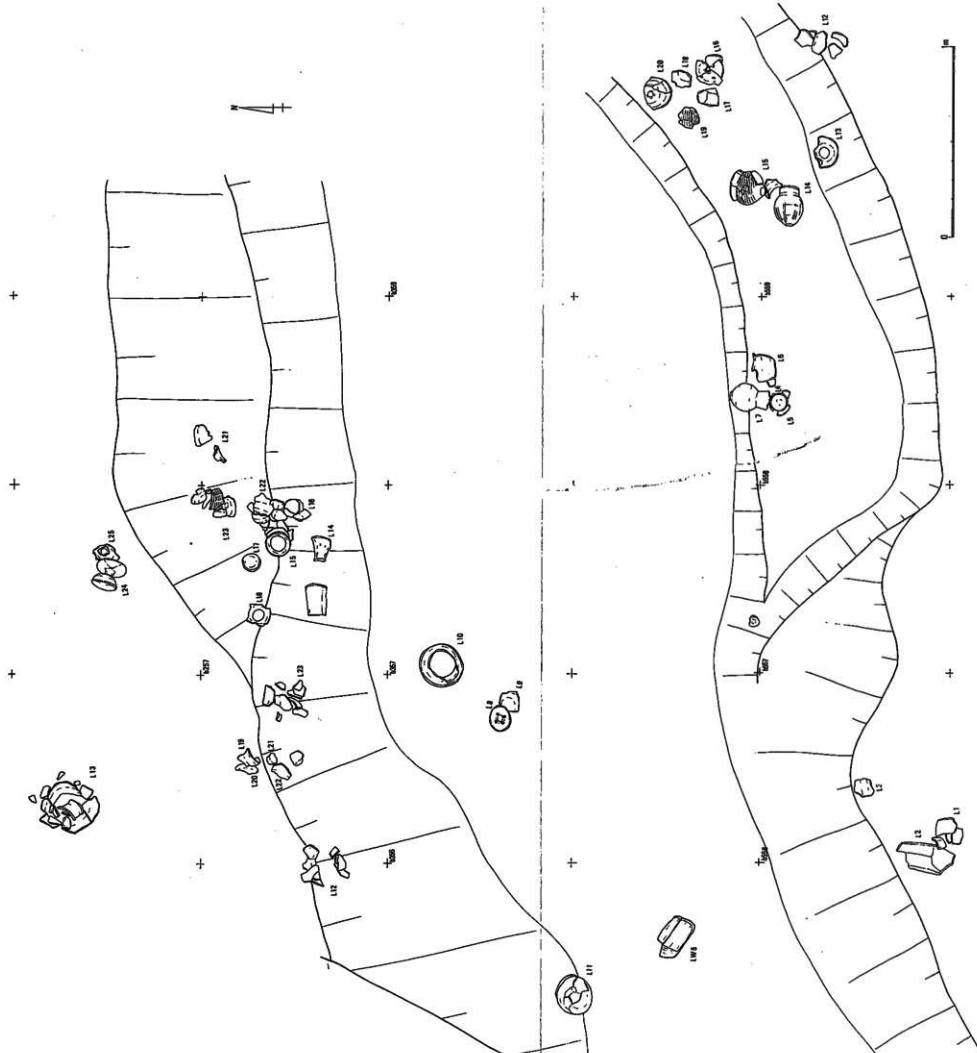


fig. 113 Hトレンチ第4連構面 c 調査D60掘下層遺物出土状況図 (L=下層、LW=下層水跡)及び各連構断面図

から銅鏃が出土している。この銅鏃の時期は土器から上述のとおり、弥生時代末から庄内期新段階の幅が考えられるが、調査時の所見からは古い段階のものと併行すると考えてさしつかえないと考えられる。

溝S D60・260上・下層 溝S D60上・下層は幅2.0m前後で比較的に安定しており、断面は「U」の字形を呈する。深さは0.7mで、北東へ向うにしたがって徐々に下降するが、極端なことはない。下層はb 6区東側あたりで、東・中・西流の3本に分岐する。上層については主に東・中流の2本が主体となる。H 2グリッドの溝S D260はそのうちの東流に含めることができる。溝内には甕形土器などが細片となって多量につまっております、出土状況として図化したものはその遺存が良好であったものに限られる。杭、鋤、鍬、ツチノコ、容器、納穴付板材などの木製品や凹石などの石器が出土しているが、それぞれの遺物の出土状況には規則性は認められず、徐々にしか

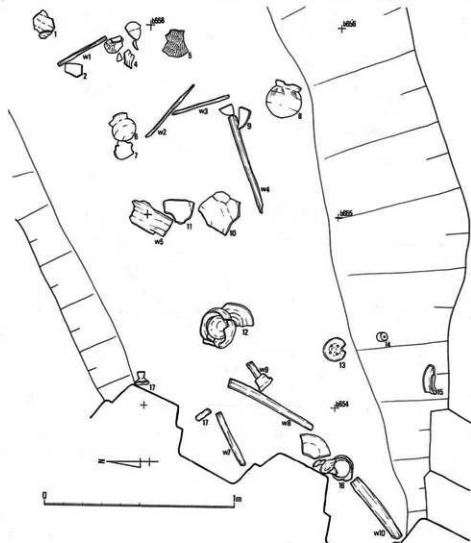


fig.114 Hトレンチ第4遺構面b下2 溝S D60下層遺物出土状況図

も多量に遺物が泥湿地状態の中で堆積していったものと考えられる。

出土土器は壺、甕、高坏、器台、手埴り、鉢、甌、坏形土器及び小型精製三種と土錘、製塩土器などがある。これらの土器より、下層は庄内期新段階から布留期古段階（縦向3・4式）、上

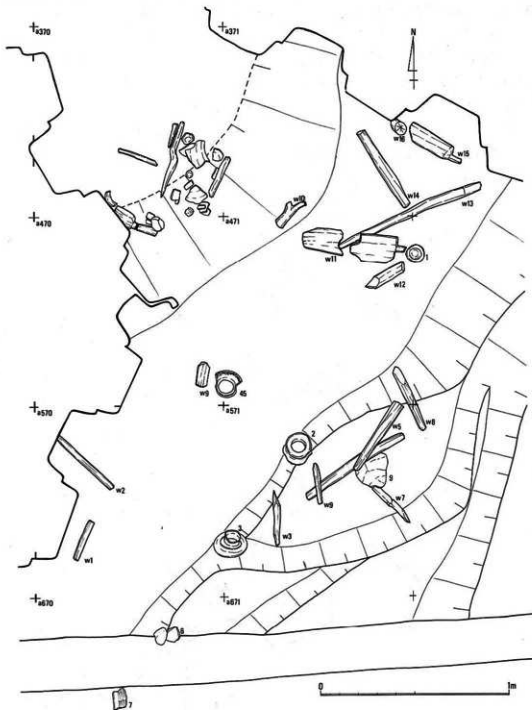


fig.115 H 2 グリッド第4遺構面b 溝S D 260下層遺物出土状況図



Fig. 116 H区第4遺構図b 溝S D 80・260最上層・上層及び最下層遺物出土状況図

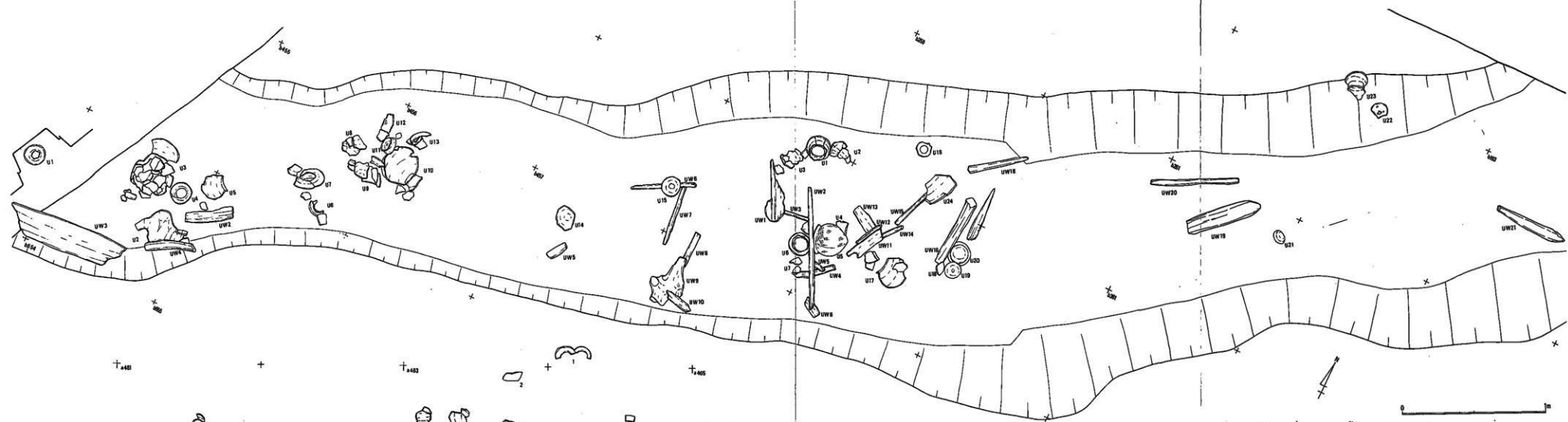


fig.117 H トレンチ第4遺構面 b 溝 S D 60 上層遺物出土状況図 (U=上層、UW=上層木箱)

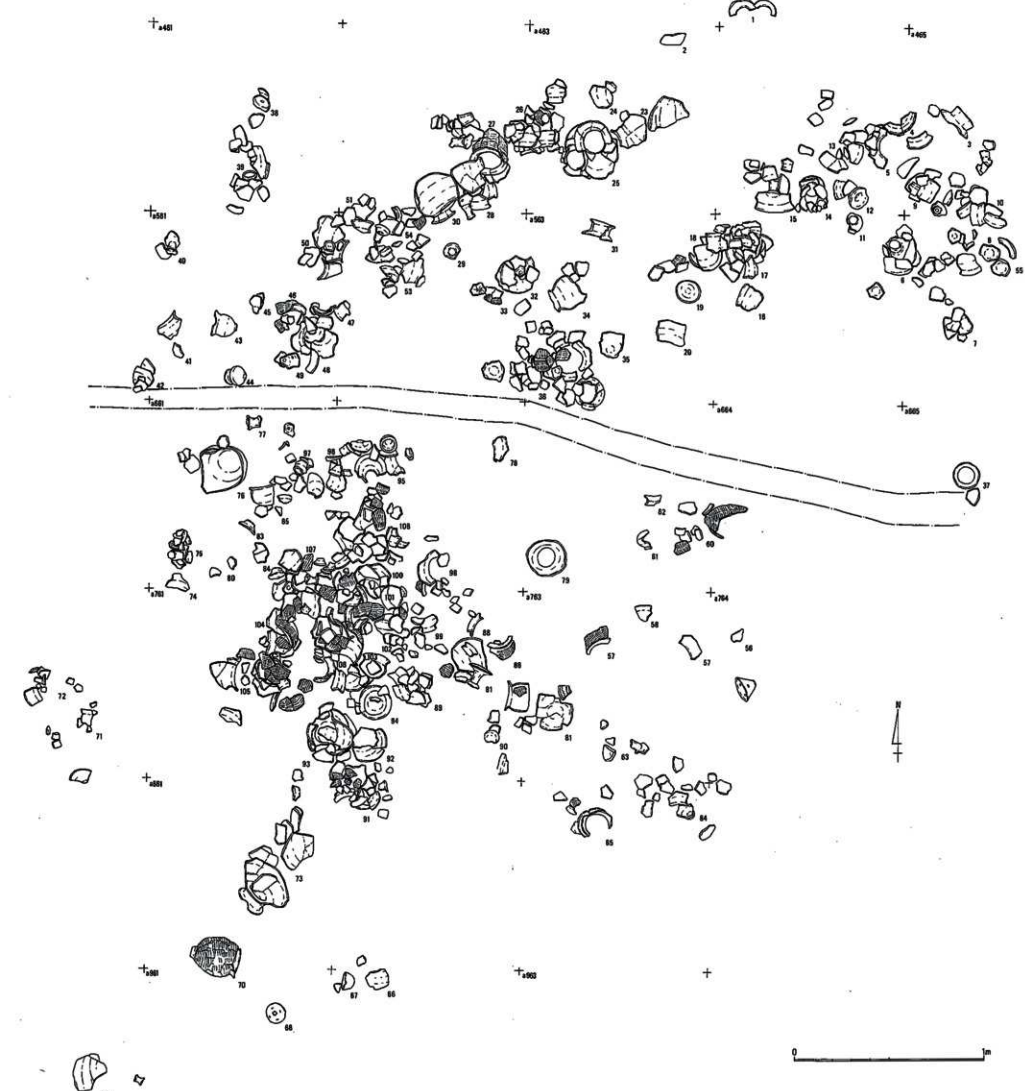


fig.118 H トレンチ第4遺構面 b 溝 S D 42 下層土器出土状況図

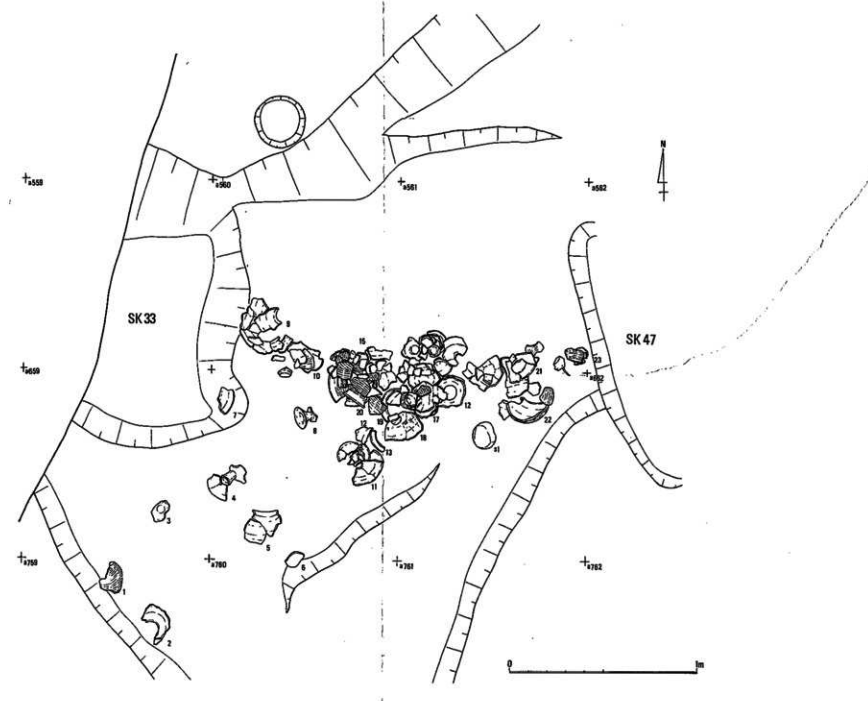


fig.119 H トレンチ第4遺構面 c 溝 S D 42 下層 (落ち込み S X 46) 土器出土状況図

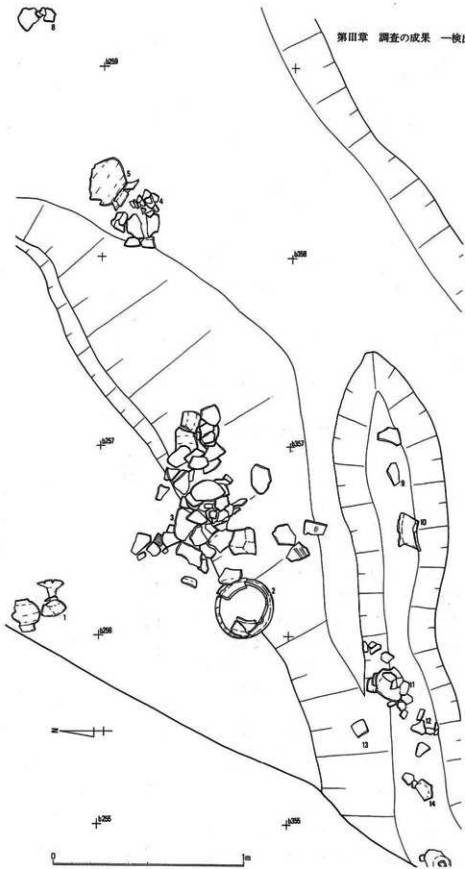


fig. 120 H トレンチ第4遺構面 a 溝SD42土器出土状況図

層は布留期古段階(纏向4式)を主体とする。

これらの中で、特に完形品が集中するのは、H2グリップの溝S D260上層においてであり、東流の両法面にかけて見られる。土器群の西側のものは、完形品7個体分程が接しあう安定した状況である。それは、甕形、壺形土器が主体であり、正位、横位、倒位、それぞれある。ただ、それ以前の時期の土器出土状態からすると倒位の比率が多くなっているような傾向がある。その南側の溝肩付近の最下層でも、土器自体の残存状況は良くないが、甕形土器口縁部より肩部にかけて残るものが多く出土している。そのうち上部のものは正位であるが、溝肩直上の土器については壺形土器なども含めほとんどが倒位で出土している。この土器群は、溝肩部の凹みを利用して、何らかの目的で据置かれたのが攪乱を受けていると考えられる。これら全体に溝S D260の出土土器は、倒位の状態で出土するのが目立つ。層位的には、最上層がトレンチ部の溝S D60の上層、上層・下層と下層が対応しており、東流の埋没が先行する。したがって、西流、東流、中流の順に埋没している。これらの埋没に際して、最終的には流路の間に小溝と落ち込みが多く形成される。その中心部の落ちを溝S D42上層として検出している。溝S D42上層 (fig.120、142) 溝内は、荒砂、小礫を含む黄褐色土で、上部には細砂が主体に堆積しており、水流のあったことが分かる。その下端で主に遺物が出土している。一部で完形の土器が単体づつで出土する他は、土器が集中するのは、南西部落ち込みのb5区と溝S D43中央落ち込みとするa b区の部分である。いずれの土器群のあり方もまとまりに欠け、土器片が散在するのみであるが、b256区のP2・3は大形壺形土器が倒立していたものが崩壊したようである。この土器は口縁部と頸部の接合面がよく分かる資料であり、PL.259を参照されたい。出土遺物は中央落ち込み上層より、砲弾形の用途不明の石器や壺、異形壺、

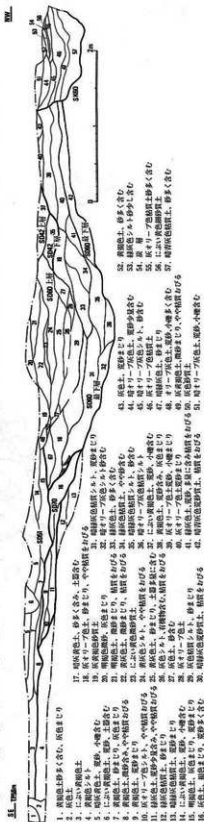


fig.121 H2トレンチ第4遺構面
b・c 溝群切り合い
関係土層断面図 (Sec.B)

甕、高坏、鉢形土器、小型精製三種の土器、土唾などで、土器は布留期古・中段階（縦向4式・小若江北式）前後を主体とする。

これら北端の溝群より後出する溝は、H区のこの近辺において、b5・6区6ライン上で砂層を埋土として南北に蛇行するものが認められ、古墳時代後期であると考えられ、このような溝群が弥生時代後期以降、この時期までは継続すると考えられる。

落ち込みS X41・241 溝S D60を中心として、陥没した部分に相当し、土器が多く出土する。時期は、布留期中段階（小若江北式）と考えられる。

溝S D66（S K47） 溝S D42下層下面で検出している幅0.4m程の「L」の字形の平面の溝であり、深さが0.1mのものである。その下面において、土壌S K47とS K46に分離しているのだから、それらの上層の落ち込みと考えられる遺構である。

土壌S K47 この土壌は、長さ1.5m、幅0.56mの長方形の土壌であり、深さ0.1m程のものである。土壌内は土器片が不規則に散乱している。これは、溝S D42下層（落ち込みS X46）と同様に、削平、整地の際に攪乱されている可能性があり、その場合、土壌S K46、47の上半部を含めその可能性が高い。

土壌S K46 土壌S K47に南接するもので隅丸方形気味の径0.55mの円形のものである。深さは0.1mと浅く土器片をわずかに出土するのみである。

土壌S K63 径1.15mの円形のものである。上部はなだらかな摺鉢状の法面を呈し、下部は比較的直に落ちるもので、深さは0.5m程の浅いものではあるが、井戸になるものと考えられる。底面近くで土器片がわずかに出土している。こうした同様な井戸状遺構は、溝S D60の北東部西側に3基を検出している。

土壌S K45 この土壌もまた溝S D60と接し、井戸の可能性のあるものである。やや楕円形気味の径

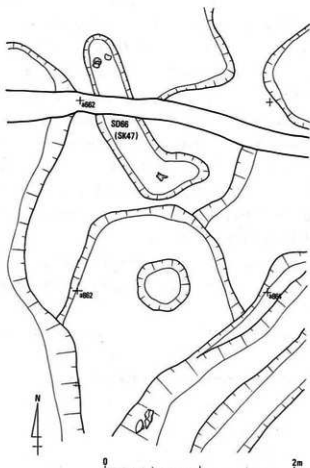


fig. 122 Hトレンチ第4遺構面c
溝S D66（S K47）等土器出土状況図

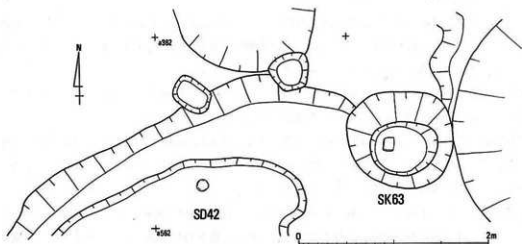


fig.123 Hトレンチ第4遺構面c 土壌SK63 溝SD42土器出土状況図

1.25mの平面円形と深さ0.5mの断面逆台形を呈する。堆積土は上下の2層に大きく分離できる。下層は、暗い青灰色の粘質シルトで下位は砂質がかかる。上層はオリーブ黒色砂質シルト層が大半を占め、その下は粘質シルト層となり、土器等の遺物が集中する。土器は完形に近いものが多く、全てで30個体分程であるが、それらは欠損品ばかりである。うち、甕が半数近くを占め、布留傾向型、布留型と庄内型が混在するが後者が主体的である。他に壺形、高環形土器があり、小型鉢と小型器台が出土する。木製品は、柄穴付板材が出土している。こうしたものの出土状況より、遺物は一括して廃棄されたものと考えられる。時期は、布留期古段階の古いところ（纏向3式）に属し、本来b面として検出すべきものであるが、上面では溝SD42と分離が困難であった。

pit 403 一辺0.4m前後のやや不定形なピットである。深さは0.25mで、ピット内よりは壺形土器の半完形品と土器片が出土している。

土壌SK38 この土壌はHトレンチ中央南よりのd4区で検出している。2.3×1.6mの三角形気味の楕円形を呈する落ち込み状の形状をなす。深さ0.3m、断面は「U」の字形で、底面は平らなものである。埋土は暗黄褐色粘質シルトであり、土壌南東肩口のところで土器が出土している。それらは壺、甕、高環形土器である。土壌底の北西に壺形土器の口縁部が2個、並んだ状態で出土し、その北西側に同一個体の体部と底部が集っており、土器群はこの二個体分を主体としている。一見、倒位で置かれていたとも考えられるが、各々の口縁部が接するため、体部幅が重なってしまうことになってしまうため、口縁部が原位置を留めていたとは考え難い。ただ出土状況からはそれに近い状況であったことは充分に考えられる。時期は庄内期新段階（纏向3式）でも古いところに属するであろう。

土壌SK32 北側溝群の北側、a6区で検出した土壌である。径1.95mの比較的に大きな円形のもので、なだらかな法面と凹凸はあるものの全体に平坦な底面をなす。上層は黒褐色粘質シルト

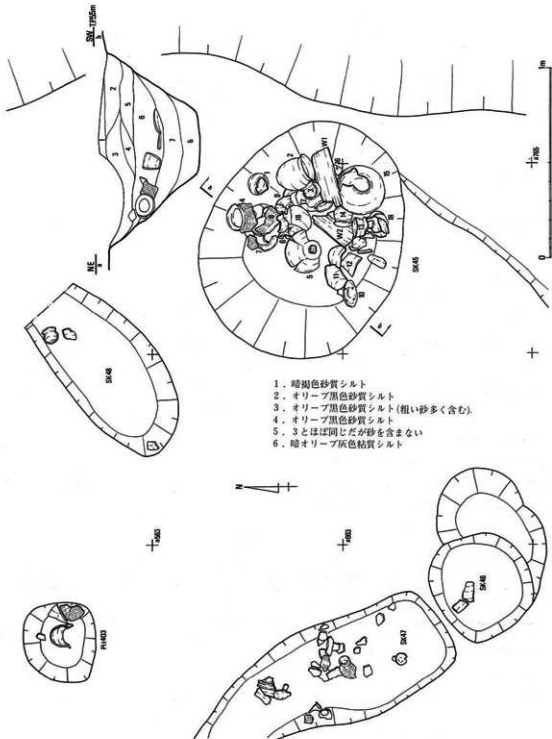


fig. 124 Hトレンチ第4遺構面c 土壁SK45、SK46、SK47、pit 403土器出土状況図

で、下層は砂を少し含んだ灰色粘質シルトとなっており、中間に有機物を含んだオリブ黒色土が堆積する。下層は棒状の木材とともに土器片が多く出土している。それらには壺、甕、高坏形土器があり、平底もの多くは下面の溝S D42下層の混入と考えられる。時期は、布留期古段階（縦向3式）の古いところと考えられる。堆積状況から比較的長期間、オープンな状態であったと考えられるが、深さが0.25m程であり、底面の状況から井戸とは考えにくい。

土壌S K31 b 6区の交点にあたるところで検出したもので、上部が一边1.9mの方形に、下部が1.35m程の円形の2段に掘り込まれているもので上層は褐色系の粘質シルト、中層は灰色系の砂まじり土、下層が青灰色及びオリブ黒色粘質シルトで、下層には炭化物を含んでいる。埋土中には北東隅に甕形土器の完形に近いものが上層で出土した他、主に上層で壺、高坏、鉢、甌形土器及び、小型器台が出土している。時期は、布留期古段階（縦向4式）に属する。

土壌S K30 d 4区で検出した一边1.25m前後の方形のものである。深さ0.2m程の浅いもので底面はフラットであり、炭化物と黒褐色粘質シルトの細層が暗黄褐色粘質シルト層にまじる。土壌内には、他地域産の完形土器1個体の他は土器片がまんべんなく混入するといった状況で出土する。うち、甕形土器が多く壺、鉢、甌、高坏形土器が出土する。庄内期古段階（縦向2式）と考えられる。

土壌S-S X01 H区南側、f 4区で検出したもので、不整形な方形を呈する。掘り込みは二段であり、上部は1.5mの正方形となるが、南東部は面取りしたようになっている。その正方形

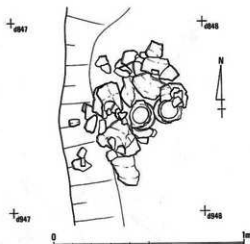


Fig. 125 Hトレンチ第4遺構面c
土壌S K38土器出土状況図

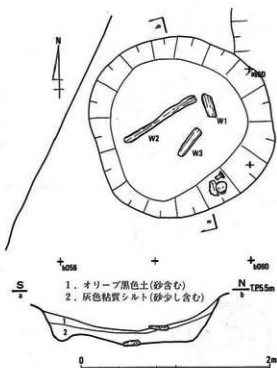


Fig. 126 Hトレンチ第4遺構面c
土壌S K32遺物出土状況、土層断面図

の西よりに1.35×0.9mの長方形の掘り込みを下部で検出している。前者は深さ0.2mで、暗茶褐色粘質シルト主体の堆積土であり、後者は0.5m程で暗青灰色主体の粘・砂質シルトである。全体に水平堆積をなす。

出土遺物の多くは、後者の上層北西部分に集中しており、ほとんどが変形土器で占められる。その変形土器は庄内型と布留傾向型、布留型がほぼ半々の比率で出土している。他には鉢形土器、小型鉢、小型丸底壺があり、時期は、布留期古段階（纏向3式）に属する。この土壌は、堆積土より井戸の可能性が有る。

土壌S-S X01の北側は現代河川によって削平されるが、その北西方近くの下がったところでは小型鉢4個体分が倒れて重なって出土しており、時期的にやや新しいもので差異が認められることや、出土状況の良好さから原位置をとどめるものとして評価すると、その北側、現代河川の形状に沿って古墳時代初頭頃の溝状遺構の存在が推測される。

土壌S-S K10 土壌S-S X01の東方には土壌が2基存在する。そのうちの東側のもので、径0.7mの円形で暗褐色粘質シルトを埋土とする深さ0.1mの浅いものである。土壌内には甕、高坏、鉢形土器や小型器台片が散乱状態で出土する。時期は庄内期新段階（纏向3式）に属する。

土壌S-S K11 0.6×0.45mの楕円形の掘り方で、深さ0.1mのものである。掘り方にはほぼいっばいに頸部を欠いた体部径37.6cmの変形土器が横に置かれており、その頸部上部には大形の鉢形土器を倒れて被せていた。このような出土状況であるので、壺棺という可能性が極めて強い。だとすれば、その上面のa面で検出した0.2m程のf3区を中心にした方形隆起を周溝墓のマウンドとすることができるかもしれないが、現代河川、試掘坑、残存状態の悪さから、決定づけ



fig.127 Hトレンチ第4遺構面c
土壌S K31平面、土層断面図

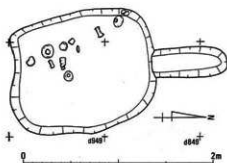


fig.128 Hトレンチ第4遺構面b
土壌S K30土器出土状況図

ることは難しかった。

住居址S B 20 H区中央には
 一辺4 m前後の方形の落ち込
 みを4基検出しているが、そ
 のうち最も良好に遺存するの
 がd 4・5区の住居址S B 20
 である。これら一群は、堅穴
 状掘り込みとするのが良いの
 かもしれないが、住居址の可
 能性をもたせるためにS Bと
 称した。これは一辺3.55m、
 深さ0.3mの底面が平坦なも
 ので、埋土は5 cm程の黄灰
 色砂質シルト及び粘質シルト
 主体の細層が互層となる。そ
 の細層間には炭化物細層が若
 干混入する。また、埋土中よ

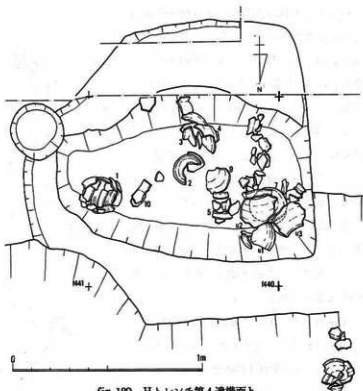


fig.129 Hトレンチ第4遺構面b
 土壌S-S X01土器出土状況図

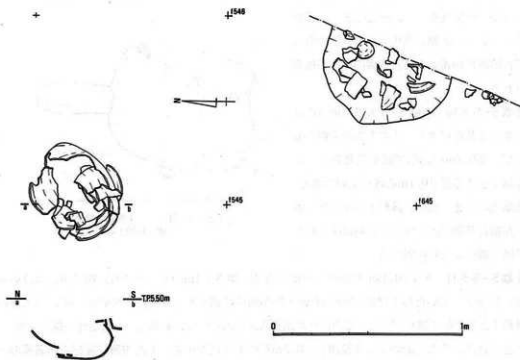


fig.130 Hトレンチ第4遺構面b 土壌S-S K10、S-S K11平面、断面図

りは土器片が少量、出土したのみである。土層観察用の畦を除去した段階で、中央に2個の径0.6m、深さ0.15mのピットを検出したが、この掘り込みに伴うものかどうかは判然としない。方形の堅穴状掘り込みは全体にこうした特徴をもっている。

類似したものとしては、小規模ではあるが、H3グリッドa面上の焼土塊SK302がある。ただ、この両者は埋土中に含まれる炭化物の量がかなり異なっており、その差は歴然としている。住居址S B20の周囲、特に東側H4グリッドにかけて、5~20cmのI区c面の住居址S B02で見られるような細溝が南北、東西、それぞれの方向で認められたこともあり、本来、住居址とし

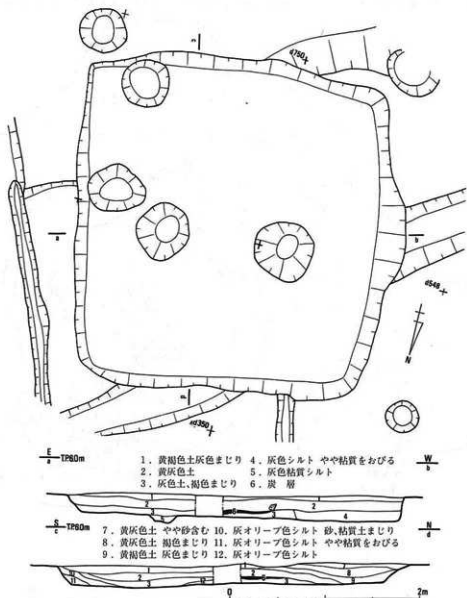


fig.131 Hトレンチ第4遺構面c 住居址S B20平面、土層断面図

て掘り込まれたものが上部削平により下部のみ検出した状況がこういった掘り込みを残したとも推測されることから、住居址とした。もし仮にそうであるならば、H区中央部は住居址がかなり重複していることになる。

井戸 S E 601 H 6 グリッド北側で検出する井戸と考えられるもので、上部が一辺1.8mの方形のプランで、下部は径1.1mの隅丸方形気味の円形のプランを呈する。下部のものは、勾配が強いものの全体としては摺鉢状に落ち込む。堆積土は上部、下部の双方とも暗青灰色粘質シルトであるが、上部は赤の斑点がまじり、下部はまじらないことで双方に差が認められる。上下半に完形品を含めた土器が集中し、それらは南東方向上部から中央へ投げ込まれたようにして出土して

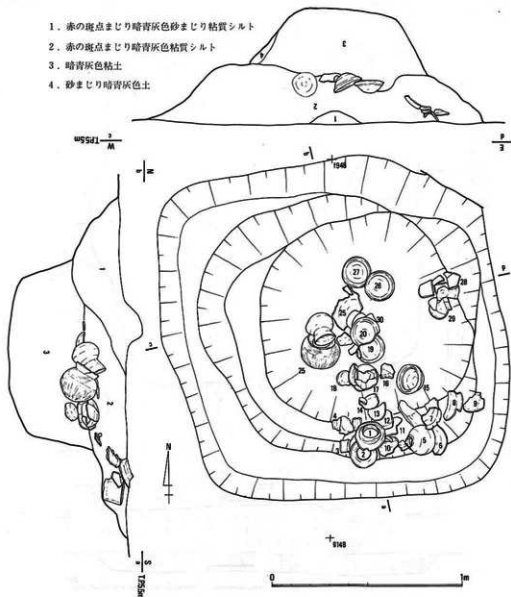


fig.132 H 6 グリッド第4遺構面c 井戸 S E 601 平面、土層断面図

いる。26個体分が出土し、うち3分の1程を甕形土器が占め、鉢形土器、二重口縁壺形土器が1個体ずつ、その他の半数以上は精製品である。時期は、布留期古段階（纏向4式）と考えられる。土壌S K306、落ち込みS X305 両者はH3グリッドの北西部のもので土壌S K306は落ち込みS X305の堆積土上部より切り込む径1.5mの不定形なもので、木器、石器、土器片が出土する。落ち込みS X305は、上部にも落ち込みとしてS X303に影響を及ぼすもので、下層の西側は特に土器と木製品が集中する。土器群の時期が庄内期（纏向2・3式）に属し、堆積土が暗灰色の粘・砂質シルトを主体とすることからHトレンチで検出する溝S D60と一連のものと考えられる。

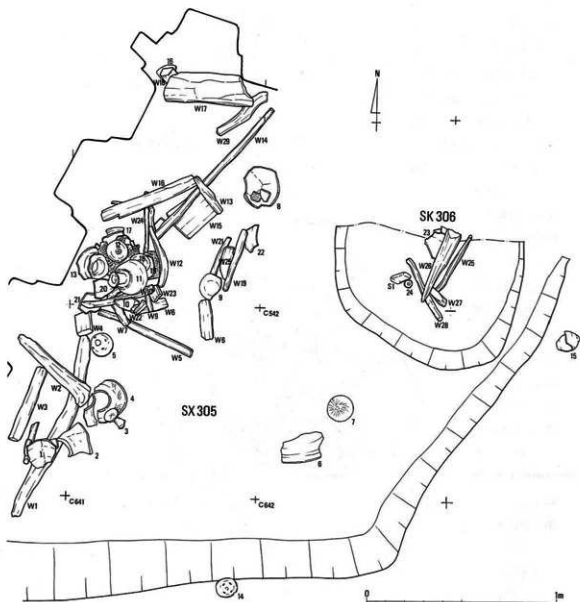


Fig.133 H3グリッド第4遺構面c 土壌S K306、落ち込みS X305遺物出土状況図

土壌S K402 H4グリッド北東隅で検出したもので、住居址S B20と類似した状況を示す。南西側には甕、高環形土器などが集中して出土する。

井戸S K60 Hトレンチ北側のb区で検出したもので、西側は調査区外に出る。長径2.3mの楕円形で、全体に摺鉢状に落ち込む。0.7mの深さで上・下層の2層に大きく分かれ、上層は暗茶褐色粘質シルト主体で、下層は黒灰色粘質シルト主体である。遺物は有機物層とともに下層に集中し、木製品、土器が、最下層からは籠が出土している。土器は15個体分出土し、壺、甕、高環形土器と小型丸底壺があり、布留期古段階（纏向4式）に属する。

第4遺構面a
この遺構面の残存状況は良好でなく、暗褐色系の粘土層が薄く

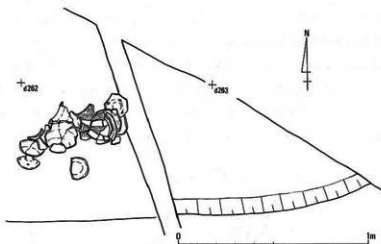


fig.134 H4グリッド第4遺構面b
土壌S K402土器出土状況図

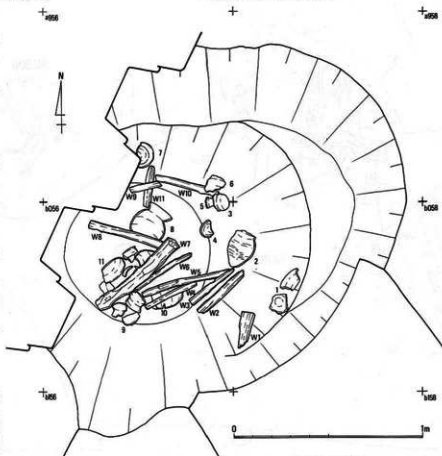


fig.135 Hトレンチ第4遺構面b下 井戸S K60遺物出土状況図

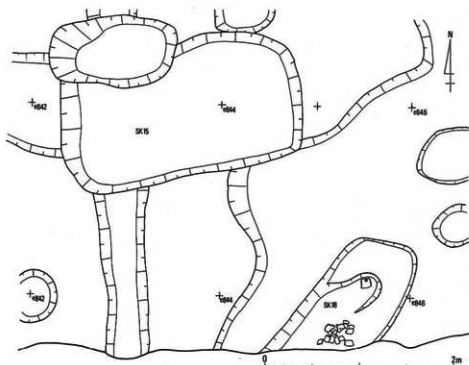


fig.136 Hトレンチ第4遺構面 a 土壌S K15、18土器出土状況図

覆っているにすぎず、H区中央ではその細層ですら被らない。したがって、それら遺構の検出も部分的に落ち込んだところが中心となる。

土壌S K15、18 これらの土壌は、H区中央南側のところで検出しており、埋土の粘土層中に薄く細片となって土器が出土する。土壌S K15は2.52×1.4mの長方形を呈する。断面は「コ」の字形をなし、0.15m程の深さである。土壌S K18は幅0.9m、長さ1.8m以上の溝状のもので底面はいびつなものである。中央は0.3m程と最も深く、短辺側北東に向かって浅くなる。時期

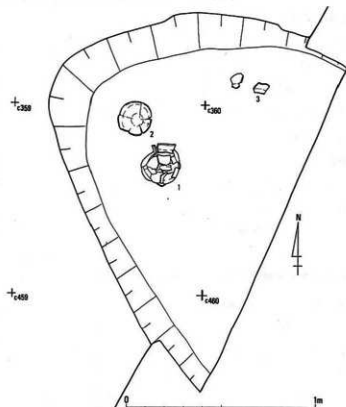


fig.137 Hトレンチ第4遺構面 a 土壌S K07平面図

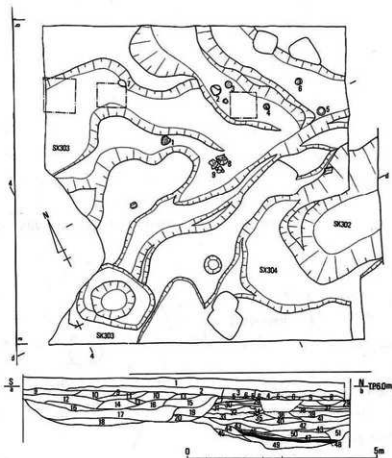
は、土壌SK18よりの高環形土器から布留期古段階（縦向4式）と考えられる。

土壌SK09 H区中央c5区で検出した2.6×1.2mの長円形の土壌である。主軸が深くなる船底形のもので、深さが0.8m程ある。埋土は、暗褐色粘土、炭化物層が上層にあり、下層は暗茶褐色砂質・粘質シルト層が主体となる。最下底北側には、一辺0.4m程の板状の石材を2個並べている。甕形土器などが出土し、布留期中段階（小若江北式）と考える。

土壌SK07 H区中央c6区より検出した一辺1.9m以上の方形の土壌と考えられる。断面逆台形の底面が平坦なもので、深さは0.3mある。

土壌北西隅には高環、甕形土器が完形で一個体づつ並ぶ。本来、双方とも正立状態にあったと考えられる。時期は布留期中段階（小若江北式）と考えられる。落ち込みSX303、焼土壌SK302、303 H3グリッドは、a面が良好に検出できた所である。下面の落ち込みSX305に影響された落ち込みには、黒褐色、灰黄色、灰色などのシルト層が重なりあって堆積する。特に下部は、一年草などの炭化物を

大量に含み、かき流されたような堆積状況をも含む。そのような炭化物のかき出し状の溝を4本、確認している。それらを総称して、落ち込みSX303とした。それぞれには、完形に



- | | | |
|---------------|-----------------------|------------------------|
| 1. 緑灰色砂質シルト | 18. 明青灰色粘質土(砂まじり) | 35. 灰黄色シルト(砂まじり) |
| 2. 淡青灰色砂質シルト | 19. 褐色砂質土(灰色粘質土まじり) | 36. 灰色シルト(茶色まじり) |
| 3. 暗緑灰色砂質シルト | 20. 褐色砂質土 | 37. 明灰褐色シルト(やや粘質をおびる) |
| 4. 青灰色砂質シルト | 21. オリーブ灰色砂質土 | 38. 灰黄色シルト(やや粘質をおびる) |
| 5. 茶褐色粘質土 | 22. 黄褐色砂質シルト | 39. 淡オリーブ灰色シルト(砂粒多く含む) |
| 6. 淡青灰色砂質シルト | 23. 暗灰色砂質シルト | 40. 灰色シルト(泥砂粒多く含む) |
| 7. 暗茶褐色粘質土 | 24. 暗黄褐色砂質シルト | 41. 灰色シルト(砂粒やや含む) |
| 8. 淡茶褐色砂質シルト | 25. オリーブ灰色粘質シルト | 42. 灰色シルト |
| 9. 青灰色砂質シルト | 26. 淡黄褐色砂質シルト | 43. 淡青灰色シルト |
| 10. 黄褐色砂質シルト | 27. 黄灰色砂質シルト | 44. 灰色シルト |
| 11. 9よりオリーブ強い | 28. 暗青灰色粘質シルト | 45. 暗灰褐色シルト |
| 12. 灰褐色砂質シルト | 29. 灰褐色シルト(やや粘質をおびる) | 46. 暗灰褐色シルト |
| 13. 12より灰色強い | 30. 暗灰褐色シルト(炭屑) | 47. 暗灰褐色シルト(有機物含む) |
| 14. 暗青灰色砂質シルト | 31. 暗灰褐色シルト(炭屑、茶色まじり) | 48. 暗灰褐色シルト |
| 15. 明青灰色砂質シルト | 32. 黒色シルト(炭屑) | 49. 緑灰色シルト(やや粘質をおびる) |
| 16. 明褐色砂質シルト | 33. 灰黄色シルト(砂まじり) | |
| 17. 明青灰色粘質土 | 34. 淡灰褐色シルト(砂まじり) | |

fig.138 H3グリッド第4遺構面a 平面、土層断面図

近い土器も出土しており、布留期中段階（小若江北式）に属すると考えられる。

落ち込みS X303の各溝の上層は、焼土壇S K302、303と切り合い関係にある。後者が後出するが、焼土壇S K302は東側に位置し、溝とは北側で切り合うことになる。この焼土壇は2.4×2.1

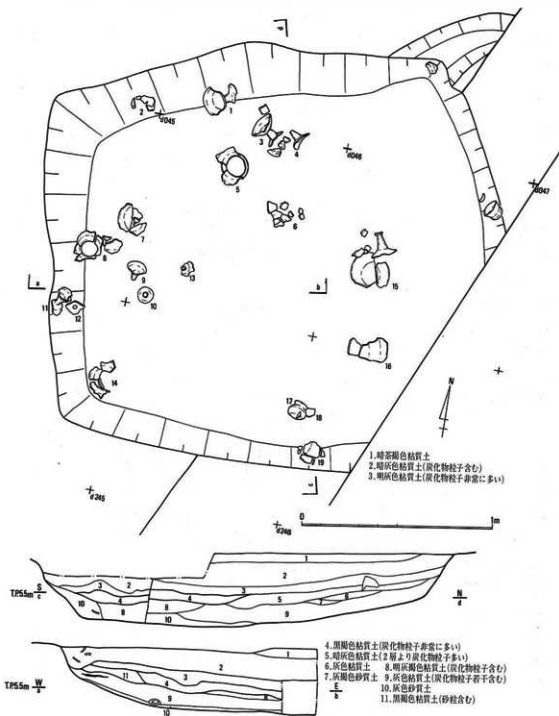


fig.139 H 3 グリッド第4 遺構面 a上 焼土壇S K302土器出土状況、土層断面図

mの正方形に近く、0.4mの深さである。下面で検出する落ち込みS X304の凹みに設定されたのかもしれない。全体に皿状の断面を呈するが、四周の法面はその上半分において傾斜が強くなっている。埋土は全体に炭化物を多く含み、暗灰色粘土を主体としている。特に、中層付近のほとんどが炭化物により構成されている。炭化物は一年草のものが多いようであり、その上下で明灰褐色粘土ブロックもまた多く含んでいる。その直下には、高坏形土器を主体とした土器が12個体分程出土する他、甕、壺形土器及び小型丸底壺が出土する。時期は、落ち込みS X303と同様と考える。

西側に位置する焼土壇S K303は、二段の掘り込みとなっており、上段が1.6×1.3mのやや台形気味の長方形で、その南西によって下段が径0.9mの円形を呈する。上段は0.05m前後と浅いが、それより出土する壺形土器より0.4mは削平を受けたものと考えられ、上部埋土は、暗灰色砂質シルトで占められていたと推測される。下部は0.15mの深さで、ブロックを含んだ赤褐色シルト層が主体となる。この上部と下部の間には、炭化物細層が入り込むが、顕著ではないので焼土壇とするにはやや無理があるかもしれない。土器は上部に多く含まれており、中央付近で出土する壺形土器P 5の口縁部の上方周囲には、この個体上半部の破片が散乱する。他には、甕、高坏形土器が含まれ、焼土壇S K302よりも新しい時期におかれる。

溝S D512 H区南端、H5グリッドgライン上、ほぼ東西方向にはしる溝である。ちょうどこの溝を境として、段差がつきI区に向けてゆるやかに下降する。溝は幅1.2m、深さ0.35mのもので、断面「U」の字形を呈する。堆積土

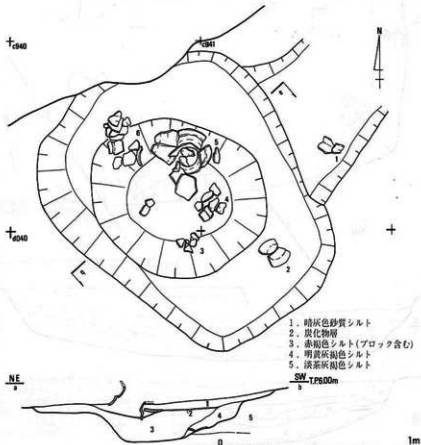


fig.140 H3グリッド第4遺構面 a 焼土壇S K303土器出土状況、土層断面図

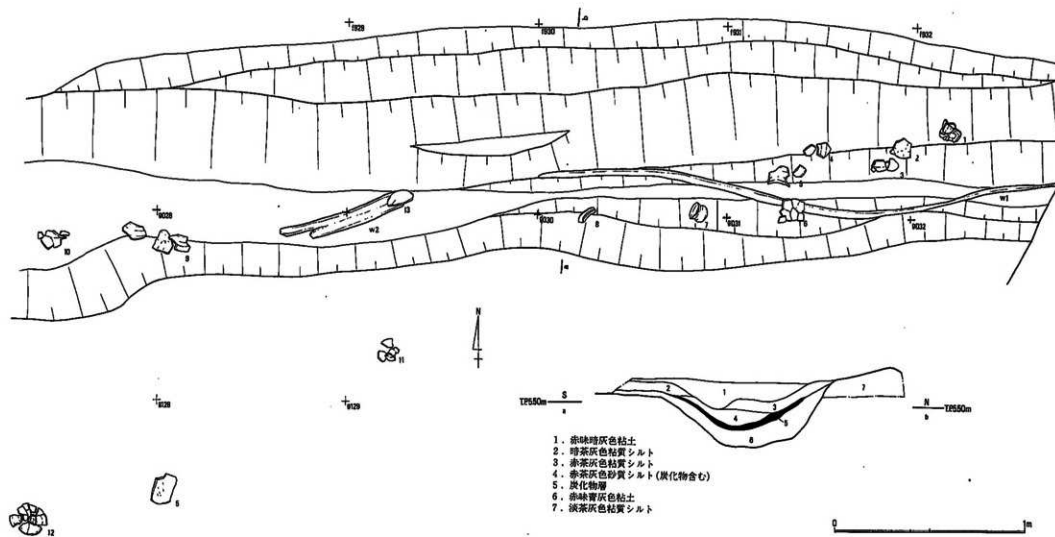


Fig.141 H5グリッド第4連横面a 溝S D512遺物出土状況図

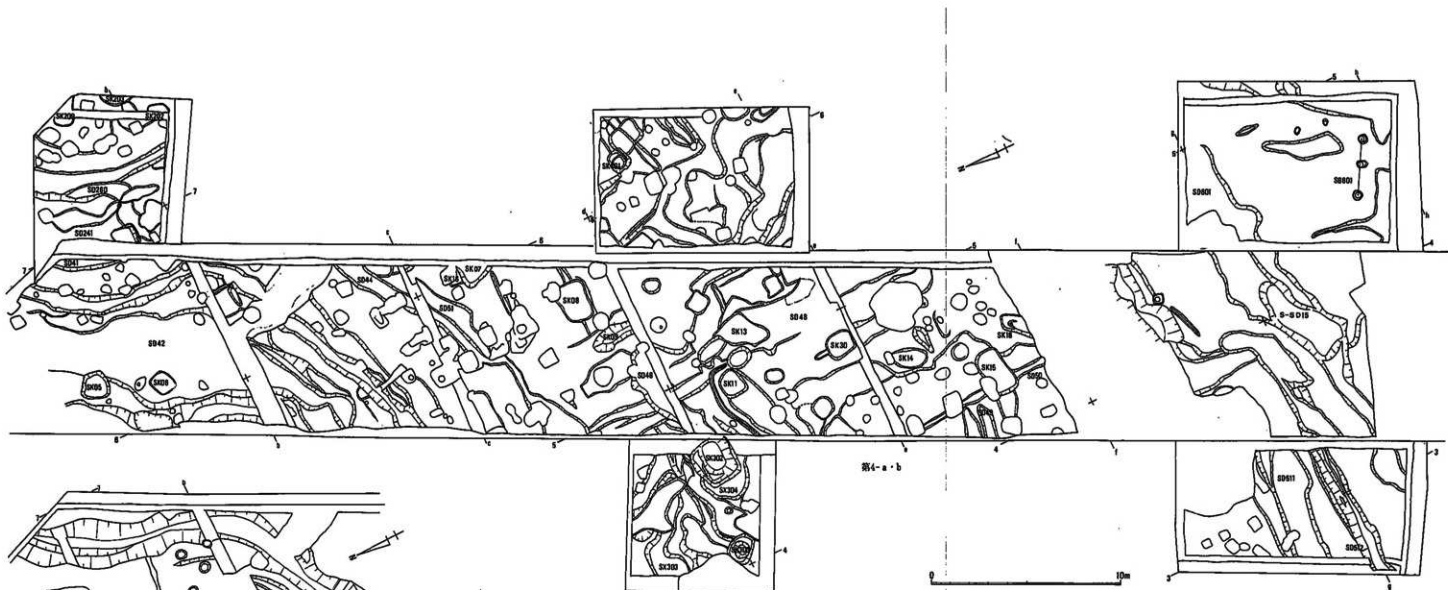
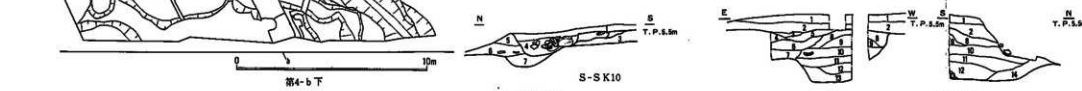


fig.142 H区第4遺構面a・b及び第4遺構面b下 平面図



- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 灰褐色シルト 2. 黄灰色シルト、砂礫含む 3. 灰青リニア粘質シルト 4. 黄緑リニア粘質シルト 5. 灰色粘質シルト 6. 暗緑灰色粘質シルト 7. 緑灰色シルト | <ul style="list-style-type: none"> 1. 灰色粘質シルト、面状まじり 2. 灰色粘質シルト、細砂含む 3. 灰色シルト 4. 灰色シルト 5. 砂を含む灰色シルト 6. 灰色シルト、砂を含むや粘質 7. 緑灰色シルト 8. 灰色粘質シルト、砂含む 9. 灰色シルト、砂含む 10. 灰色粘質シルト 11. 暗緑灰色粘質シルト 12. 緑灰色粘質シルト、細砂含む、互層 13. 緑灰色粘質シルト、細砂含む 14. 暗緑灰色粘質シルト |
|--|--|

fig.143 Hトレンチ第4遺構面b 土壌S-S K10 土壌S-S X01土層断面図

中央に炭化物を含んだ赤茶灰色砂質シルト細層が存在し、その上は、主に茶灰色系の粘質シルト、最上層が赤味暗灰色粘土となる。下層は、赤味青灰色粘土が堆積する。遺物は主に、炭化物層直上付近で多く出土する。溝東半部においては、壘状のものが長さ2.8m程出土している。土器は壺、甕、高坏形土器及び、小型丸底壺が出土している。

溝S D 601他 溝S D 512と南側に平行して、溝S-S D 15上層と溝S D 601を検出している。両者とも落ち込み状の不整形なものであり、堆積土に砂が多く含まれ、時期が異なると考えられるが、双方とも布留期の範囲である。他にも、溝S D 512と北側で平行する溝S D 511やHトレンチで推定される土壌S-S X 01を切り込む溝があり、それぞれがわずかに時期を異にしながら、旧地形の傾斜変換線沿いに東西方向に掘削された溝群であったと理解できる。

また、これらより南側では、下面においても耕作溝と推測されるような小溝を平行して検出する度が増加する。

建物(櫓)S B 601 H 6グリッド南側、調査区主軸に直交して柱穴が東西に、柱間1.5m前後で3個並ぶ。掘り方は径0.4m前後の円形のもので、深さは0.2~0.4mある。その柱穴列の南、東、西の三面を囲むようにして、「L」の字形の二つの溝状落ち込みを検出している。両者の埋土は黒褐色粘土であり、共通することから一連の遺構であった可能性が高い。だとすると、柱穴列は建物跡と理解できる。しかしながら、トレンチ南端の方形状隆起を考えると、溝は周溝墓であった可能性もある。

この柱穴列と溝の軸は、南北座標軸からはかなり振った調査区主軸と共通するが、本調査区域の第4遺構面検出遺構で同様な軸をもつものがいくらかある。F区の第4号周溝墓、溝S D 48、I区の住居址S B 02とその周囲の小溝などがそれであり、それら相互に何らかの関連性があるのかもしれない。

土器群 a面の保存状況が悪いことは先にも述べたが、厚さ5cmに満たない暗褐色粘土層に土器細片が集中するブロックが数ヶ所に認められる。d 5区南側、溝S D 48の肩部付近土器群1やd 4区北東隅、c 5区西側などで検出している。これは、北端溝群の溝S D 42のように削平されたものや遺構最下面のみの残存であることが推定されるものであり、d 5区は前者、c 5・d 4区は後者であろう。

方形状隆起 Hトレンチの南端において、f 3区を中心として、整地土状の盛土が0.1~0.2mの厚さで盛られ、その東側には溝S-S D 12の南北溝が、南側には溝S-S D 11の東西溝が見られ、この両者の溝は区画したような形状のものであった。そして、その南側には蛇行する溝S-S D 10が東西にはしっており、堆積土に明黄褐色砂が認められた。この溝S-S D 11、12に囲まれた部分が周溝墓となるかどうかの積極的な根拠はない。H区の全体の後の削平の具合から考えると、それなりの高さを保っており、周辺の保存状況の良好な地点において確認される可能性は大にある。本調査区において、同様な示唆をもつ遺構群が他にも数ヶ所認められる。これら前後の時期の周溝墓は、やや離れた西の加美遺跡、南の亀井北遺跡で検出されている。

D. I区

I区の第4遺構面は、下面より継続する主河道を南側で検出しており、4面に細分層でき、それぞれに異なった河道輪郭を呈している。遺構面はH区南端からゆるやかな下降に入り、I区南端の河道まで、全体に南下がりの傾斜をもっている。I区でもっとも特徴的なのは、c面より上に黒褐色、暗灰褐色主体の砂まじりの粘・砂質シルト、粘土が0.4m程厚く堆積することである。第4遺構面c 最下面の主たる遺構は河道Iであり、c面はI区において他の面に比べ歴然として遺構密度が高い。しかしながら、中央北よりに溝SD45が北西-南東方向に調査区を横断するが、その北部と南部でもまた、異なっている。北側には竪穴式住居址をはじめとし、掘立柱建物、土壌、溝などを検出したのに対して、南部は北側で検出した北東-南西方向の平行して何条もはしる小溝群と同一方向性を示す小溝を主体に検出したのみで、後は少量のビットと河道である。したがって、中心的な居住域は庄内期の古い段階ではH区中央であり、H区溝SD512付近を南限とし、新しい段階ではI区溝SD45付近まで拡大し、布留期では、本調査区の南側の亀井北遺跡にまで及ぶ一つの中心居住域ブロックの拡大傾向と小規模な移動が想定できる。

溝SD45・145・245 最大幅6.4m、深さ1.5mを計る大きな溝であり、IトレンチとI2グリッドの境で屈曲する。断面形状は逆台形を呈し、人為的にしっかりと掘削された運河的なものであったと考えられる。堆積土は、最下層の緑灰色細砂が0.6m程、堆積した後に、下層、中層の灰色を基調とした砂を含む粘質シルトが主に最下層の細砂をえぐるようにして堆積する。下層、中層の間には特にトレンチ東端において荒砂の細層をはさみ込んでいる。その上には、黄褐色系の上層、灰色系の最上層の砂層がレンズ状堆積し、その最上部は堤状を呈する。その両側には落ち込み状の溝がはしり、北東側のものが後述する溝SD20となる。それらの堆積層各々からは、遺物が大量に出土している。土層の状況からもそうであるが、最下層、上層、最上層の出土状況は、安定しないが、下層と中層は比較的安定した状況を示す。また、下層、中層では完形に近い土器類が多く出土するとともに、木製品の出土率も高い。特に木製品は両側に把手をもつ皿状の容器があり、その側面四方には孔が穿たれる。その他にも片口と脚の付く容器、小型器台の脚のような木製品、板目をタタキ単位とするタタキ板などの特異なものも出土する。各層の時期は、一般的に庄内型壺を含むが、最下層、下層が庄内期新段階（纏向3式）、中層が布留期古段階（纏向3、4式）を、上層、最上層が布留期中段階（小若江北式）を中心とすると考えられる。

溝SD46 この溝は溝SD45とIトレンチI2区で東側に分枝する小溝であり、緑、オリーブがかかった暗灰色の砂・粘質シルトを主体とする。層位的には溝SD45の中層から最下層の間に入るもので庄内期新段階（纏向3式）に属する。西側の溝SD45と接する地点付近では溝の最下部において砂層が認められる。また、溝主軸に沿うような形状で枕や自然木が6本程出土する。そして、その東側には船底部、舷板、堅板と考えられる船材3点が出土した。出土範囲は溝SD45との合流点から2.0~5.5mで、これを境として溝の形状が異なる。西側は皿状の断面形を呈し、幅1.3m、深さ0.4mの大きさである。船材の出土する部分は船底部材の輪郭に沿った形状で、船

材西側で0.9mにせばまった後に東側で1.4mと広がる。その地点では、溝の断面形状は半円形となる。その東側は1.0m前後、船材より東へ離れたところでは、溝の形状はほとんど留めずに落ち込みをなし、一部、Iトレンチ拡張区の溝SD45と接する。

船材 船材は全てスギ材であり、船底部先端4分の1程と考えられるものが溝主軸に沿って、先端部を西に向け出土している。船底部は、刳抜き式のもので幅が最もふくらんだ中央部側、先端より3.0mのところまでとぎれている。最大幅は1.24m、高さ0.42mで、その西側端部は、船底部中央の底面にあたる約3分の1にあたる部分に鉄製工具による明瞭な切断痕が観察される。その両側面の端部の角は丸味をもち摩滅することから、刳抜き船底部は複材によって組み合わせられたものと推定され、その一部を構成する船底部材の継ぎの接合部分、体部中央側に突出した部分を取り除いて転用したのではないかと考えられる。その底部下方には、船底部を中心として放射状に打ち込んだ杭が、外面底部に接して左右3本ずつ計6本が打ち込まれていた。杭は丸く径5cm程で、根入れの深いもので0.7mである。この杭は船底部材の左右の振れをおさえ、固定させるために打ち込まれたものと考えられる。船底部体部の刳り込み内より、楕形木製品、ハケメ工具状の板材木製品やマキハダに用いたと考えられる桜の皮などが出土する。

この船底部材の東側には、溝主軸と直交して堅板が出土する。体部切断面の上部隅と堅板表面とが接して、裏面を上方に向けて据えている。裏面はほぼ水平な状態となっており、かなり意識的に設置されたことを意味している。船底部上面から、この裏面は0.1m浮き上っており、その表面の位置は上層面においても露出していた。

船底部先端、北側に0.85m接して、長さ1.21m、幅0.21m、厚さ2cmの舷側板と考えられる板材が垂直に立てかけられていた。その板材もまた船底部材と同様に、周囲に6本の杭が打ち込まれていた。それらは、北側東端と西端にある南側のものが角杭とあとは丸杭である。

このように船材は固定された状態で組まれていることや船底部両側面上方に穿たれた方形の納穴に本来の船の機能とは関わりがないであろうところの小さな板材に桜の皮を巻いた栓（マキハダ）を挿入することなどから、船としての機能が停止した時点で、解体され、何らかの形で転用されたと考えられる。それは溝の状況やマキハダを使用することから、水位調節もしくは水溜的な役割としていた可能性がある。なお、溝SD46が非常に不安定なものであり、溝SD45との関連性や合流点付近の木材の出土状況などの調査所見から、転用される前段階にはこの場に船が引き上げられた可能性が多いにあり得ると考える。

これら3点の船材のうち、船底部と堅板の2点は比較的複雑な加工の痕が認められ、ある程度、船の構造を知ることができるので、その観察を復元的にとり上げたい。船底部材は体部の一部と先端までで相当すると考えられ、その先端部と体部刳き部の境界には、船体主軸と直交させて外方に傾けて掘り込まれた幅13cmの溝があるが、盾形を呈した長さ1.73m、最大幅0.7m、最小幅0.45mの堅板の下端が長さ・幅・角度ともおおむねこの溝に一致することから、溝に堅板下端をはめ込み樹立したのと考えられる。したがって、船体体部が終わるところから前方上部に

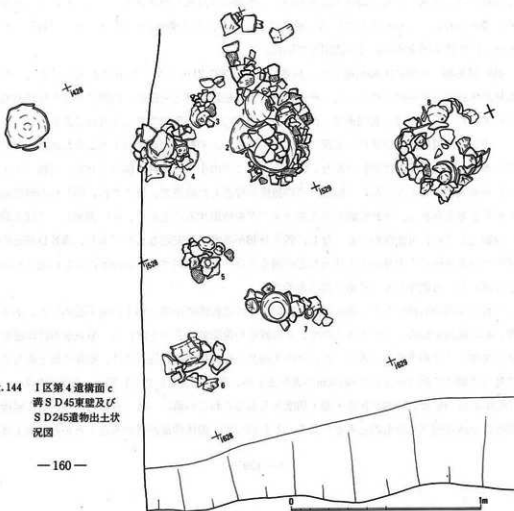
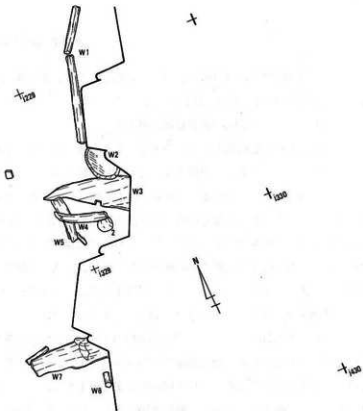


fig. 144 I区第4遺構面c
溝S D45東壁及び
S D245遺物出土状
況図

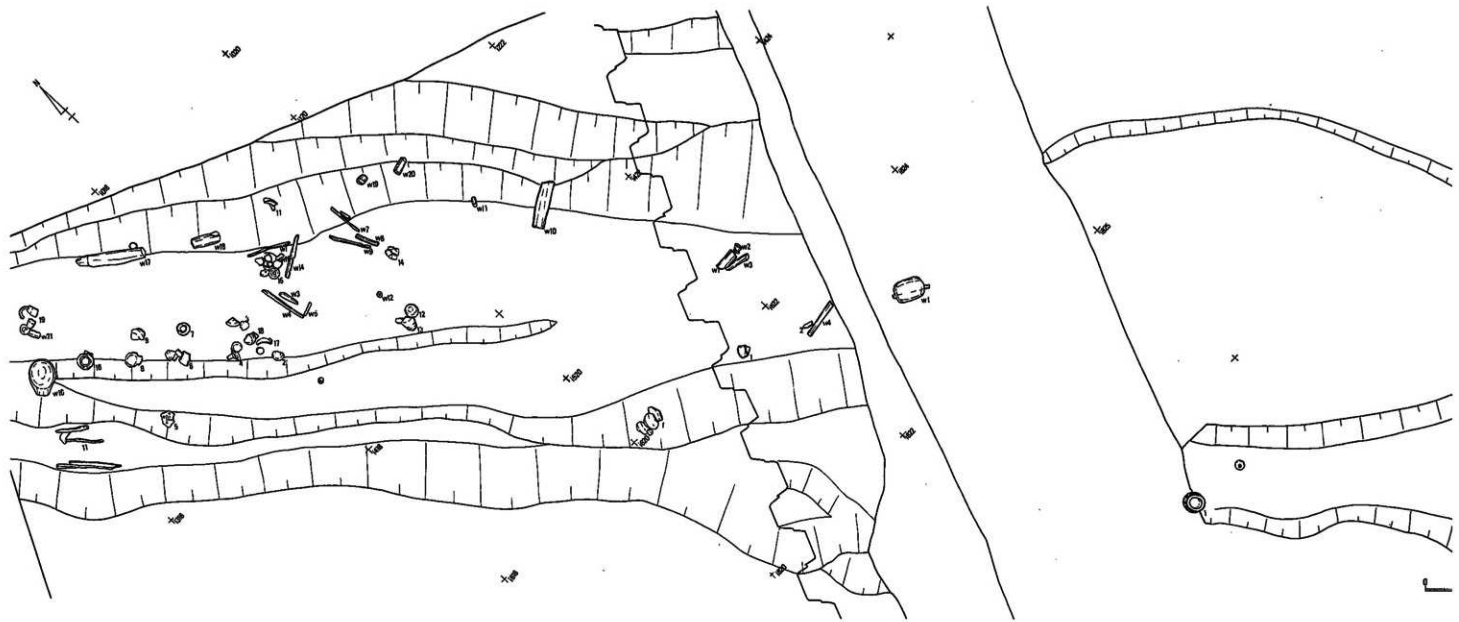


Fig. 145 I区第4遺構面c 葬S D 45・146遺物出土状況図

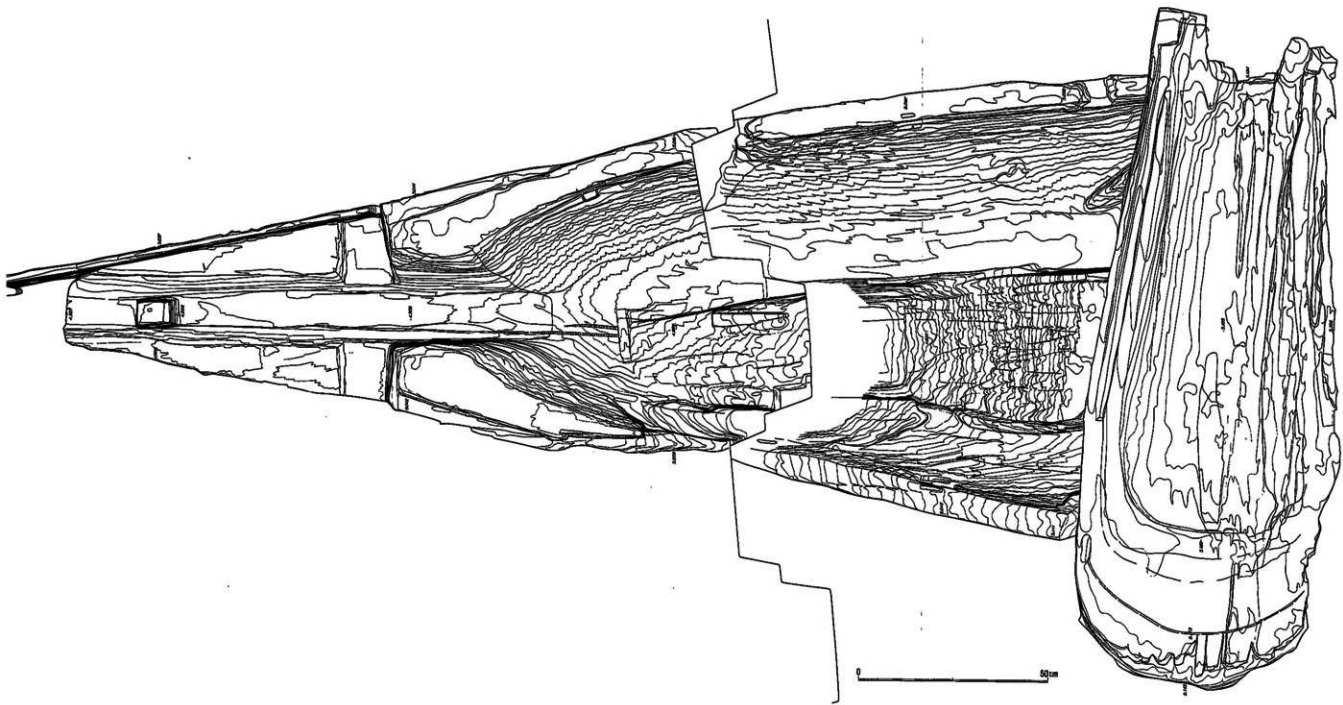


Fig.146 I トレンチ第4遺構面c 船材出土状況等高線図

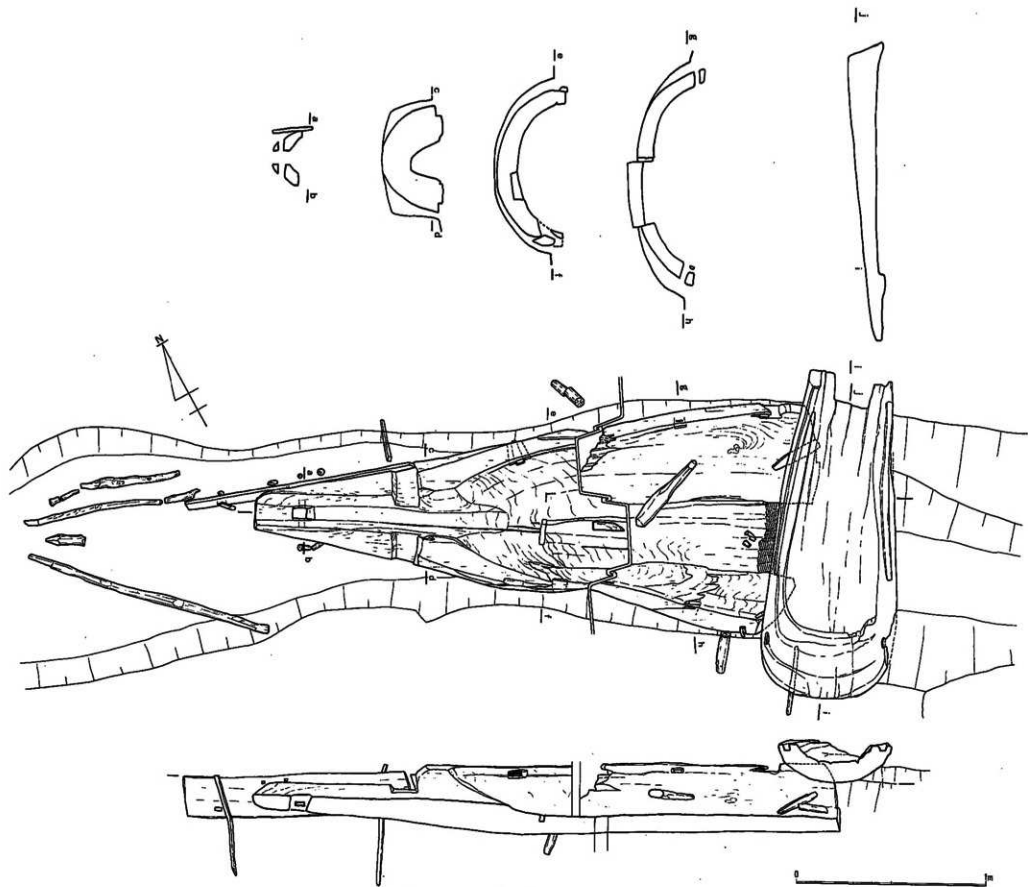


fig. 147 I トレンチ第4遺構面c 船材出土状況図

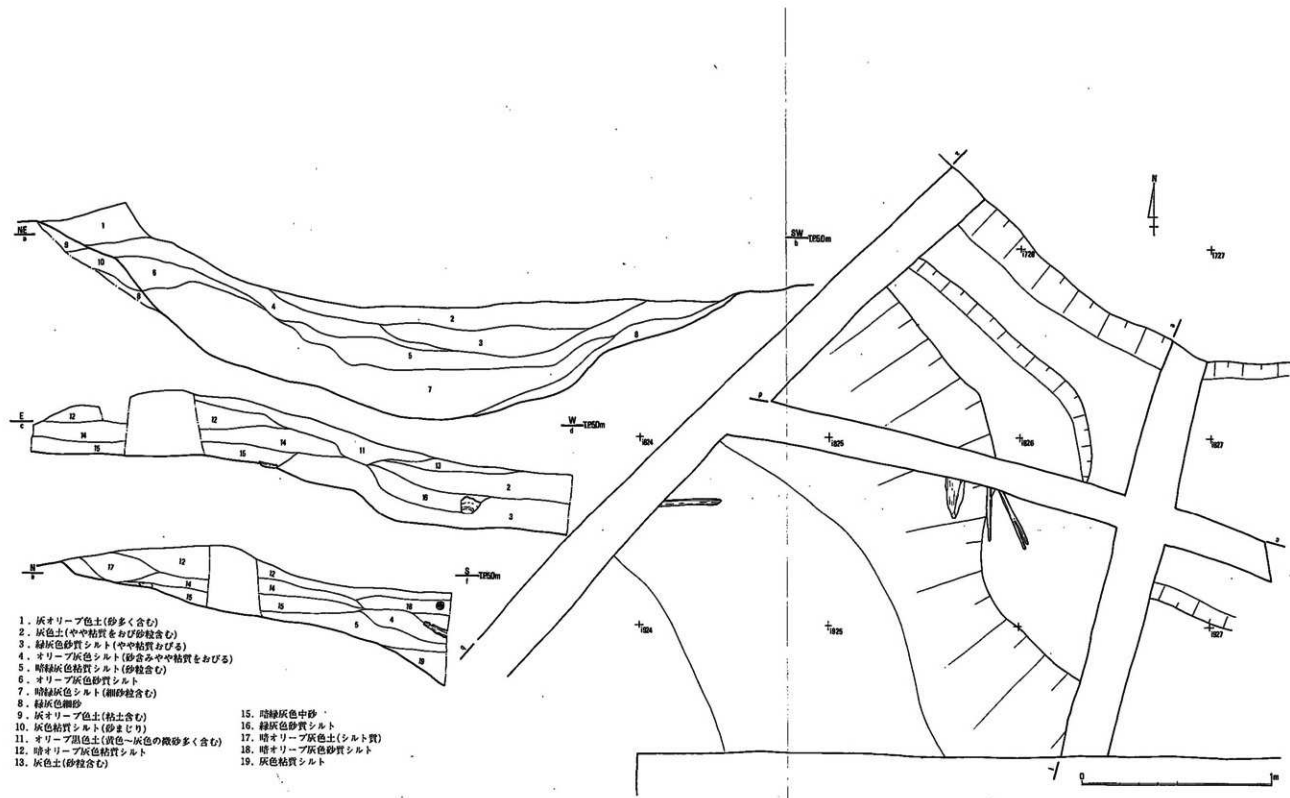


Fig.148 Iトレンチ第4連掘面c 溝S D45平面、土層断面図

斜め外方につき出すように堅板がとりつくこととなる。また、堅板の下端中央に20×13cmの方形の凹部があり、同様に船底部先端にも主軸に沿って断面台形の溝が掘り抜かれている。これは船先端から外方に飛び出す棒状のものが着装されたものか、組手となった上部材が当てられたものが考えられる。船底部溝中央に抜かれた11×8cmの方形の枘穴は棒状のものを固定するためのものであろう。この枘穴には、側面中央に直交して水平に5×2cmの枘穴が貫通する。

船底部は断面半円形に近い状況であり、これに付属する上記以外の顕著な加工は、体部両側面上方に内側が広がる8×3cmの長方形の枘穴が両側それぞれ40～50cmの間隔で4個ずつ穿たれ、そして、最も先端側の枘穴より先端に向かって体部外側面上端に直交する溝まで約3cmの段がつき外側が低くなっている。これらは、モール状のフェンダーの着装に伴うものと考えられる。船底体部内面中央に先端からの割れ目をとめる断面台形の板材をクサビ状に打ちこみ、その割れ目に別の木材で充填補修している。

堅板は丸太を斜めに切断したような形状で、その内面両側の端に幅3cm、深さ2.5cm、長さ102cmと95cmの枘溝が切られており、船底部の上、両側にのる舷側板をはめ込むためのものと考えられ、ちょうどその上部には6.5×2cmの楕円形気味の方形の枘穴が貫通している。

溝S D111 I 1グリッドにおいて、溝S D145と平行して、その南西側に位置する北西-南東方向の溝である。幅1.4m、深さ0.3mの断面皿状のもので、暗黄褐色粘質シルトを埋土とする。溝の南東側で、完形に近い土器4個体が出土している。高坏、壺、甕形土器などが出土する。この溝はc面の上であり、その西側にも溝を確認している。そして、その下面にはやや方向を変え、幅がそれらを包括し、広くなる溝S D112を検出している。

土壌K 32 I 区北端、g 3区に位置する井戸状の土壌である。土壌掘り方が2段となっており、その段で上・下層が明瞭に分離する。上段は、全体に丸味のある一辺2.0m程の隅丸方形の平面形を呈し、深さ0.8mの摺鉢状の形状をなす。堆積土は灰色土が主体で、間に有機物層をはさみ黄色粘質土のブロックも混入する。下段は上段の北東隅によった位置にあり、1.0×0.7mの長円形をなし、上層よりの深さは1.2mあり、断面逆台形を呈する。堆積土は緑灰色粘質シルト、下に灰色砂である。下部より杭と甕形土器下半部が出土する。下層の時期は庄内期新段階（纏向3式）に属すると考える。

住居址S B02 I 区の北側では、溝S D45までに数多くのピットとともに堅穴式住居も検出している。住居址S B02はその中の明瞭に検出したものの一つで、調査区の方角と一致し、トレンチ中央に検出した。この住居址は保存対象とし、高架道路の橋脚位置の変更を行い、保存している。さて、当住居址は一辺3.8mの方形プランの堅穴式住居で、深さ0.2m程が遺存している。住居址の掘り込みは黒褐色砂が混じる整地層を切り込んでおり、I 区北半にある北東-南西方向の平行する溝群を切っている。同様な小溝群は住居址と軸を同じくするものと逆に住居址を切る東西方向のものもあり、3群に大きく分けることができる。こうした溝群が耕作に伴うものであるならば、この地点に関して耕作、住居+耕作、耕作という変化がたどれる。

住居内の埋土は全て住居床の貼り床土に相当すると考えられ、小ブロック粒と砂を多く含んでいる。大きくは3層に分離できるので、最低3回の貼り床があったのであろう。最も下の土は、灰色粘質シルト主体で褐色のブロックを含む。その上は褐色まじりの黄灰色系の土である。最も上部は黄褐色系の土であり、それぞれに小さな浅いピットを検出した。

それらのうち、住居址に付属する施設が良好に遺存するのは最下面のみであり、それを中心に述べる。住居址掘り方の0.15m程、内側に沿って、壁溝が存在する。壁溝は、0.15m～0.3mの幅で四周をまわる。深さは0.15m程で、褐色土を主体とする。壁溝の外側には、板材をあてたであろう厚さ3～4cm程の暗灰色で垂直に変化する箇所が認められた。実際には、掘り方の壁が垂直であったのが、ベースのシルト層の壁面が崩壊した結果、壁面はゆるやかな法面を呈し、若干、いびつな輪郭を見せたと考えられる。柱穴は、四隅に4個

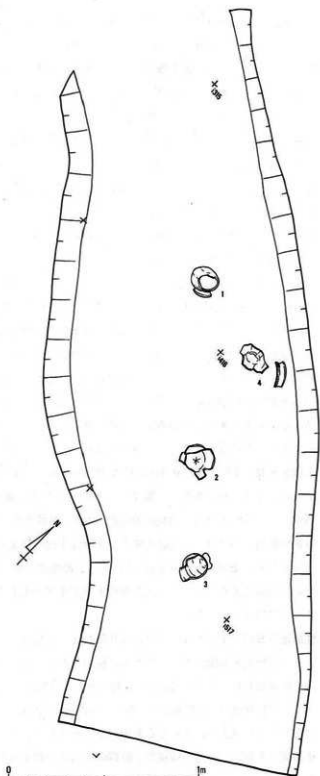


fig.149 I 1グリッド第4遺構面c上
溝S D111土器出土状況図

と南、東の2辺の中央よりに1個ずつ検出した。うち、四隅のものの柱間は2.7m程であり、北東隅の1個については大形の壺形土器の上半部が出土している。また、中央では各面に深さ0.1m前後で径0.6m程の不定形な落ち込みが存在する。さて、住居址の西側一辺中央には、1.7×1.3mの長円形の平面の土壇を検出している。この土壇は、住居址の検出時点から認められたもので、住居址より後出すると考えられるが、併行する可能性もなほはない。掘り込み上面からの深さは0.6m程あり、断面形は「コ」の字形を呈する。埋土は上半部が砂を含んだ黄灰色土であり、下半部が暗緑灰色土である。

住居址の時期

は柱穴内出土遺物などから、庄内期新段階（纏向3式）と考えられる。

掘立柱建物 I 区の北端、中央よりのi3区北側ではまとまった柱穴群を検出している。

うち、4個の柱穴が建物として復原できる。それらは径0.5mの不整形なもので、深さは0.4m前後と安定する。ただ、南東側のもののみ、落ち込み中にあり遺存状況が悪い。掘り方埋土は、上部が灰色の粘質シルト、下部がオリ-

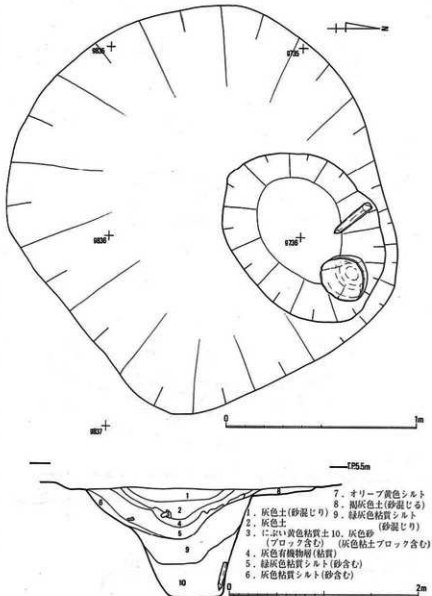


fig.150 I トレンチ第4 遺構面c
土壇S K32 掘下層遺物出土状況、土層断面図

ブ系の暗灰色粘質シルトを主体とする。心柱部分は暗灰色粘質シルトである。柱間は東西が1.8m、南北が1.6mであり、ほぼ南北軸を示す。これらの周囲には柱穴状のピットを検出しており、東側に2個、西側に2個が関連すると考えられる。この4個は、建物の何らかの付属施設を意味するかもしれない。他にも柱穴が散在するがまとまりに欠ける。この建物軸は、H区南端で検出する計8個の東西方向に並ぶ櫛列状のものと共通しており、その関連性が考えられる。

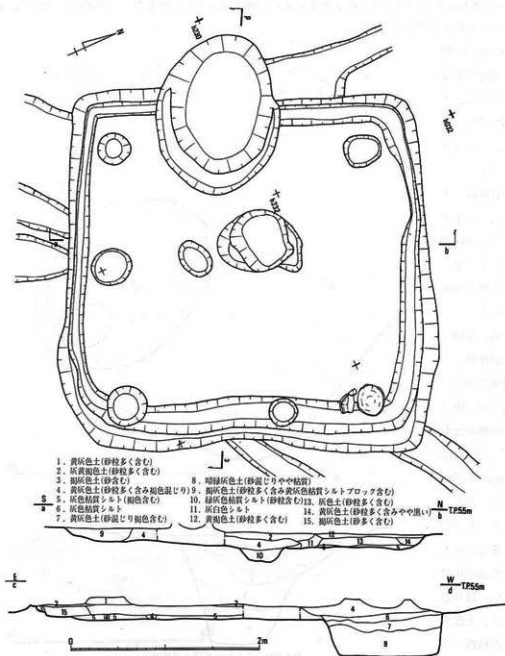


fig.151 Iトレンチ第4遺構面c 住居址SB02平面、土層断面図

こうした一群の軸関係を認めるならば、H区中央の住居址と想定される落ち込みや小溝が南北軸より西に振り、I区の掘立柱建物が南北軸にはぼのり、また、I区の竪穴式住居址が東に振ることによってそれらの順は層位的に確認することが可能である。

第4遺構面 b I
 区のb面は、全体にゆるやかな落ち込みや、溝状の落ち込みなどによって数多くの起伏が

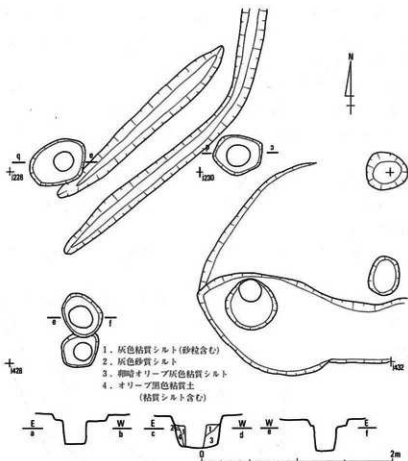


fig.152 Iトレンチ第4遺構面c
 掘立柱建物平面、掘り方土層断面図

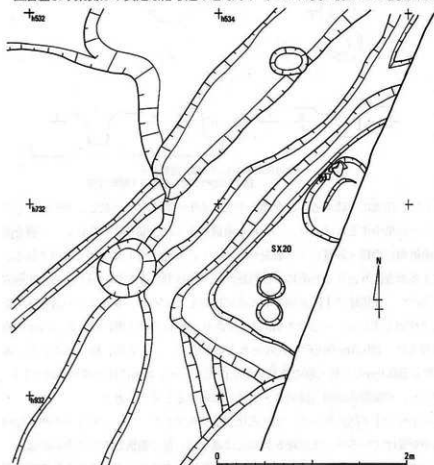
存在する。全体として、南側に下降するが、北端と中央に若干の高まりが存在し、その高まりに土壌、住居址、ピットが集中するにすぎない。それら遺構の多くは、溜り状の粘質シルト層を除去した砂まじりの暗灰褐色の粘・砂質シルト層をベースとし、b面でも下位の面で検出される。住居址S X 20 東半が調査区外となるために、住居址かどうかは判断としないがとりあえず竪穴式住居としてとり上げた。住居址はI区北端のh 3区で検出しているが、a面よりの落ち込みを形成するその下面で検出している。一边は3.6m以上であり、「L」の字形に幅0.2~0.4mの壁溝がまわる。南西隅では、径0.3mの円形の柱穴と考えられるピットを2個、検出している。西側一边の中央よりには径0.9mの不整円形の落ち込みを検出し、その北側には土器片が出土した。土器は菱形土器であり、布留期古段階(纏向3・4式)に属すると考えられる。

住居址S B01 I区中央のj 2区において、竪穴式住居址を検出している。これもその西半は現代河川において削平を受けているが、住居址S X 20とは違って、他の遺構との切り合いがなく、明確に住居址として判断できる。先の住居址S B02同様、検出時点で貼り床と考えられる砂まじりの暗灰色土が現われる。一边約4.0mと考えられる一まわり大きい住居址掘り方の内側には幅0.2

m、深さ0.2mの壁溝が一辺約3.6mでまわる。この壁溝は、上から切り込まれており、南側の一辺、西側がとぎれている。ちょうどその内側には壁溝を切った柱穴と、それをも切って掘られる落ち込みを検出している。その落ち込みは0.7m程の大きさの不定形な浅いものであるが、内には若干の焼土とともに炭化物がつまっております、その中央には倒位の状態で甕形土器の口縁部とその体部の一部が出土し、その土器より、布留期古段階（纏向4式）に属すると考えられる。また、埋土は大きく2層に分かれ、その2層とも壁溝を越えて外側の掘り方法面に合わせ、上昇しながら敷かれる。底面は壁溝付近を境として、5cm程、外側が高くなっており、ベッド状となっている。その段となるところの底面には、一部、溝状の掘り込みが認められることから、最下面においても浅い壁溝が掘り込まれ、それが上部で踏襲されたと考えられなくはない。柱穴については検出できなかった。

この住居址S B01の南西部にも、軸を同じくして検出する幅0.2mの小溝S D21が1.6m程、離れて平行するので、両者の関連性が考えられる。

住居址より東側は不安定な落ち込みとなり、そこには浅い溝S D22を検出している。



溝S D22は、東側が調査区外になるため幅は不明であるが、溝S D45上層の堤状の隆起に北側で交差することとなるために、「く」の字形に北西方向に屈曲すると考えられる。その屈曲部には、溝S D45最上層遺物に含めた高環形土器が出土する他、器台形土器も出土している。時期は住居址S B01より新しい時期、布留期中段

fig. 153 I トレンチ第4遺構面 b
住居址 S X20平面、土器出土状況図

階（小若江北式）が考えられる。

住居址S B01より西側の現代河川を隔てた北西方のI 1 グリッドにおいては、柱穴と考えられるピット群を検出している。これらの大半のピット掘り方よりは土器片が出土するが、時期を限定できるものではない。ただ、住居址S B01からの居住域の連続性を示唆する可能性はある。ただ、両者の間には溝状の落ち込みがはさまる。ピット群は、pit 102~104、105、108、109で、建物を復原することが可能かと考えられるが、その半分近くが東側の調査区外に出るため、保留としたい。ただ、もしそうであるならば、大規模な建物となる。

溝S D20・120・220 住居址S B01とピット群の北東側に沿って、不安定な溜り状の溝S D20・120・220を検出している。この溝は、下面の溝S D45・145・245の最終埋没した砂層の起伏の北東側に形成されたものである。したがって、それら起伏の凹凸によってI トレンチ、I 1、I 2 グリッドそれぞれで土器群がまとまることとなる。

I 1 グリッドの溝S D120では二段になっており、上部が幅2.2m、下部が幅0.9mの細長いものとなっている。

全体として深さ0.5mの断面皿状を呈している。埋土の大半は暗灰色の粘質シルト、泥土及び有機物を含み、下層は砂質シルト、砂層となる。この地点は他の東側のもとは異なり、土器が散在する程度出土である。完形に近い状態で出土したのは、西側の正位の状態で出土した甕形土器一個体のみである。トレンチ部の東半部は、水流によるためか、径0.4mの大きな落ち込

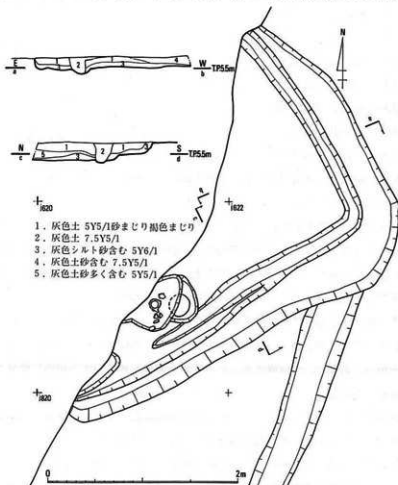


fig. 154 I トレンチ第4遺構面b
住居址S B01平面、土層断面図

みとなって拡がっており、深さも0.6m程となっている。埋土は上層が暗灰色粘質シルト、下層が暗緑灰色粘土である。その粘土と最下層の砂まじりの黒褐色粘質シルト中に土器が多く出土し、特に落ち込みの北側法面に土器が集中して出土している。土器の出土状況は完形に近い壺形土器が南側に多く、北側に甕形土器が多く集中する傾向を見せはするものの、全体には群をなして散乱するといった程度のものである。土器は120個体出土し、甕形土器が多く、他に壺、高環、鉢、飯形土器、小型鉢・器台が出土するが、下部の溝S D45の遺物が多く

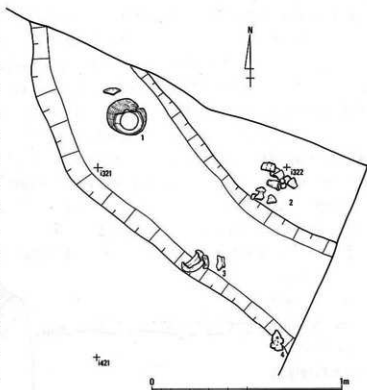


fig. 155 I 1 グリッド第4遺構面b下
溝S D120下北岸土器出土状況図

含まれる。時期は、布留期中段階（小若江北式）の新しいところと考えられる。この落ち込みの南法面には立木が生育する。

トレンチ拡張区においては、下部の溝S D45とともに溝S D46も影響し、幅3.0mの広く、浅い不鮮明な落ち込みとなる。その東側では、船材のうちの縦板の上部の上坦面が露見するような状況となっているが、その地点が隆起したようになっており、幅1.0mまでせばまっている。縦板部分を通じた後にはトレンチ部の落ち込みへとつながり、再度、拡っている。土器は、ちょうど溝がせばまる部分に集中する傾向を見せる。土器は12個体分程であるが、小型精製品が目立つ。他に、壺、甕形土器などがあり、この一群は、布留期古段階（纏向4式）が主体である。このことから、本来、この位置にあった一括の土器群が溝S D20の段階に攪乱されたものとして考えられそうである。

土壇S K42 I区北端i 3区では、トレンチ東端に沿って並ぶ、2基の土壇を検出している。土壇S K42はそのうちの北側に位置するもので、径1.2m程の円形の平面を呈するものである。深さは0.5m程で断面逆台形をなし、上層は砂質シルト、下層は粘質シルトを埋土としており、全体として暗灰色であるが中間に黄灰色を含む。遺物は主に上半部から出土しており、比較的個体づつにまとまって北東部から中央部にかけて集中する。21個体分の土器が出土しているが、そ

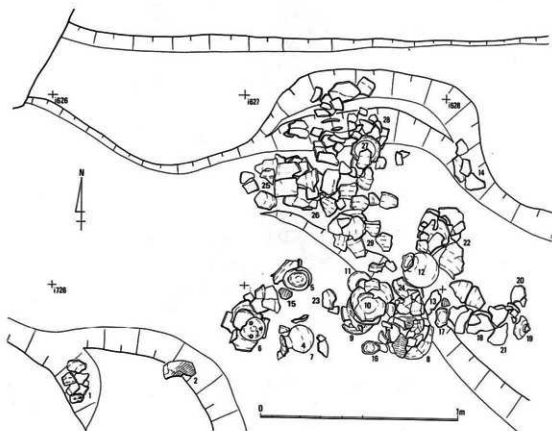


fig.156 I トレンチ第4遺構面b 溝S D20土器出土状況図

のうちの壺、鉢形土器の3点をのぞいては、全て甕形土器である。うち、甕形土器2点は同一個体の可能性があり、ほぼ甕形土器のみの構成と考えてよい。その甕形土器は、口縁端部を上方向につまみあげるもの、口縁端部を上下に拡張し平らにするものと丸くおさめるもの2者が同比率程であり、その他にわずかに口縁端部を内面側に折るかえすものなどがある。それらは庄内型、布留型系を含み多彩である。時期は、布留期古段階（纏向4式）に属する。

土壌S K43 土壌S K42の南側に位置するもので0.84×0.6mの卵形の平面をなす。上方から急勾配で摺鉢状に落ちた後、下部は垂直に近い状態に振り込まれる。深さは0.6mあり、暗灰色の泥土状の粘質シルトが主体である。土壌内には、土器の大型品が充満して、小さな土壌の上下に積み重なって出土する。いずれも欠損品を廃棄したように感じる。そしてそれらの直上には、火を受けた杭状の木材がのっている。土器は、体部径30cm前後の壺、甕形土器が一個体づつある。その他に甕形土器は庄内型甕を主体とするが、口縁端部を丸くおさめるものを含んだものもある。また、甕形土器とともに小型鉢・丸底壺・器台があり、つまみ部分が長い蓋形土器と考えられるものが出土している。全てで、15個体分が出土しており、時期は土壌S K42を少し遡る。

土壌S K34 先の2土壌の5m程東のi2区で検出したものである。西側の上半部は現代河川に

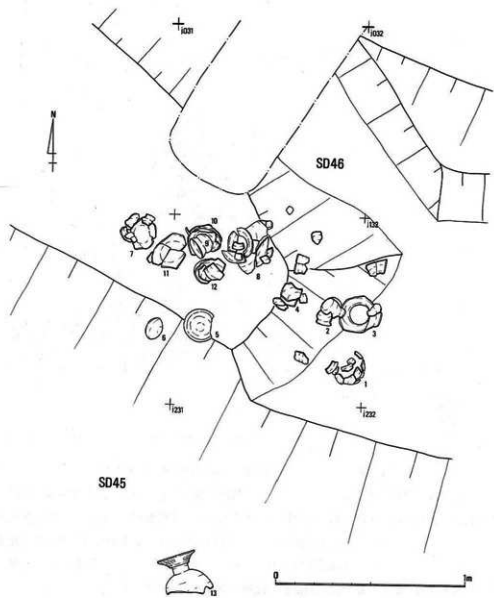


fig.157 I トレンチ拡張区第4遺構面b下 溝S D20土器出土状況図

よって損壊しているが、径2.0m程と考えられる円形の土壌である。復原して記述するならば、深さ0.6mの断面半円形を呈する上部とその中央に径0.6m、深さ0.5mの断面「U」の字形を呈する下部の二段に分かれる。上部は黄褐色、オリーブ、灰色と様々な色調が互層となった粘質シルト系を主体とする。ただし、南東側の法面下部の一部では、粘土と互層になった灰オリーブ細砂を含んだ段が認められることから本来、断面「コ」の字形に掘り込まれたものが崩壊して、半月状を呈したと考えられる。下部は主にオリーブ黄色、灰色の細砂が主体である。これらの状況から、この土壌は井戸とも考えられるが、下部が上部に比べ、かなり小規模なものであるので一考を要する特異なものを受けとめたい。出土遺物は、最上層の土壌東側肩口に高坏形土器がある。

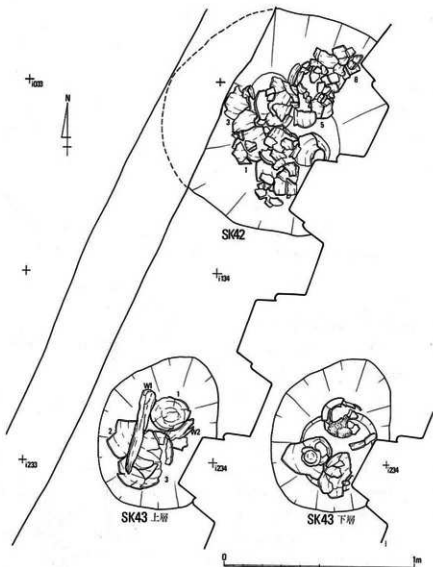


fig.158 I トレンチ第4遺構面b 土壇S K42、43土器出土状況図

この高環形土器は脚摺外面中央に一条の沈線を施すもので、布留期古段階（纏向4式）前後であろうか。

これら3土壇にはさまれて、先のc面の掘立柱建物が存在し、遺構面が異なるが、両者は位置的には関連性をもつ。

第4遺構面aは、b面において形成された起伏を踏襲し凹凸面をなす。これらの中で、検出した顕著な遺構はI区南端における河道II・302、溝S D301、落ち込みS X401などがある。このI区南端の各遺構の記述を進める前に、これまでほとんど触れることのなかった河道Iについて第4遺構面b～dまでの検出状況を記述した後、a面の各遺構が河道の最終埋没面にも相当する

ことから、それらに関連させて、後述することにした。つまり、以下はI区における第4遺構面の河道の変遷ということになる。

〈河道〉

河道I最下層 第5遺構面aの南端河道をほぼ踏襲するもので、おおむね、河道主軸を調査区主軸に直交させる東西方向のものである。幅10~12mのものであり、暗灰色粘土の堆積層を主体とする。この層に伴うと考えられる杭列が、Iトレンチ西端部にかろうじて遺存する。西側は調査区外へ、東側は河道IIによって削られており、0.8mの長さのみの検出である。杭は14本、垂直に打ち込まれている。0.3~0.4m程の根入れの短いものと、0.6~0.7m程の長いものがあり、前者は丸杭が、後者はみかん割りした矢板状のものが用いられる。杭列は、護岸機能を果たす。樹種はスギ、ヤマグワ、コナラ亜属などである。時期は庄内期(纏向2・3式)に属する。

河道I中・下層 中・下層の堆積層は緑灰色砂質シルトを中心としたもので、河道は最下層の下部の輪郭を埋没させている。出土遺物は、完形品やそれに類するものが散発的に出土する程度であるが、トレンチ部西端側には飾板状の大型のスギ材木製品の一部や、同材質の10cm程の切断痕を伴う木片がb509区付近に集中して出土している。このことは溝S D46内出土の船材の出土との関係性を考えるのに興味深いものがある。土層中の土器より、時期は庄内期新段階、布留期古段階(纏向3式)と考えられる。

河道I上層 上層はIトレンチ及びI3グリッドにおいて、シガラミとともに多量の遺物が出土している。砂層、粘層と互層になってお

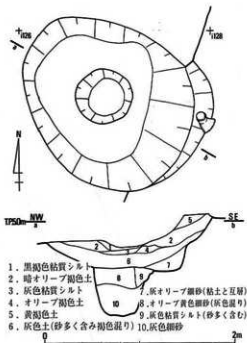


fig.159 Iトレンチ第4遺構面b
土壌S K34平面、土層断面図

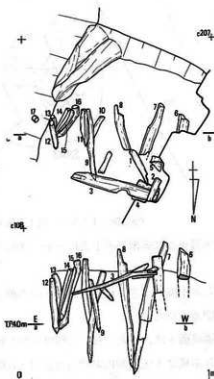


fig.160 Iトレンチ第4遺構面c 河道I
最下層護岸矢板シガラミ平面、立面図

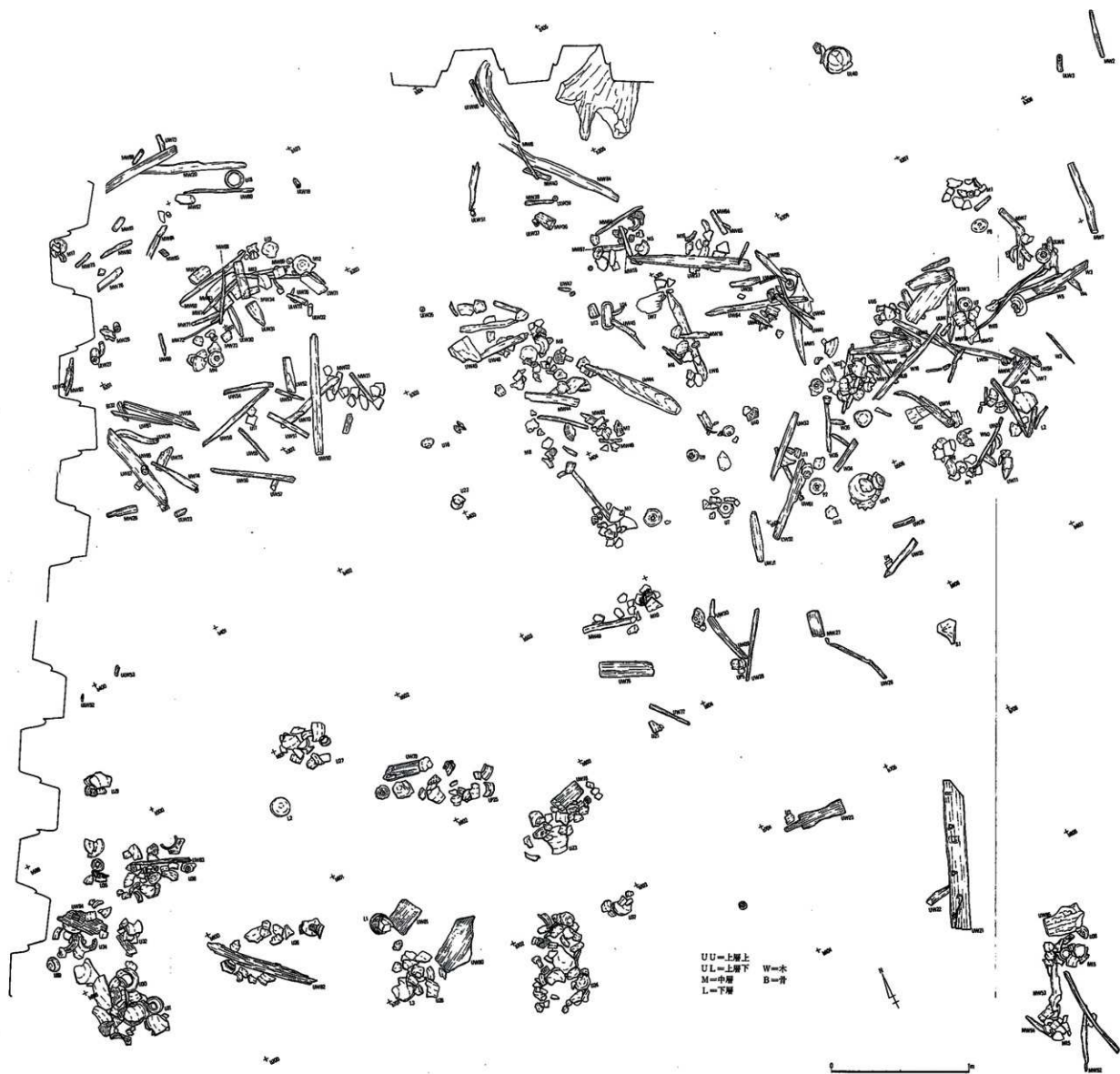


Fig. 161 13 グリッド第4遺構面 c 河遺301遺物出土状況図

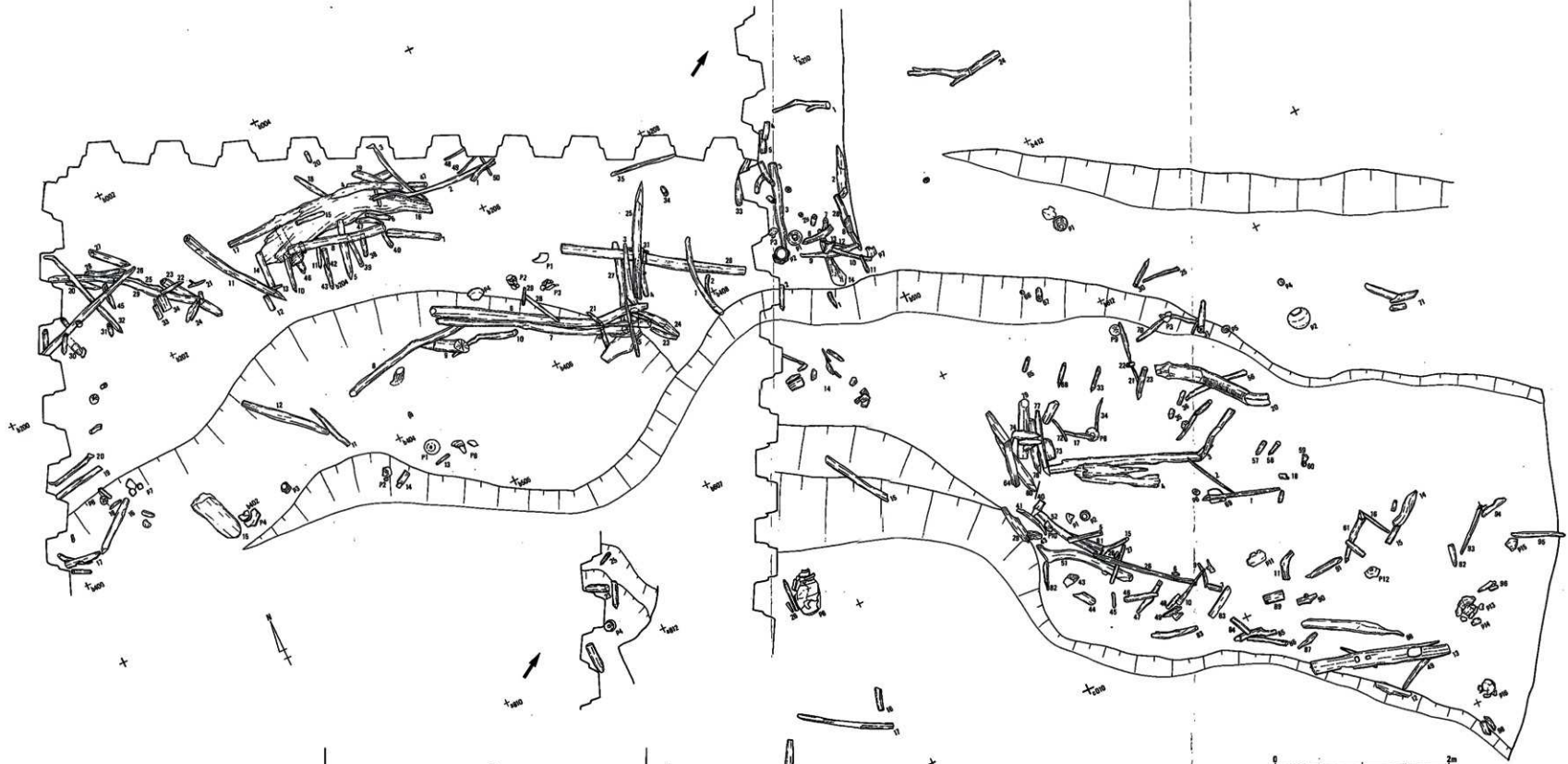


Fig. 162 I区第4遺構面c 河道1上層他遺物出土状況図

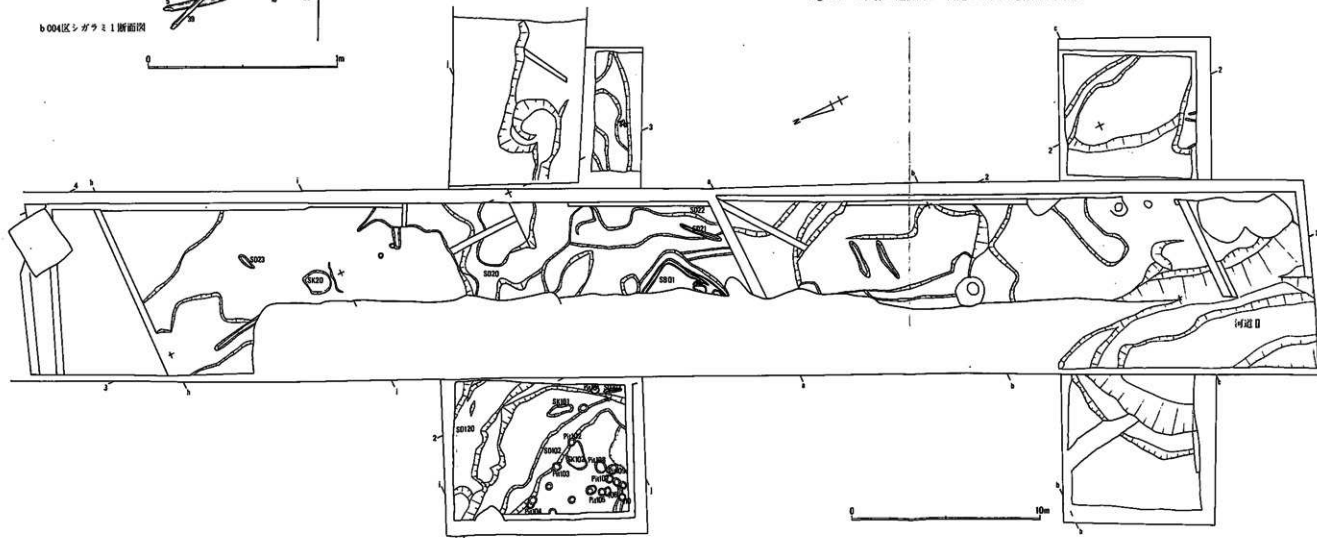
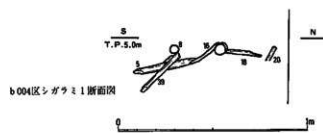


Fig. 163 I区第4遺構面a・b 平面図

り、層的な分離は最上層、河道Ⅱ下層を含め困難な状況にある。特に、Ⅰトレンチ側は現代河川が河道Ⅱと重複することや上層下まで一部、その攪乱が及ぶことから、それらの分離をより一層難しいものとしている。

上層と中層の間には砂層を含み、その上に黒色の有機物を含んだ粘質シルト及び粘土層がある。その層中に木製品類と土器が特に多量に含まれている。それらは上層下としてとりあげているもので、Ⅰ3グリッドにおいて顕著であり、グリッドはほぼ全域に散乱する。それらの出土状況には規則性が認められない。土器は庄内期のものが多く、ほとんどが二次堆積と考えられる。遺物自体の保存状況は極めて良好である。

その上部には、砂、砂質シルト、有機物の細層が互層となって堆積しており、それらはⅠ3グリッド北半とⅠトレンチの河道Ⅰとの北岸に厚く残っている。それより上部から杭が打ち込まれ、シガラミが組まれている。

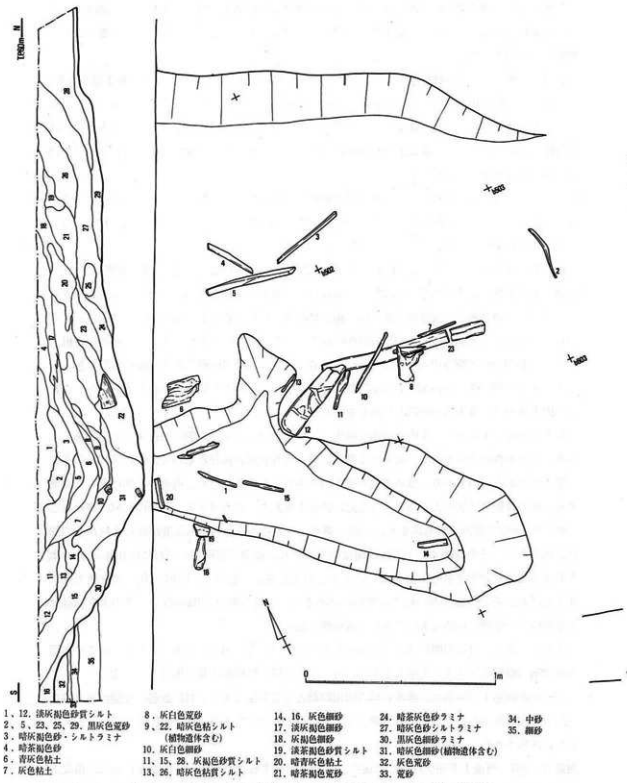
シガラミ 河道Ⅰ北岸でまとまったもの3列を検出している。1列はトレンチ部で検出しており、北西—南東方向のものである。杭は斜め方向に打ち込まれたものが2列に平行し、両者が向き合う合掌形のものである。河道中心部に向く南西側の方の杭列は約0.2~0.4mの間隔で密に、北東側背面の控えとなる杭列は1.0m程の間隔をあけ、まばらに打ち込まれている。両者の杭の根入れは、0.2~0.3mの深さのものがほとんどで、深いものでも0.6m程であり、遺存状況は悪い。そのシガラミ列周囲と南西側約1.5mの間には、自然木とともに木製品、土器が出土する。これらの出土状況は、流木類が停留した感じをいだけせる。

もう2列は、Ⅰ3グリッドの北側隅で検出しているものと、その南側に平行するものがある。両者はほぼ東西の方向を向く。前者は3列中、最も遺存状況が良好なもので、0.7~0.8mの長さの根入れがあるものもある。斜め方向の杭1列を中心として構成され、河道中心部に向けて南面する。その背面は砂層がより隆起するために控えをもたないようである。斜めの杭列は密なところで、0.2m程の間隔で打ち込まれ、一部、補充と考えられる打ち込み角度が異なる杭がその間に認められる。その背面すぐ上方には樹皮があてられ、前面、背面それぞれに径10cm前後の太さの木が横方向に組まれる。後者は、ほとんど列をなさないもので、径10cm程の木を横方向に3本たばね、その両側に細い杭で合掌形にとめるものと横方向の径10cm程の一本の木を同様な太さの杭で合掌形に止めるものであり、連続性に乏しい。

これらシガラミ材の周囲には、土器がからみつくようにして出土しており、それらは主に布留期古段階（纏向3・4式）を中心としている。これ以降、砂層が大量に堆積している。

こうした河道Ⅰの時期は、溝S D45の活用時期とも符合しており、特に砂層の堆積があまりない粘質系の土砂のおだやかな堆積時期も主に庄内期と共通しており、両者が同時期に併行して存在し、活用されたことは明白である。

河道Ⅱ・302 河道Ⅰが完全埋没した後に、それと直交するような方向で、すなわちほぼ南北方向に検出したものである。幅は10m近くあり、bラインの手前でとぎれる。この上部が北方へ続



- | | | | | |
|-------------------------|----------------------|---------------|-------------------|--------|
| 1, 12. 淡灰褐色砂質シルト | 8. 灰白色寛砂 | 14, 16. 灰色細砂 | 24. 暗茶灰色砂ラミナ | 34. 中砂 |
| 2, 5, 23, 25, 29. 黒灰色寛砂 | 9, 22. 暗灰色粘シルト | 17. 淡灰褐色細砂 | 27. 暗灰色砂シルトラミナ | 35. 細砂 |
| 3. 暗灰褐色砂-シルトラミナ | (植物遺体含む) | 18. 灰褐色細砂 | 30. 黒灰色細砂ラミナ | |
| 4. 暗茶褐色砂 | 10. 灰白色細砂 | 19. 淡茶褐色砂質シルト | 31. 暗灰色細砂(植物遺体含む) | |
| 5. 青灰色粘土 | 11, 15, 28. 灰褐色砂質シルト | 20. 暗青灰色粘土 | 32. 灰色寛砂 | |
| 7. 灰色粘土 | 13, 26. 暗灰色粘質シルト | 21. 暗茶褐色寛砂 | 33. 寛砂 | |

fig. 164 I 3 グリッド第4遺構面 a 下 溝 S D301 下層シガラム材出土状況図

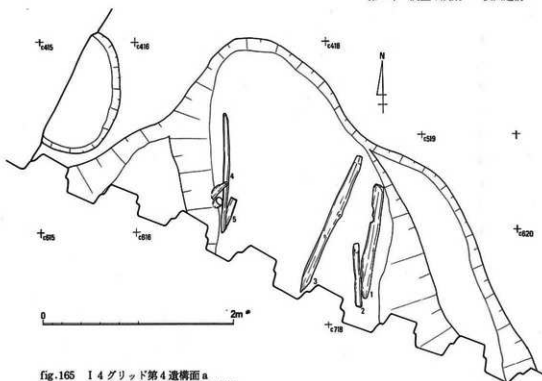


Fig. 165 I 4 グリッド第4 遺構面 a
落ち込み S X 401 木材出土状況図

くのかどうかは、現代河川と周囲の削平のため判断しがたい。深さは約2.0mであり、断面「U」の字形を呈する。堆積土は黒灰・暗灰褐色粘質シルト層が主体であり、I トレンチ南端の最上層では6世紀末葉頃の土師器の高坏形土器と須恵器の坏蓋が出土している。

溝 S D 301 河道 II の最終的な肩が形成される前に、河道 I と同じ方向の溝を I 3 グリッドで検出している。河道 II の上層検出面より0.3mの厚さの砂質シルトをとりのぞいた位置で検出している。下層に灰色系の砂が、上層には灰褐色系の砂と灰色系の粘土が主体に堆積する。溝内には、有機物とともに梯子形など木製品が出土するが、土器片がわずかで時期は分からない。この溝は南東側の河道 II 西肩と接するところで、溝底が上昇しとぎれる。これが河道 I の最終埋没部分であったのか、河道 II と輪郭を共有する河道が存在し、この溝との間がダム状に起伏していたのか、いずれの可能性もある。

落ち込み S X 401 溝 S D 301 と同様な 2 段に落ち込んだ溝状のものである。I 4 グリッドの南端に2.0m程のみ検出しており、中央、南へ向って下降する。堆積土は上層が灰褐色、下層が灰色粘質シルトである。この落ち込みの主軸と考えられる方向に沿って、底面に角材状の枕材が5本南北に並んで出土している。また、底面西端には2本の枕が打ち込まれている。この落ち込みは溝 S D 301 と同様なものが上部の削平を受けて、下部の溝底最深部のみが残存した結果、落ち込み状のものとして検出した可能性がある。そうすると木枕は溝施設の一部かもしれない。これも土器片の出土がわずかで、溝 S D 301、落ち込み S X 401 は、層位的には古墳時代であることには誤りない。

E. J区

J区の第4遺構面は、暗緑灰、暗灰色を呈する砂質シルトが下半に0.15m程堆積し、庄内期前後を中心とする。その上半では、北側の他の調査区では削平され遺存状況が良好でないa面に相当する暗灰色粘質シルト層がよく残る。この面は、J区中央部分を中心とする9ラインから10ラインの間については、第5遺構面で形成された隆起が帯状にあり、他の地区と同様であるが、その東西両側のJ1・2グリッドでは堆積土が多く残っており、検出遺構も顕著である。

第4遺構面d この面の主な遺構としては、9ラインを中心とした南北の河道を第5遺構面aに検出しているが、それを踏襲したであろう河道がある。その他には心柱を残す柱穴などが認められる他、J1・2グリッドにおいては、落ち込み、土壌がある。

河道 河道はJトレンチ南半で検出しているが、その西側は現代河川に削平され底部のみが遺存

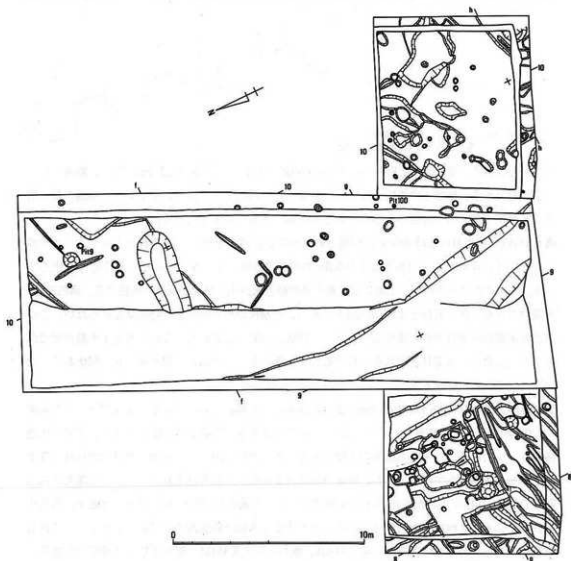


Fig. 166 J区第4遺構面d 平面図

する。幅は3.5mで、深さは0.5～0.8mの断面「コ」の字形を呈する。人為的な介入が感じられる。

溝 S D 116 河道と2.0m程、西側に平行して検出する溝である。溝はゆるやかに落ちる上段と、比較的急に落ち、断面「U」の字形を呈する下段の二段になっている。堆積土は、オリーブ灰まじりの暗灰色砂質土を主体とし、砂を多く含んでいる。溝中心部の上層北半には、6個体分の土器と木材が列をなして出土している。完形の壺、甕形土器を含み、他には高環形土器もある。時期は、庄内期古段階（縦向2式）前後である。

第4遺構面c J区において、とりわけ全体に遺構が集中する面である。掘立柱建物、円形の落ち込み、土塙、井戸、溝を検出しており、J1、J2グリッドの地形がやや落ちるところでは、特に遺構が錯綜している。掘立柱建物 J区の南半には柱穴状のビットがほぼまんべんなく存在するが、調査区が限定されるため、大型のものについては保留せざるをえない。小規模なものではJトレンチg9区の4個の柱穴がまとまりを見せ（建物S B 01）、柱間1.8～2.0mのもので、南北主軸からやや

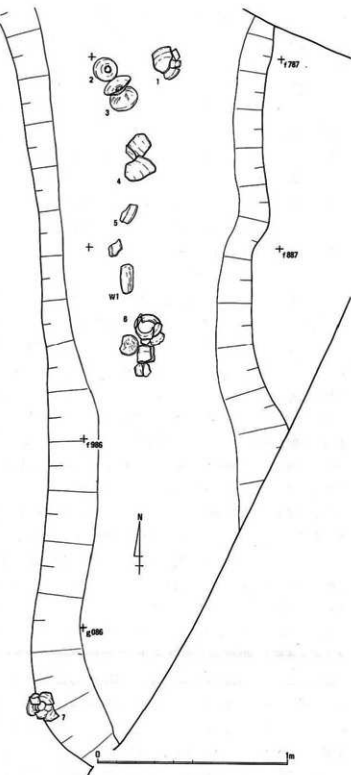


fig.167 J1グリッド第4遺構面d
溝 S D 116土器出土状況図

東にふる。その中央には、柱穴が一個認められるところから東柱となるかもしれない。南側約1.5mのところでは、軸を同じくして、東西方向に柱間約1.5mで柱穴が3個並ぶ。その北側では、建物S B01よりも軸を東にふる溝S A01を検出している。柱穴が3個、東西方向に並ぶが、間隔は不規則である。

J1グリッドでは、下面の溝S D116の西側、ほぼ南北主軸に沿って、3個の柱穴が並ぶ。柱間は2.0mである。

J2グリッドの北西では、そのコーナーが土壌によって掘り込まれているために判然としないが、幅0.4mの溝を「レ」の字形に検出している。同様な溝を、不明瞭ではあるが、Jトレンチのg9区北端でも検出している。その区画内には柱穴を多く検出しており、うち4個は柱間2.0~2.4mで「L」字にまがる関係が認められ、大型建物となる可能性をもっている。また、J2グリッド中央よりやや南側、h10区南西隅で6個の柱穴がまとまる。東西に長い2間×1間の建物が復元できる。しかしながら、桁と梁とで柱間が大きく異なっており、桁の柱間は0.8~1.0mと短く、梁は1.6mと倍近くあり、全体として、やや長方形となるだけである。

溝 幅0.2~0.5m程の小溝は、この面では東西方向のものがJ1・2グリッドに認められ、南北方向のものはわずかである。そのうちにJ1グリッドの南北方向の溝S D112がある。その西側には、この面では比較的幅広い溝S D113があり、唯一のものである。幅0.8mの断面「V」の字形に落ちる深さ0.6mの溝であり、暗茶褐色砂質シルトを埋土とする。その溝の南側は、溝S D115を中心とする小溝群の落ち込みで切られている。

土壌S X01 J区北半では、径7.0m程の不整形な円形の落ち込みを検出している。全体に0.2mの灰色砂質シルトが堆積した後、その北側に2.2mの幅で溝状に土壌が掘り込まれている。西側は現代河川の削平によって分からないが、東側では丸くなっておさまり、長さ4.6m以上である。深さは0.55mで、断面半円形を呈する。埋土は法面に沿って、灰色砂質シルトがうすく堆積した後、その上へ土壌下半部にわたって黒色有機物層を含んだオリブ黒色粘質シルトが堆積し、板状の木製品やチップ状の木材の削りかすなどとともに土器が出土する。土器は、比較的に形をとどめたものが散在する。上層の暗オリブ及び緑がかる灰色粘質シルトを主体とする土層よりは、土器細片の出土が多い。これらが埋没してからは、径0.5~0.6mの方形気味の円形のビットが掘り込まれている。深さは0.3~0.5mで、暗緑灰色を主体としたものである。出土土器より、落ち込み部と溝部との時期差は認められず、庄内期新段階（纏向3式）に属している。

さて、この円形の落ち込み部と溝部との関係であるが、円形の落ち込み部の底面には、d面において明瞭に検出した幅0.2mの竪穴式住居の壁溝状のものを「L」の字形に検出している。このことから本来、竪穴式住居であったものの凹みが整地された可能性がある。そして、溝状の土壌は位置的に見て、その凹みの輪郭が残存していた時点で、それを意識して掘り込まれたことがおおいに考えられる。しかしながら、それらの直接的な関係については推測すら難しい。なお、溝状のものについては土層の堆積状況から、井戸ないし水溜めの機能と、また木材の加工も伴っ

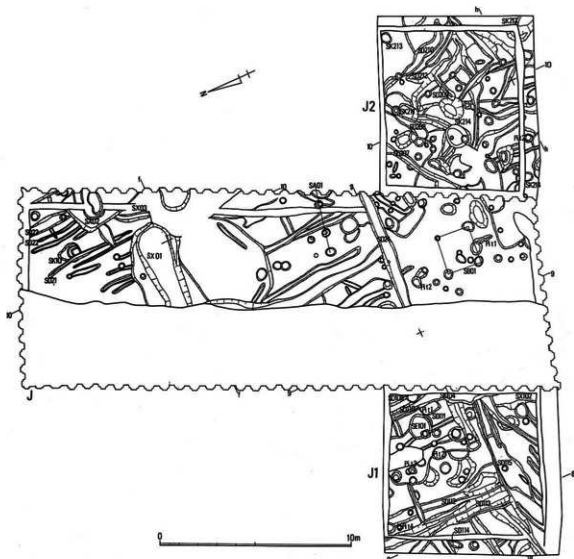


fig.168 J区第4遺構面c 平面図

ていたかもしれない。

土壌S X02、S X03 土壌S X01の東側は、方形の平面形を呈する断面皿状の土壌S X02と、それに切られて土壌S X03がある。後者は現代の攪乱坑にも損壊をうけており、青灰色砂質シルトの埋土と皿状に落ち込むことが知られるだけである。前者は暗青灰色粘・砂質シルトで、比較的に多く土器を含んでおり、庄内期古段階（縦向2式）と考えられる。

土壌S K104 J1グリッド東端中央で検出する溝状のものである。これは下面の溝S D116に影響されたものと考えられるものであるが、南東部は現代河川があるために平面形など分らない。南側では特に土器が集中しており、甕、鉢、変形土器や小型器台が見られる。中でも凹線文が口縁部に施される大形の変形土器は、土壌S X01のものと胎土が非常に似通っており、時期も同様

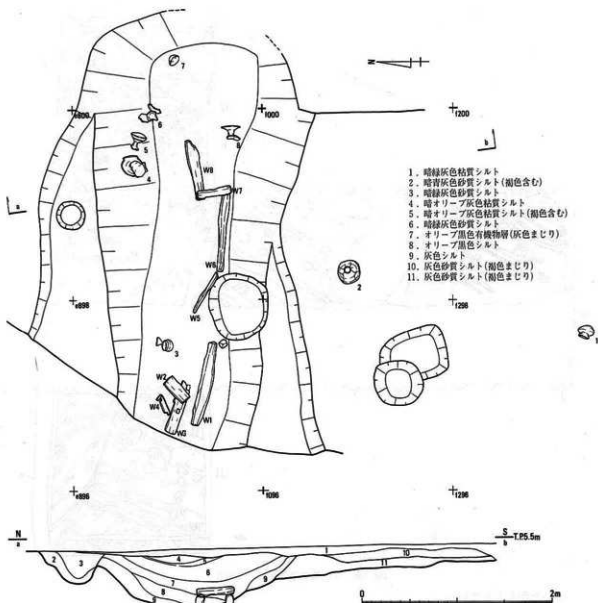


fig.169 Jトレンチ第4遺構面c 土壌S X01遺物出土状況、土層断面図

と判断される。

土壌S K212 J2グリッドの南東隅で検出した土壌であり、短径が1.4m、長径が2.0mと推測される。掘り込みは2段となっており、下段は不安定な形状で摺鉢状に落ちる。深さは0.6m程であり、オリーブ味の暗灰色砂質シルトである。土壌下部より甕、高坏、手培り形土器がそれぞれ出土しており、弥生時代末(纏向1式)と考えられる。また、この時期の遺構が散在することが考えられ、同時にかなりの削平も伴っていることが分かる。また、北側の溝S D210もこの時期と考えられ、その関連性が注目される。

土壌 S K 213 J 2 グリッド北東隅において検出しており、径0.5mのはぼ正円形をなすものである。遺物の出土はなかったが、埋土の灰色粘質シルト層の間に炭化物細層を伴っている。この類の遺構は同じグリッド中央の土壌 S K 214、埋土としてはその周囲の溝などにも共通して認められる。

井戸 S E 101 J 1 グリッド北東側に位置するものである。径1.35mの正円形の平面を呈するものである。ほぼ垂直に落ちるもので、深さが0.5mある。埋土は暗灰色の砂質シルトを多く含んだ泥土状の粘質シルトであり、主だった遺物は北側の肩口と底面付近の中央南東よりに出土する高坏、甕形土器がある。これらにより時期は庄内期新段階（縦向3式）と考える。

第4遺構面 b J区のこの面では、主に南北の平行する小溝群を検出している。これら小溝群には、2.0m程の間隔をおいた部分がト

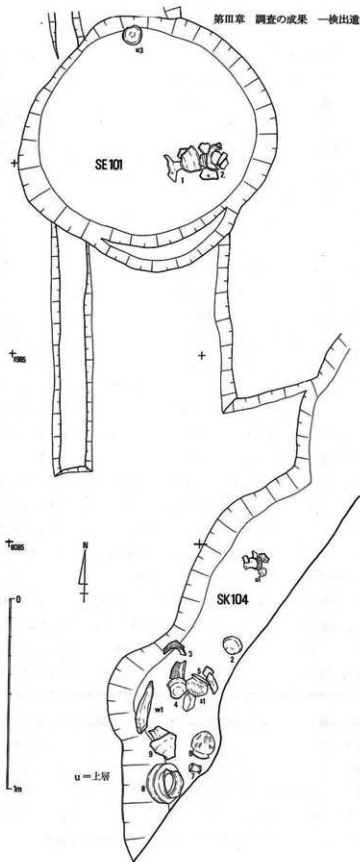


fig. 170 J 1 グリッド
第4遺構面 c
井戸 S E 101、
土壌 S K 104
土器出土状況図

レンチ部の9と10ラインの中央付近にある。その両側は、間隔が0.2~0.5mの密な状態となり、J1グリッド北半とJ2グリッド南半中央ではより密となって溝同士、切り合いが激しくなる。平面的には、そのような傾向があるものの、トレンチ部の溝を整理してみると9と10ラインで見られた溝と確実に平行関係にあるものは、ほぼ2.0mの等間隔であることが確認できる（平行溝）。そうして得られた溝と他の溝との関係を分解すると、その平行溝に切られる同様な幅の溝は、南北と東西の方向のものがあり、主軸関係を同じくする一群が認められるものの、アトランダムなあり方を呈する。平行溝を

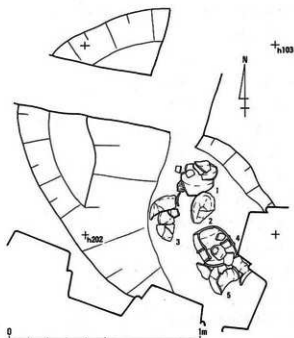


fig.171 J2グリッド第4遺構面c
土壌S K212土器出土状況図

切るものに関しては幅広いもので占められ、トレンチ部の幅0.5mの東西溝S D24やJ2グリッドの南北溝が軸を同じくしてある他、同等の幅ないしは、それ以上のものが複雑にからみ合う。特に、一段下降するJ2グリッド東半は複雑な様相を呈している。全体には東西のgラインから南と南北の9ラインから7m東の西の区域においては、小溝群が認められないが、これは区画用途の差としてもとめるより、地形的な変化であったことが推察される。以上のごとく小溝群は、大きくは3回、切り合い関係からは5回の形状の変化があったことが認められる。

この面ではこの他に、J2グリッドで土壌、落ち込み、ピットを検出している。

第4遺構面a この面は全体としてゆるやかな起伏をもっており、10ラインから西側約5mの間が南北に帯状に高くなっている。それより東側のトレンチ北東部とJ2グリッド東半部は東へ向って下降しており、泥土状の黒色及び暗緑灰色の粘土が入り込み、I区の河道IIの西側としてつながる可能性が高い。この遺構面の凹部の覆土より、須恵器片が出土しており、およそ6世紀の年代をあてはめることができ、I区の河道IIとも年代的な矛盾はない。

検出遺構としては、掘立柱建物、落ち込み、土壌、溝がある。

建物S B201 J2グリッドの10ラインの東西に位置する。径0.2mの柱根に0.3~0.8mの不整形な掘り方をもつ柱穴が5個まとまりをみせる。軸がかなり西にふり、直角に曲って柱穴が並ぶ。建物として復原すると東側が欠落するが、地形が東へ下降し、柱穴の遺存が深さ0.3m程であるので削平されたと考えるのが妥当であろう。こうして復原した建物は、2間×2間の正方形の建物であり、その柱間はほぼ等間隔に1.6mで10.24m²の小規模なものとなる。

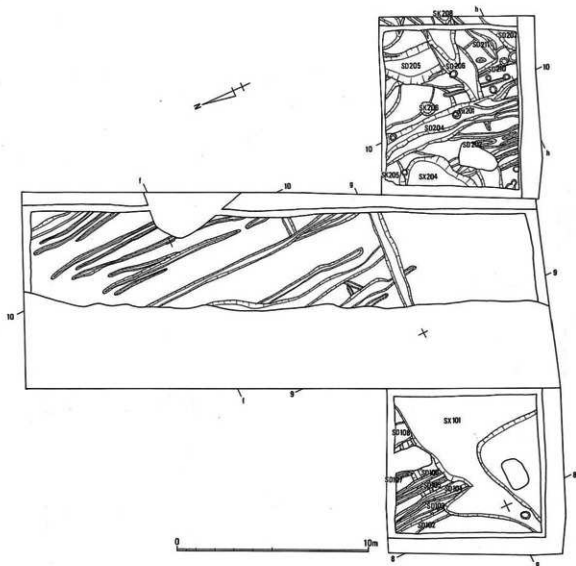


fig.172 J区第4遺構面b 平面図

土壌S K201～203 建物S B201の西側には不安定な落ち込みを3基検出している。オリーブ味の灰色粘土を埋土とし、ベースは砂まじりの粘質シルトである。深さは0.15～0.2mのもので溜り状のものである。

土壌S K102、103 J1グリッド東端において検出しており、双方とも東半が欠け、径2.2mの正円形のものである。北側の土壌S K103は断面「U」の字形、南側の土壌S K102は断面「コ」の字形の差があるが、深さは0.3m程の浅いものである。

溝SD101 J1グリッド北辺と西辺に沿って検出する溝状のものである。しかしながら、南側の肩を「L」の字形に検出したのみであって、その肩から全体に北西に向って下降することから、落ち込みと称するべきかもしれない。溝内は砂質シルト細層を伴った不安定な粘質シルトで埋没

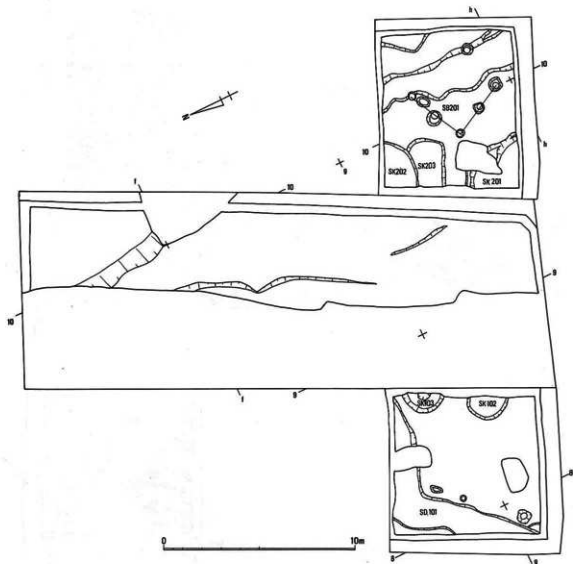


fig.173 J区第4遺構面 a 平面図

していることから、若干の水流が考えられる。土中より須恵器、土師器が出土している。

J区のような遺構は、泥土状のシルト質の堆積土が多く、北側の調査区に比べかなり不安定な面である。遺構密度も決して多いということはないことから、居住を中心とするのに適当な区域ではあまりなかったと考えられる。

第8節 奈良・平安時代

A. E・F区

E・F区における第3遺構面は、第5遺構面において形成された河道の隆起によって、E区北半が高くなっており、南へ向ってなだらかに下降する。したがって、E区北半では整地層が一層かろうじて遺存する状況である。それに対してE区中央の鞍部となるところは3層となる。それら整地層は明褐色砂質シルトを主体としている。E区南端及びF区北半部には、第4遺構面の包含層である暗褐色粘土に遺構が掘り込まれている。その上には、暗赤褐、褐灰、灰オリーブなどの色調の砂及び砂質シルトが1層ないし2層の整地層として敷きならされる。F区南半部においては、包含層、整地層は顕著に認められずに、下部の第4遺構面の周溝墓上坦面が露呈する。

検出した遺構は、731個におよぶ掘立柱の柱穴とそれに類するものが中心となる。他に落ち込み、土壇、焼土壇、井戸、溝がある。

第3遺構面 c・d この面は、奈良時代を中心とする整地層のほとんどを除去した状況で、若干の凹凸が存在する。凹凸面は主に、Eトレンチ北端で北東へ落ちるものと、Eトレンチ北半中央に第4遺構面aで検出した円形落ち込みSX12上部の陥没した落ち込みがある。他には、Eトレンチ北半の南に東西方向に2本の溝状の落ち込みがある。これも、北側の方は、下面の溝SD54の陥没面と考えられ、幅2.0mと下部と同様な幅で、深さ0.2mのものとなる。Eトレンチ南端もまた、溝S-SD12上の東半部が落ちる。

検出遺構としては、E区北端に「L」の字形に曲がる溝があり、東西方向部分を下面の溝SD57の落ちを利用したと考えられる。幅は1.2~2.0mのもので、深さ0.3m程の断面皿状のものである。埋土は黒味がかかった暗茶褐色の砂である。また、その溝を切って南北方向に断面逆台形の溝SD50がある。幅1.0m、深さ0.5mのしっかりしたもので、荒砂を多く含む。その溝と平行して、f4区の中央やや東よりに、長さ1.7m、幅0.5m、深さ0.5mの灰色砂質シルトを主体とする長方形土壇がある。この土壇は、横断面「コ」の字形を呈して法面が垂直に落ちるもので、7世紀代前後の土器細片を含んでいる。これらの他には、曲物井戸と焼土壇が認められる。

曲物井戸 S E 03 長方形土壇の北東側、約1.5mに位置して検出している。1.05×0.78mの長円形の掘り方の井戸で、深さ0.8mある。掘り方は、2段に掘り込まれ下段の径0.54m、深さ0.4mの中に曲物が掘えられている。曲物は径34.0cmのもので、12.0cmの幅の枠が5段に継がれるが、上半部は緩じがはずれ、拡がるとともに下方に落ち込んでしまっている。埋土は、上層が茶褐色の砂を主体にし、中・下層は暗青灰色の砂質シルトを主体にしている。

焼土壇 4ライン上、gとhラインの中央あたりに位置し、南半分は東西方向の溝状の落ち込みにかかる。一辺0.8mの正方形の掘り方で、法面は垂直に落ち、深さ0.5m程ある。上方の肩口付近で、土師器環身が出土しており、8世紀前葉頃のものと考えられる。暗黄褐色粘質シルト層を主たる埋土とし、その土中には炭化物をはさんでおり、赤褐色を呈する部分もある。

第3遺構面 b この面と上面の a 面は掘立柱を中心とした遺構群が展開する。掘立柱は両面を合わせて後述することとする。まず、確実にこの面に伴うと考えられるものに E 区では、南北溝がある。

溝 S D 18 g 4 区に位置し、幅 0.3~0.6m のものである。南半部は断面「コ」の字形で、北半部は 2 段に掘り込まれ、その下部は「V」の字形を呈する。堆積土は暗褐色砂質シルトである。

溝 S D 28 溝 S D 18 の東側、約 3.0m のところで平行するものである。幅 1.0m の幅広いもので、断面「コ」の字形をなすものの 0.1~0.2m と浅い。一旦、北側の g ラインで溝はとぎれるが、その 3.0m 北方で、同方向の溝が確認でき、E 1 グリッドの北半まで延長することができる。これらは、トレンチ部で幅 0.3m と幅せまく、E 1 グリッドでは 0.8m と幅広くなる。

溝 S D 39 これも溝 S D 28 から東へ 3.0m 隔てたところで平行する。北側は、上面の溝 S D 03 に重なり合い延長できるかどうかは分からない。断面「コ」の字形で、幅 0.6m、長さ 3.5m のみを検出したにとどまる。出土遺物は土師器の甕、坏身と須恵器の坏身が出土し、8 世紀中頃と考えられる。

溝 S D 36 これは溝 S D 39 から、1.5 m 東へ隔てて検出した溝である。幅 1.0m で、断面皿状を呈する浅いものである。

これらの南北溝の他には、それより 11m 東の E 2 グリッド東半に幅 0.2~0.3m の小溝が南北に 2 本、平行している。

そして、E 4 グリッドには、東西方向の不安定な溝 S D 407 も検出している。

第3遺構面 a・b 掘立柱建物関係

E・F 区では a、b の 2 面において、数多くの掘立柱を検出している。E 区北半では、近世以降の大畦畔の下に良好に掘立柱が遺存し、上面の溝が深く入り込むところは遺存状況が悪いという傾向があるものの、お

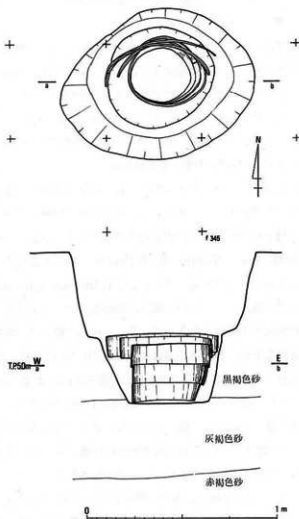


fig.174 E トレンチ第3遺構面 d
曲物井戸 S E 03 平面、立面図



Fig. 175 E区第3遺構面c·d 平面图

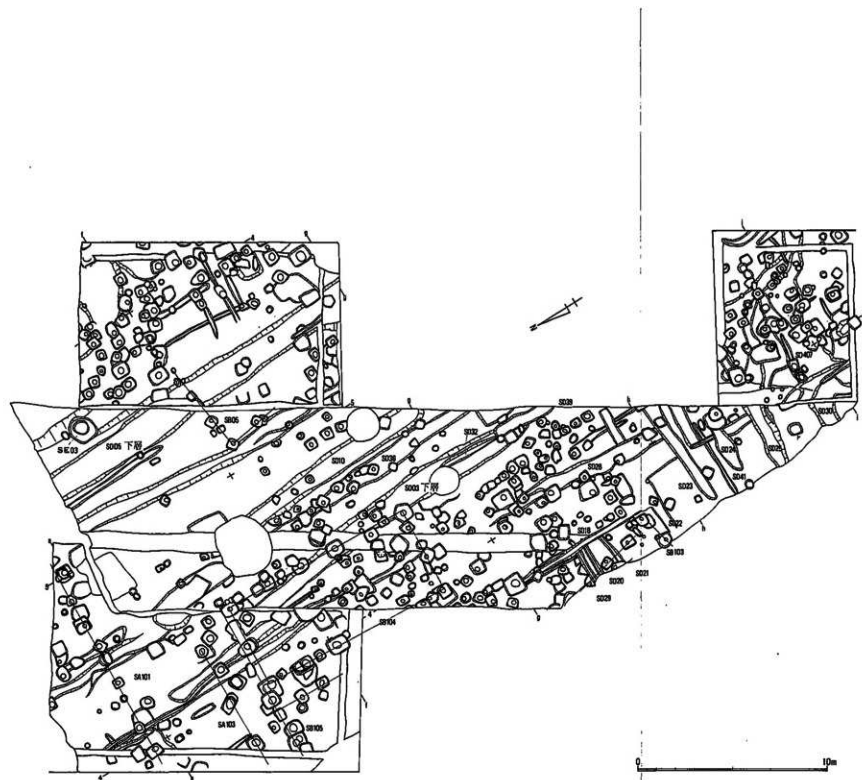


Fig. 176 E区第3透视图b 平面图

おむね、efg34区、e5区、hi4区それぞれを中心とする3ブロックに掘立柱は集中する。

E区北半の掘立柱の掘り方は、細部において比較的バラエティーに富んでいる。まず、平面形状は、楕円形、円形、隅丸正方形・長方形がある。それらのうち、概して隅丸の正方形・長方形に関しては隅柱が前者に通り柱が後者に多い。また、大きさからは円形類は径0.5m前後ないし、それ以下のものが多く、方形類は一辺0.5m前後から0.9mのものまでの大形のものが多く。他に、下面のb面には大形のものが多くという傾向が認められる。全体的には0.5m前後に集中している。

断面形状は「U」・「コ」の字形、2段、皿状、摺鉢状に分かれる。埋土に関しては、褐色を基調として、明、暗、にぶいものとオリーブ、灰、黄、緑色味がかかるものなどの色調が含まれる。土質は多くが粘・砂質シルトを主体として、中砂・荒砂を含むものが多い。それぞれの特徴として、断面摺鉢状のものは、E区北端の第5遺構面の主河道上に掘り込まれているものが多い。また、2段の掘り込みのものは、隅丸正方形の規模の大きなものに多いことが挙げられる。

これら掘立柱には、心柱が遺存するE1グリッド欄SA101-1があり、径20cmをこえる大形のものである。また、掘り方底部には、同グリッド建物SB104北東隅の一辺1.1mの大形のピットからは礎板が出土している。その礎板には、柄穴、方形の割り込みと小口には突起が付いており、建築材と考えられるものの転用である。そして、そ

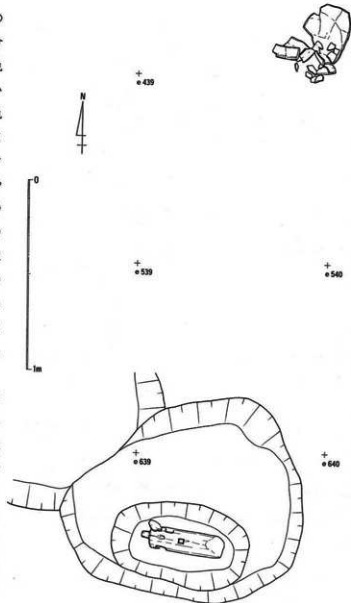


fig.177 E1グリッド第3遺構面c 礎板転用材及び土器、第4遺構面a 溝S D157土器出土状況図

Tab. 6-1 掘立柱一覧表 (Eトレンチ)

トレンチ	掘立柱	柱位置	断面形状	断面寸法	深さ (mm)	地盤	掘り出し方	掘削方法及び特記事項
ET 15	掘立	p11 22	角 形	50 × 50	60	硬土 10TR% 硬砂層	掘削	
ET 15	掘立	p11 24	角 形	50 × 50	45 × 44	硬砂層硬土 10TR%	掘削	
ET 14	掘立	p11 25	円 形	50 φ	24 × 42	クレーン掘立土 2.5TR% 硬砂層+中硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 26	角丸正方形	二 段	55 × 55	クレーン掘立土 2.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 27	角 形	50 × 50	56 × 55	硬土 7.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 28	角丸正方形	標準状	45 × 45	硬砂層土 (硬砂層)	掘削	
ET 14	掘立	p11 29	角丸正方形	50 φ	60 × 65	硬土・硬砂層硬砂層 10TR%	掘削	
ET 14	掘立	p11 30	円 形	50 φ	57 × 55	硬土・硬砂層土 10TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 31	円 形	50 φ	27 × 45	硬砂層土 2.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 32	角丸正方形	50 φ	57 × 54	硬砂層土 2.5TR% (硬砂層) 硬砂層 (硬砂層)	掘削	
ET 14	掘立	p11 37	円 形	50 φ	45 × 37	硬砂層土 2.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 38	角丸正方形	50 φ	48 × 55	硬砂層土 10TR% (硬砂層) 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 39	角丸正方形	50 φ	59 × 54	硬土 7.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 40	角丸正方形	50 φ	59 × 56	硬土 7.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 43	角丸正方形	50 φ	54 × 15	硬土 10TR% (硬砂層) 硬砂層 (硬砂層)	掘削	
ET 14	掘立	p11 44	不整形	50 φ	48	硬土 7.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 45	円 形	50 φ	22 × 41	硬土・硬砂層土 10TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 47	角丸正方形	50 φ	47 × 52	硬砂層土 10TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 48	不整形	50 φ	36 × 78	硬土 10TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 50	角丸正方形	標準状	49 × 54	硬砂層土 10TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 51	不整形	50 φ	48 × 52	硬砂層土 10TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 12	掘立	p11 54	不整形	50 φ	58 × 45	硬砂層土 2.5TR%	掘削	
ET 12	掘立	p11 55	角丸正方形	50 φ	50	硬土 10TR% 硬砂層	掘削	
ET 12	掘立	p11 57	円 形	50 φ	35 × 48	硬砂層硬砂層土 10TR% (硬砂層)	掘削	
ET 14	掘立	p11 58	円 形	標準状	47 × 47	硬砂層土 2.5TR%	掘削	
ET 14	掘立	p11 59	不整形	50 φ	54 × 58	硬土 10TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 60	角丸正方形	50 φ	44	硬土 5TR% 硬砂層 硬砂層 10TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 62	角 形	50 φ	64 × 37	クレーン掘立土 7.5TR%	掘削	
ET 14	掘立	p11 64	円 形	50 φ	36 × 33	硬土 10TR% (硬砂層) 硬土 10TR%	掘削	
ET 12	掘立	p11 65	円 形	50 φ	47 × 54	硬砂層土 7.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 12	掘立	p11 66	角 形	標準状	67 × 69	硬土 7.5TR% (硬砂層)	掘削	
ET 12	掘立	p11 67	角 形	50 φ	42 × 41	硬土 10TR% 硬砂層	掘削	
ET 12	掘立	p11 68	角丸正方形	50 φ	47 × 58	硬砂層土 2.5TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 12	掘立	p11 69	不整形	50 φ	47 × 55	硬砂層土 5TR% 硬砂層 2.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 12	掘立	p11 70	正 方 形	50 φ	47 × 75	硬砂層土 10TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 12	掘立	p11 71	不整形	二 段	58	硬砂層土 10TR%	掘削	
ET 12	掘立	p11 72	角丸正方形	標準状	54 × 54	硬砂層土 2.5TR% 2.5TR% (硬砂層)	掘削	
ET 12	掘立	p11 73	角丸正方形	50 φ	78		掘削	
ET 12	掘立	p11 74	円 形	50 φ	34 × 45	硬土 10TR% (硬砂層) 硬砂層 硬土 10TR% (硬砂層)	掘削	心留掘
ET 12	掘立	p11 75	円 形	50 φ	58	硬砂層土 10TR% (硬砂層)	掘削	
ET 12	掘立	p11 76	角丸正方形	50 φ	53 × 52	硬土 10TR% (中硬砂層) 硬砂層 硬砂層 (硬砂層) 2.5TR%	掘削	
ET 12	掘立	p11 77	角 形	標準状	52 × 54	硬砂層硬砂層土 7.5TR%	掘削	
ET 12	掘立	p11 78	正 方 形	50 φ	44	硬土・硬砂層土 10TR% 硬砂層	掘削	
ET 12	掘立	p11 82	角丸正方形	50 φ	52 × 47	硬土 10TR% (中硬砂層) 硬砂層 硬砂層 (硬砂層)	掘削	
ET 14	掘立	p11 87	角丸正方形	二 段	74 × 40	クレーン掘立土 5.0TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 89	角丸正方形	二 段	52 × 55	クレーン掘立土 2.5TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 91	不整形	50 φ	58 × 58	硬土・硬砂層土 (10TR%) 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 92	角丸正方形	50 φ	47 × 58	硬土・硬砂層 (10TR%) 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 94	角丸正方形	二 段	56 × 54	硬砂層土 2.5TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 95	角丸正方形	50 φ	52 × 52	硬砂層土 2.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 96	角丸正方形	50 φ	42 × 48	硬砂層土 5TR% (中硬砂層) 硬砂層土 7.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 97	角 形	標準状	48 × 50	硬砂層土 10TR%	掘削	
ET 14	掘立	p11 98	円 形	50 φ	45		掘削	
ET 14	掘立	p11 99	円 形	50 φ	54		掘削	
ET 14	掘立	p11 100	円 形	50 φ	48 × 48	硬砂層土 5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 101	角 形	50 φ	35 × 50		掘削	
ET 14	掘立	p11 103	円 形	50 φ	36 × 38	硬砂層土 7.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 104	円 形	50 φ	48 × 55	硬砂層土 2.5TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 106	不整形	50 φ	44 × 60	硬土 2.5TR% 硬砂層 硬砂層 2.5TR%	掘削	
ET 14	掘立	p11 108	角 形	50 φ	48	硬砂層土 2.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 112	円 形	50 φ	34 × 40	硬土・硬砂層土 10TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 122	角丸正方形	標準状	70 × 77	硬土 2.5TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 123	角丸正方形	50 φ	65 × 68	硬砂層土 2.5TR% 硬砂層	掘削	
ET 14	掘立	p11 125	不整形	50 φ	48 × 44	硬土 10TR% 硬砂層 硬砂層	掘削	心留掘
ET 14	掘立	p11 126	不整形	50 φ	64	硬土 10TR%	掘削	

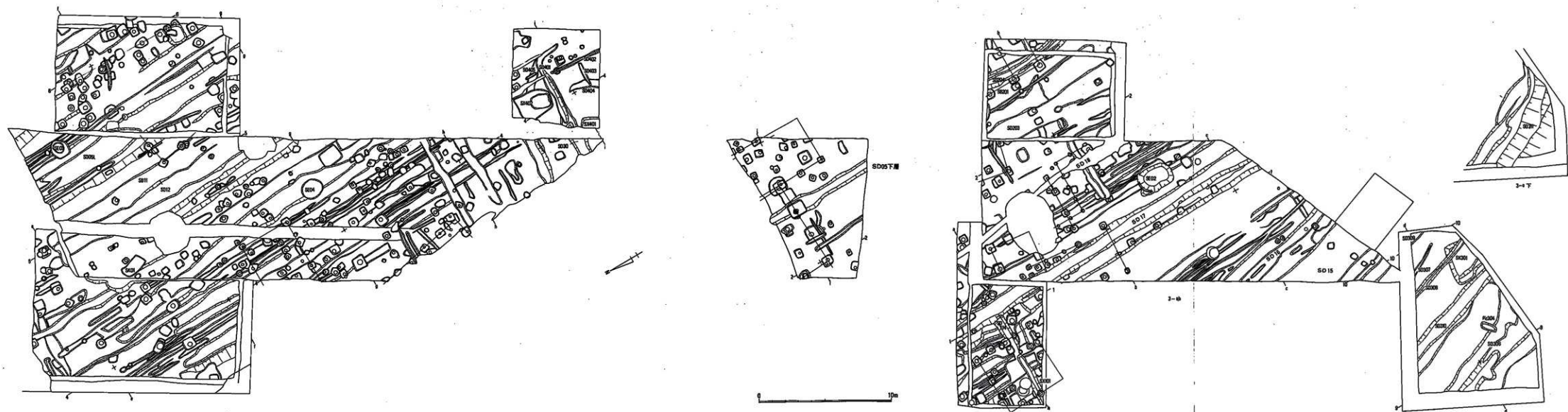


fig.178 B区第3遺構面a、F区第3遺構面a・b、F3グリッド第3遺構面a下 平面図

Tab. 6-3 掘立柱一覽表 (Eトレンチ)

トレンチ	遺構番号	掘立柱番号	平面形状	断面形状	径・高(m)	地 土	深さ(土尺)	遺 構 及 ビ 特 記 事 項
ET 24	掘3	p1227	個人正方形	直 柱	46 × 51	硬質土 2.57% 砂<砂>	1	無 有
ET	掘3	p1228	個人正方形	コノ字	36 × 43			無 有
ET	掘3	p1230	円 形	直 柱	26 × 30			無 有
ET	掘3	p1231	円 形	コノ字	32 × 27	硬質土 1.57% 砂<砂>		無 有
ET	掘3	p1232	個人正方形	二 重	48 × 42	硬質土 1.07% 灰土<土> 砂<砂>		無 有
ET	掘3	p1234	円 形	コノ字	33 × 34			無 有
ET 24	掘3	p1239	個人正方形	コノ字	55 × 59	硬質土 1.57% 砂<砂> 硬質土 1.07% 砂<土> 中粒砂<砂>		無 有
ET	掘3	p1240	個人正方形	コノ字	46 × 50	硬質土 1.07% 砂<砂> 硬質土 1.07%		無 有
ET	掘3	p1241	個人正方形	コノ字	55 × 74	灰土<土> 硬質土 1.07% 砂<土>		無 有
ET	掘3	p1243	個人正方形	コノ字	33 × 32	砂<砂> 硬質土 2.57%		無 有
ET	掘3	p1245	個人正方形	二 重	48 × 45	砂<砂> 硬質土 2.57% 砂<土>		無 有
ET	掘3	p1246	個人正方形	コノ字	41 × 46	硬質土 2.57% 砂<砂>		無 有
ET	掘3	p1252	円 形	コノ字	27 × 44	硬質土 1.07%		無 有
ET	掘3	p1254	不整形	直 柱	46 × 54	灰土<土> 硬質土 1.07%		無 有
ET	掘3	p1256	個人正方形	コノ字	45 × 50	灰土<土> 硬質土 1.07% 灰土<土> 砂<砂>		無 有
ET	掘3	p1257	個人正方形	コノ字	48 × 45	砂<砂> 硬質土 2.57%		無 有
ET	掘3	p1258	個人正方形	コノ字	39 × 50	硬質土 2.57% 砂<土> 硬質土 1.07%		無 有 心柱部
ET	掘3	p1259	不整形	コノ字	48 × 55	硬質土 1.07% 砂<土> 灰土<土>		無 有 心柱部
ET	掘3	p1261			46 × 59	灰土<土> 硬質土 1.07% 砂<土> 硬質土 1.07% 砂<土>		無 有 心柱部
ET	掘3	p1282	円 形	コノ字	27			無 有
ET 14	掘3	p1269	円 形	コノ字				無 有
ET	掘3	p1265	不整形	直 柱	27 × 45	硬質土 1.07% 砂<土>		無 有
ET	掘3	p1267	円 形	直 柱	26 × 43	硬質土 1.07% 砂<砂> 硬質土 2.57%		無 有 心柱部
ET 28	掘3	p1268	円 形	コノ字	32 × 28	硬質土 2.57% 硬質土<土> 砂<砂>		無 有
ET 28	掘3	p1270	円 形	コノ字	24 × 24	硬質土 2.57% 硬質土<土> 砂<砂>		無 有
ET 28	掘3	p1271	個人正方形	コノ字	50 × 52	硬質土<土> 1.07% 硬質土<土>		無 有
ET	掘3	p1279	個人正方形	コノ字	36 × 44	硬質土 1.07% 中粒砂<砂> 硬質土 1.07% 砂<砂>		無 有
ET	掘3	p1281	個人正方形	コノ字	48 × 46	硬質土 1.07% 硬質土 1.07% 砂<土>		無 有
ET 24	掘3	p1282	不整形	コノ字	49	硬質土(2.57%) 灰土<土> 砂<土>		無 有
ET	掘3	p1283	個人正方形	コノ字	45 × 50	灰土<土> 硬質土<土> 1.07%		無 有
ET	掘3	p1284	個人正方形	コノ字	45			無 有
ET 24	掘3	p1285	円 形	コノ字	23 × 25			無 有
ET	掘3	p1286	長楕円形	コノ字	50	硬質土 2.57% 硬質土<土>		無 有
ET	掘3	p1287	円 形	二 重	42 × 39	硬質土 1.07%		無 有
ET	掘3	p1288	個人正方形	コノ字				無 有
ET 25	掘3	p1290	正 方 形	コノ字	54 × 50	硬質土 1.07% 灰土<土> 少量砂<砂>		無 有
ET 25	掘3	p1291	不整形	コノ字	60	灰土 1.07% (硬質土<土> 砂<砂>)		無 有
ET	掘3	p1292	個人正方形	コノ字	49	硬質土 1.07% 砂<土>		無 有
ET	掘3	p1293	個人正方形	コノ字	52 × 58	灰土<土> 硬質土(1.07%) 中粒砂<砂> 硬質土 1.07% 硬質土 1.07% 砂<土> 硬質土 1.07%		無 有
ET	掘3	p1298	円 形	直 柱	24 × 28	硬質土 1.07%		無 有
ET 15	掘3	p1300	円 形	直 柱	40 × 43	硬質土 2.57% 砂<砂>		無 有
ET	掘3	p1301	個人正方形			硬質土 1.07% 砂<土> 硬質土<土>		無 有
ET	掘3	p1302	個人正方形	コノ字	50	硬質土 1.07%		無 有

れは二段に掘り込まれた掘り方の下段に埋め込むようにして掘えられていた。また、他にEトレンチ f 4区には、柱を抜き取った後に掘えられたと考えられる大形の鉢形土器の下部が、一辺0.6mの掘り方東より出土している。

こうした多数の掘立柱は、一部グリッドの拡幅があるものの調査区が幅10mと限定され、現代ため池なども存在するため、建物として復原できるものはわずかにすぎない。とりあえず、掘、建物について復原可能なもののみ記述することとする。

櫛 S A 101 E 1グリッド北端に位置する東西方向のもので、やや東へ軸がふれる。柱間は、1.8m前後であり、掘り方に規則性がなく深さもまちまちである。この柱列の東側には、柱穴に切り合いが見られ、2間×3間以上の建物が柱間1.5mで復原できるかもしれないが、調査区北側に出る。この両者の並びに前述の大形の心柱が含まれるが、いずれに属するか判然としないものの、

切り合い関係から、後者と考えられる。後者はほぼ南北軸であり、後出する。

欄 S A 102 E 1 グリッド中央に東西方向に一辺0.6~0.8mの大形の掘立柱が3個、並んでいる。南北にはそれと関連する柱が認められないことから、欄とした。柱間は3.0mと2.4mであり、不ぞろいであるが、軸はやや東へふる。これと軸を同じくする建物 S B 104 と関連したものかもしれない。

建物 S B 04・104 E 区において唯一、完全に復元できる建物である。掘り方は一辺0.6~1.0mの大形のもので、特に隅柱が大きく、深くなっており、深いもので0.5m程ある。埋土は全体に砂まじりである。2間×5間の南北に長い建物に復元でき、柱間は2.1m前後でそろい、南北10.5m、東西4.5mで47.25m²の規模の建物である。この建物 S B 04 と切り合って、その南半に、2間×2間もしくは東西に長くなる建物が復元できる建物 S B 06 がある。掘り方は一辺0.4~0.6mの中形の隅丸正方形のもので、柱間は1.9mである。建物軸はほぼ南北である。

建物 S B 03 E 区中央の現代ため池にその大半が損われているものである。掘り方は隅柱のみ正方形で、他は長方形を呈する。断面は「コ」の字形でオリブ味の強い粘質シルトを埋土とする。柱間は1.4mとなり、1間×4間以上の南北に長い建物になると考えられる。建物軸はかなり西へふっており、これと共通しそうな軸方向は西へふる E 区南端の建物 S B 02 があるが、これほど顕著ではない。各掘り方内より土器が出土しており、8世紀前葉の古いところとなる。

さて、E 区南端と F 区の掘立柱は、E 区北半ほど密集しない。これは、E 区の下面の b 面で多く認められた大形、中形の掘立柱があまり認められないためと考えられ、それほど建物に重複性がないことに起因する。また、F 区南半、b ライン以南では、下面の周溝墓の隆起の関係から検出率は極めて低い。

掘立柱は、一辺0.8mの大形の隅丸正方形のもの、一辺0.5mの中形の隅丸長方形・正方形のものと小形の円形のものに大別できる。

建物 S B 01 E 区南端で検出した2間×3間もしくは、それより北へのびる南北に長い建物に復元できるものである。柱間は1.9m前後であり、建物軸はほぼ建物 S B 06 と共通する。掘り方もまた、一辺0.4mの隅丸正方形の中形と一致を見せる。掘り方内出土土器より、8世紀後半以降と考えられる。

建物 S B 02 建物 S B 01 と切り合って西側で検出した1間×3間以上に復元できる建物である。各柱間は2.2m前後であり、建物 S B 04・104 と類似するが、建

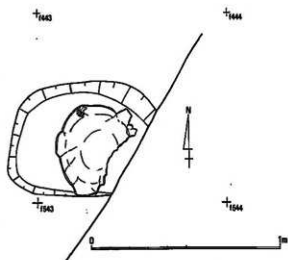


fig-180 E トレンチ第3遺構面
Pit 60土器出土状況図

物軸は西へふっている。一辺0.8mの隅丸正方形の大形の掘り方である。うち、一個は1.0×1.2mと隅丸長方形のものを含んでおり、径15cm以上の心柱が遺存していた。

建物SB101 F1グリッドにおいて検出している3間×3間(4.6×4.6m)の21.16mに復元できる建物である。建物軸は西にふり、柱間は均等ではなく、東辺の両側は1.2mと短く、中央は2.0mと広い。また、北辺は西側の2間が1.2mであり、東側が2.0mとひらいている。西・南の2辺は調査区外に出るが、南西隅が2.0mとひらくものと考えられる。この柱間と同様なものにFトレンチ北側中央に位置する4個の柱列がある。この柱列は両側が1.2mと短く、中央が1.8mとなるものである。これより、北側へ建物を復元することが可能かもしれない。

建物SB201 F2グリッド北東部で検出している建物である。2間×1間以上で、調査区外の北と東へつづく。一辺0.6m程の隅丸正方形の柱穴掘り方を主とし、一個のみ長方形を呈する。この建物より、2ラインや西側まで、長方形が目立つ。建物は、柱間2.2mの束柱を備えるものに復元でき、その軸はほぼ南北である。

F区の掘立柱掘り方は、下層の暗褐色の粘土層を切り込んで、埋土が茶褐色の砂質ものが多いが、掘り方と柱がほぼ同規模の柱穴が目立つことも特徴的である。後者の径20cm前後の小形の柱穴は1.0~1.4mの柱間がほとんどである。

第3遺構面aでは、掘立柱の他に、溝、井戸、土塊、河道を検出している。

溝 当面は第2遺構面dと重複することから、多くが中世以降のものとなる。それ以外で、当該期にかかると考えられるものは東西方向

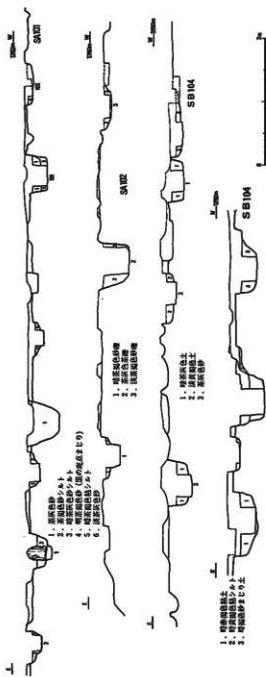


fig. 181 E1グリッド第3遺構面a・b 掘立柱土層断面図

のものが多い。E区ではg 3区に幅0.2~0.3mの小溝SD20、21、29が3本、並び、これらはオリブ色がかった粘質シルトを埋土とするのが特徴である。その他には幅0.6~1.0mの断面皿状のものがE 1グリッドで1本、E区中央南よりで溝SD22、23、24、25、30の5本が平行する。うち、最も南側のものはE 4グリッドで溝SD401とつながり、東端で「L」の字形に南へ曲がる。この溝は8世紀中葉と考えられる。F区では、東西方向の溝が散在している。

南北方向のものでは、E区南端とF 2グリッドにおいて検出する溝SD05下層、204がある。両者は幅0.8~1.0mで、深さ0.4m程の断面「V」の字形で堆積土に砂を主体とする同様なもので、同一と考えられる。これらは掘立柱よりも上位の検出である。F 3グリッドのa面はほとんど第2遺構面dと状況が変わらないが、その西端部のみ、溝SD311を検出している。

井戸SE02 F区中央北東よりで検出する2.7×2.05mの長円形の素掘りのものである。深さは確認しておらず、上位には茶灰色の砂質シルト、下位には灰色の粘質シルトを主体とする堆積土であり、溝SD05下層と同様な時期と考えられる。

溝SD311 溝と呼称したが、幅広い河道になると推定されるものである。その位置はF 3グリッドの西端にある。検出した幅は約6.0mであるが、河道底の状況を南西隅においても示さないことから、まだ、かなり拡がるものと考えられ、最小12m、H区との関連で最大25m程の幅が見積もれる。深さも1.1m以上を計る。F 3グリッド内では最上層が明褐色系、上層が淡褐色系、下層が灰色系のそれぞれ粘質シルトであり、最下層が有機物・カルシウムを多く含むオリブ灰色系の粘質シルトである。その下方、溝法面直上に曲物、須恵器甕、土師器皿、坏身、黒色土器坏、骨などが出土している。それらより、時期は9世紀後葉と考えられるが、他の遺物より、溝は8世紀まで溯るものであり、主に8世紀から9世紀後葉にかけて、主体的に活用されたと推定される。溝の最終埋没は、上面のa上面の溝SD306より、中世にあてることができる。この溝はE~H区の掘立柱建物群において、重要な役割をもったと考えられる。

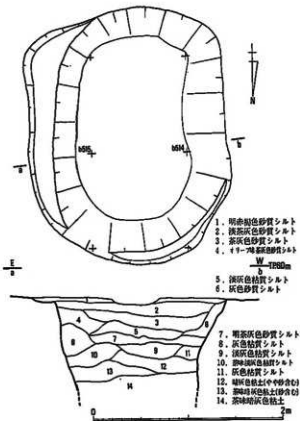


fig.182 Fトレンチ第3遺構面a
井戸SE02平面、土層断面図

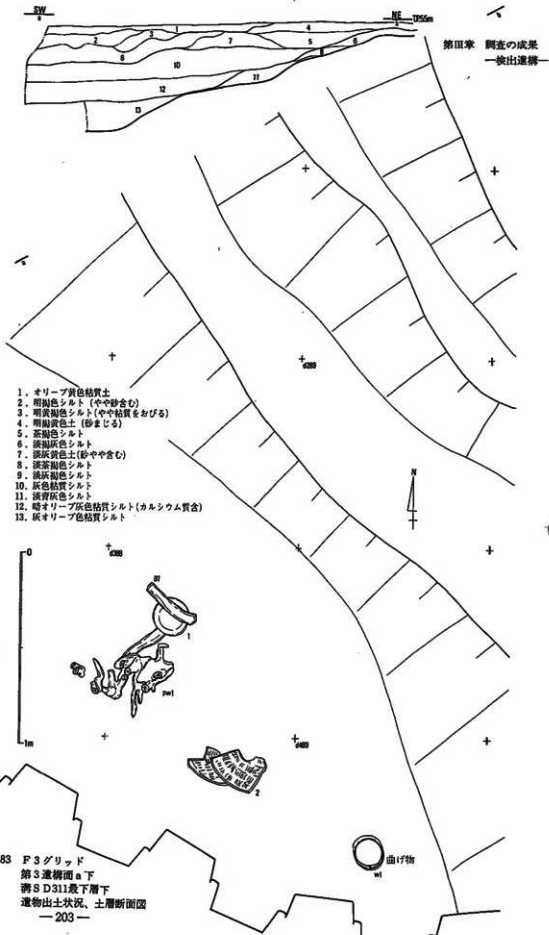


Fig. 183 F3グリッド
 第3遺構面a下
 溝S D311最下層下
 遺物出土状況、土層断面図
 — 203 —

B. H・I区

H・I区の第3遺構面は、旧地形が北から南へ向って下降しており、その高所に位置するH区の北半を中心に掘立柱318個が濃密に分布している。それに対してH区南側からI区にかけては、粘質シルトを主体とした堆積土であり、足跡状の小穴が数多く分布している。

H区北端には、第4遺構面aから連続すると考えられる砂層を主体とした溝状の落ち込みが調査区西側に沿って蛇行する。出土遺物は細片であるが、7世紀前後と推定される。これのみがH・I区通じて、第3遺構面で最下位の面である。その他は、同様な性格の遺構群が上記のとおりに分離し、a・bの両面で検出しているため、遺構群に分けて以下に記述する。

掘立柱関係 掘立柱はH区の南端のfライン以北で集中しており、下面のb面では、第4遺構面aの上にある包含層、暗褐色粘土を切り込んでおり、先の落ち込み上のみ、砂層を切り込んだものとなっている。上面のa面では整地土と考えられる褐色系の砂質土を切り込んだものとなる。しかしながら、E区と同様に近世以降の掘り込みが当遺構面に大きく影響しており、特に南北の大陸畔の両側、すなわち、6ラインと5ラインの東西4m程はかなりのダメージを受けている。したがって、最も良好に掘立柱が遺存するのは大陸畔の下の部分だけとなるが、これも、中世を一部含む東西方向に平行する小溝群によって著しく乱されている。こういった状況下にもかかわらず、H区中央では、ちょうどトレンチ幅におさまる建物S B01をほぼ復原することができた。

建物S B01の掘り方は、H区において、大形に属する。ここでも、E区で認められたように、隅柱に大きな隅丸正方形の平面プランで、通り柱に隅丸長方形のものを掘り込んでいる。他の掘立柱については、E区ほどの多様性はなく、多くが断面「U」の字形ないし「コ」の字形であるが、それでも同様なものは、全て含まれている。それらの中で、もっとも特徴的なものは、隅丸長方形と楕円形の長い掘り方のもので、二段である場合が非常に多い。埋土は、灰、オリブ、黄、黒味がかかる褐色土が主体である。また、礎板が遺存するものが数多く点在し、心柱が残るものもある。これらの掘立柱において、6棟ほどが復原可能である。

建物S B01 2間×4間の南北方向の建物である。建物は軸が西側にふってあり、4.8×8.8mの規模で42.24㎡となる。柱間は梁行と桁行の南端が2.4mであるが、北3間分の桁行の部分が2.1m程と短くなっている。建物の柱の多くに抜き取り穴が伴っている。

建物S B401 建物S B01と同一軸で、4.0m南方に建物S B401を検出している。その南側半分以上が調査区外となっているが、2間×2間以上の建物に復原できると考える。柱間は2.4~2.5m程となる。北側々辺中央のPit 129では、一辺0.9mの隅丸方形の掘り方中心部側からその北東側にかけて0.74×0.55mの楕円形の平面プランを呈する灰色砂を埋土とする掘り込みを検出している。この掘り込みは、中心部側が垂直でありその反対側がゆるやかであることから、柱の抜きとり穴と考えることができる。その上部には、土師器皿3点と須恵器坏身2点が正位で並べられるようにして、裾置かれていた。この土器より、8世紀中頃でも古いところと考えられるので、建物S B401はこれより古く、8世紀前半代に存在していたことが分かる。この建物軸より、やや東

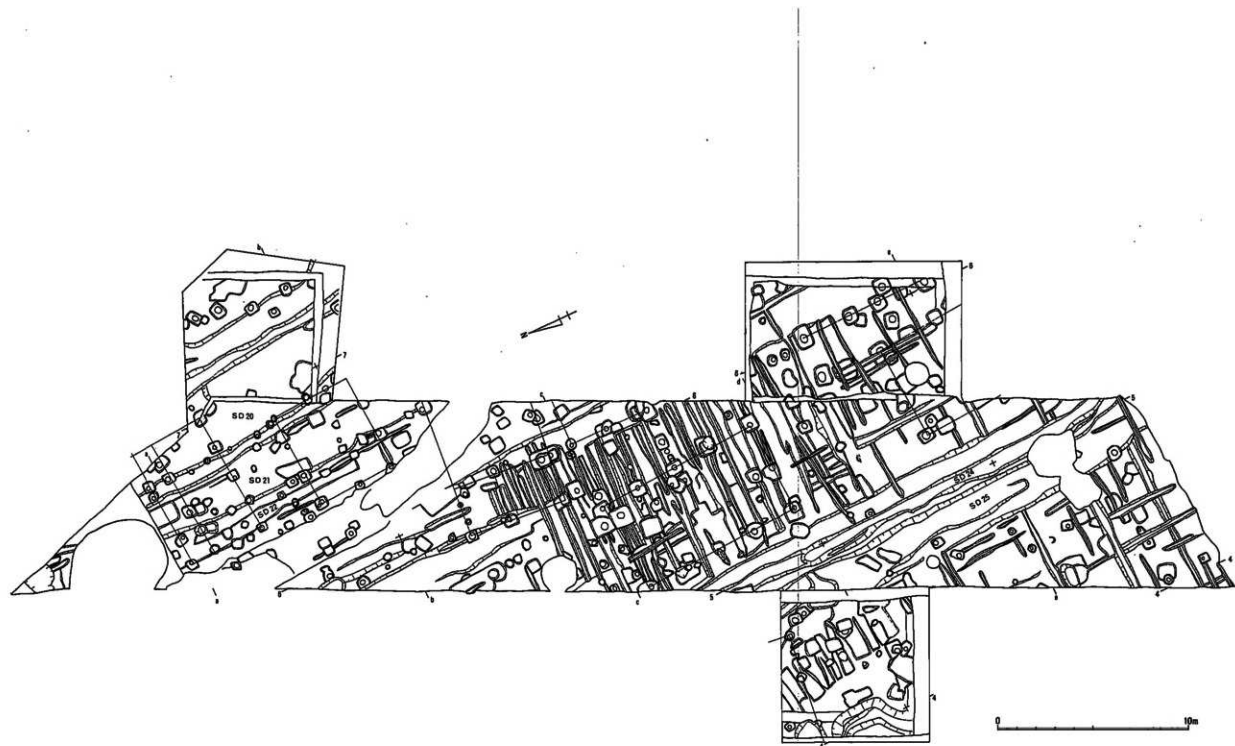


Fig. 185 H区第3遺構面a及び第2遺構面d 平面図

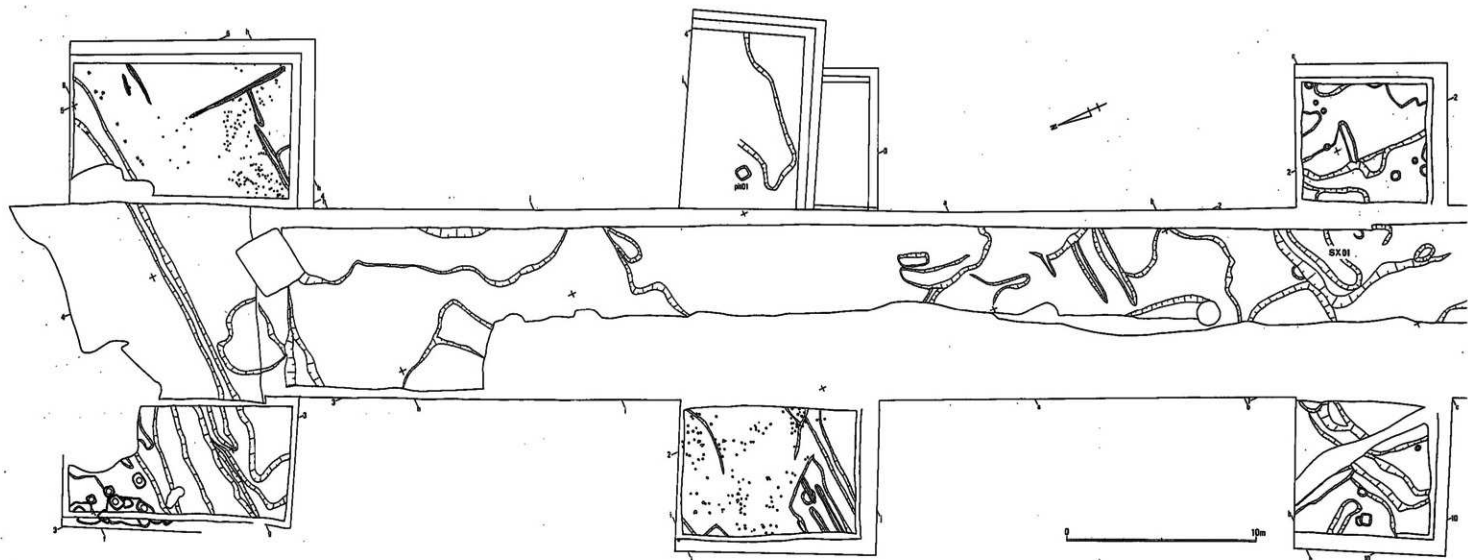


fig.186 H区南半、I区第3遺構面 a・b 平面図

Tab. 7-3 掘立柱一覽表 (Hトレンチ)

トレンチ	遺構番号	柱穴番号	平面形状	築造形状	柱・礎(m)	地 土	柱と9穴	遺物及び特記事項
HT 45	第3	p11297	円 形	コの字	27 X 27			
HT 45	第3	p11216	円 形	二 段	49 X 38	黄褐色土 2.5Y $\frac{5}{6}$ 褐色土 5Y $\frac{5}{6}$ 砂土		
HT 44	第3	p11217	円 形	コの字	41 X 41	灰白・黄褐色土 10YR $\frac{5}{6}$		
HT 44	第3	p11219	隅丸正方形	コの字	66 X 66	黄褐色土 1.5YR $\frac{5}{6}$ 中砂土 砂土		
HT 44	第3	p11220	隅丸正方形	コの字	66 X 72	黄褐色土 1.5YR $\frac{5}{6}$ 中砂土 砂土 黄褐色土 10YR $\frac{5}{6}$ 灰白土 10YR $\frac{5}{6}$ 中砂土 黄褐色土 1.5YR $\frac{5}{6}$ 灰白土 10YR $\frac{5}{6}$ 中砂土		
HT 44	第3	p11234	隅丸正方形	コの字	55 X 47	土 黄褐色土 2.5Y $\frac{5}{6}$ 中砂土 砂土 1.5YR $\frac{5}{6}$ 灰白土 10YR $\frac{5}{6}$ 中砂土		
HT 35	第3	p11237	不規則八角形	U字 二段	71 X 68	黄褐色土 5Y $\frac{5}{6}$ 褐色土 5Y $\frac{5}{6}$		
HT 44	第3-1	p11238	隅丸正方形	コの字	73 X 57	黄褐色土 2.5Y $\frac{5}{6}$ 灰白土 10YR $\frac{5}{6}$		
HT 35	第3	p11242	不規則八角形	コの字	54 X 63	灰白・黄褐色土 5Y $\frac{5}{6}$ 中砂土		
HT 35	第3	p11243	隅丸正方形	二 段		土 黄褐色土 10YR $\frac{5}{6}$ 褐色土 5Y $\frac{5}{6}$ 中砂土 土 黄褐色土 10YR $\frac{5}{6}$ 砂土 中砂土		
HT 34	第3	p11244	隅丸正方形	コの字		黄褐色土 1.5YR $\frac{5}{6}$ 褐色土 5Y $\frac{5}{6}$ 砂土		
HT 35	第3	p11245	円 形	コの字	22 X 24	黄褐色土 10YR $\frac{5}{6}$ 中砂土		
HT 35	第3	p11247	隅丸正方形	二 段		黄褐色土 10YR $\frac{5}{6}$ 砂土 褐色土 5Y $\frac{5}{6}$		
HT 45	第3	p11249	円 形	二 段		黄褐色土 1.5YR $\frac{5}{6}$		
HT 44	第3	p11250			44 X 45	灰白・黄褐色土 10YR $\frac{5}{6}$		
HT 44	第3	p11251	円 形	コの字	49 X 38	灰白・黄褐色土 10YR $\frac{5}{6}$		
HT 44	第3	p11252	円 形	二 段		黄褐色土 1.5YR $\frac{5}{6}$ 褐色土 5Y $\frac{5}{6}$ 砂土		
HT 46	第3-1	p11 3						
HT 46	第3	p11 19						
HT 46	第3	p11 20						
HT 46	第3	p11 21						
HT 46	第3	p11 26						
HT 46	第3	p11 27						
HT 46	第3	p11 28						
HT 46	第3	p11 29						
HT 46	第3	p11 31						
HT 46	第3	p11 32						
HT 46	第3-1	p11 33						
HT 46	第3	p11 48						
HT 35	第3	p11 54						
HT 35	第3	p11 55						
HT 35	第3	p11 57						
HT 35	第3	p11 64						
HT 35	第3	p11 67						
HT 34	第3	p11 72						
HT 34	第3	p11 74						
HT 34	第3	p11 75						
HT	第3	p11 86						
HT	第3	p11 90						
HT	第3	p11 92						
HT	第3	p11 95						
HT 44	第3	p11 99						
HT 45	第3	p11101						
HT 45	第3	p11102						
HT	第3	p11107						
HT 45	第3-1	p11114						
HT 45	第3	p11120						
HT 45	第3	p11132						
HT	第3	p11138						
HT 44	第3-1	p11149						
HT 45	第3-1	p11151						
HT 44	第3-1	p11154						
HT 44	第3-1	p11157						
HT	第3	p11183						
HT	第3	p11184						
HT	第3	p11189						
HT	第3	p11206						
HT	第3	p11243						
HT	第3	p11254						
HT	第3	p11254						
HT 44	第3-1	p11300						
HT	第3	p11 32	隅 形	築 造 状		黄褐色土 2.5Y $\frac{5}{6}$ 砂土		

にふって約2.0m東に離れ南北方向の柵列がある。この柵列は6間分を検出しており、各柱間は1.4mとなる。

建物S B02 建物S B401の西側、10mのところ建物S B01とともに軸を同じくして存在する。復原する建物の大半は西側の調査区外に出るが、2間×1間以上のものとなる。この建物の掘り方は、長方形、楕円形を呈するものではあるが、他と異なるところがある。それは、通り柱方向にその長軸を持ってこないでそれに直交していることにある。これは、それらが2段の掘り方であって、その上部が断面皿状を呈し、心柱が検出できなかったことから、柱上部のみを抜き去ったことを示すかもしれない。各々の柱間は2.2mである。

H区北半は、これまで述べてきた大形の掘り方の柱穴ではなく、中形のものが多く分布しており、4棟の建物の復原が可能かと考えられる。

建物S B03 この建物の柱間はそれぞれ異なりを見せるが、軸方向で一致を見せるので復原した。2間×3間以上の東西方向の建物と考えられ、西側の柱間は2.5mと広く、東側2間は2.2mを計る。梁行と考えられる南側の方は、柱間が3.0mあり、北側は2.2mである。西側中央に東柱を備え建物軸は東へふる。

建物S B04 建物S B03の北側、1.5mのところにある。建物軸はやや西にふり、H区中央の大型建物と軸が共通する。東西に長い2間×3間の建物で、4.4×5.2mの22.88m²の規模となる。柱間は梁行が2.2m、桁行が1.7m前後となる。この建物のすぐ北側には東西方向に柱間2.0mで3間分の柱列がある。

建物S B05 建物S B04と同軸で、北側に3.4mの距離をあげ、平行して建物S B05が復原できる。3間×4間の東西棟としてまとまると考えられ、26.4m²になる。柱間は西側が短く、やや不ぞろいであるものの、梁行は1.3m前後、桁行は1.7m前後となる。また、この建物には、北側一間の桁行方向に東柱があり、中央の柱間が広い。

これらの他には、c 6区とH 3グリッド北端で復原可能かと考える建物がある。そして、F区で見られたと同様な小形の径0.2~0.4mの円形の掘り方をもつ柱穴が、b 5区において柱間1.2~1.4mでまとまりをもつかとも思える。

出土遺物としては、先にとりあげたpit 129の他に、pit 175の上部において、埋土中の炭化物様の黒褐色砂質シルト内より、9世紀末の土師器鉢とともに重圓文軒丸瓦が出土している。両者が同時期とは言いがたいが、土師器鉢は建物S B03と関連をもつように考えられる。

さて、H区のgラインに沿って畦畔を検出している。この畦畔は幅0.8~1.4m、高さ0.2m程のゆるやかな起伏のもので、やや西にふるものの、ほぼ東西方向にはしるものである。畦畔北側は、ゆるやかな断面皿状の幅5.0mの溝が平行する。その北肩より北側においては、掘立柱の分布があるが、南側ではほぼないといってよい。したがって、掘立柱の分布の南限は、H 5グリッドの北端までである。東西畦畔は、削り出されており、掘立柱群との直接的な関係については分からないが、この付近を境界としていることは確実であろう。しかし、直接的な明確なる区画溝

に関するような遺構は検出できなかった。

畦畔より南側は地形が一段、下降しており、その下降部分に0.5mの厚さで明褐・灰黄褐・黄褐色などの粘質シルト層が4層程に分かれ堆積する。それらは、南側J区まで及んでいるが、途中、I区南端部分で、緑灰色を主とし、砂及び砂質シルトを堆積土とする溝状の落ち込みを検出した他は、その周囲に若干の柱穴状ピットが認められる程度である。

各粘質シルト面には、径10cm以下の平面丸形のピットが多数、存在している。ピット内には、荒砂及び砂が入り込んでいる。このピットは稲株の可能性もあるかもしれないがどのような性格をもつか決定できない。しかしながら、同様の埋土のものとしてよく観察できるものに、人及び牛の足跡と考えられるものがあり、特に、H 6 グリッド東西畦畔の南側には東西方向の歩行を物語る牛の足跡を検出している。

これらの各面は、最上位に凹凸面はげしく存在するが、下位面は比較적으로おだやかである。また、下位面は東西、南北方向に幅0.1~0.3mの小溝がある。

こうした面の連続は、水田がかなり長期にわたって経営されたことを示すのかもしれない。もし、仮にそうであるなら、7世紀から中世までの期間がそれにあてられる。そして、それらの水の引き込み、排水の水路は天井川状のものであったと考えられ、I区南端がその候補の一つとして挙げられる。

こうした遺構群の他に、井戸状のものにH 4 グリッド東端のS E 401とI 1 グリッド東端のS E 101が挙げられる。両者とも第3遺構面中の最上位から切り込まれており、方形と考えられるが、前者はやや不整形である。また、埋土には両者とも、褐色砂に多量の粘土ブロックが入っており、人為的に埋められた可能性がある。

以上、このH・I区では、E・F区と比べて建物の重複性が少なく、復原できる建物が多かった。それとともに、H区南端とI区が水田の可能性の強いものであって、この両者の関係が注目されるところであるが、明瞭な区画の欠如が気になる。

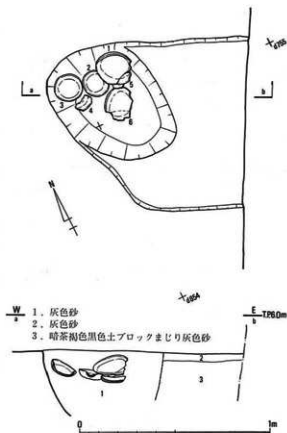


fig.188 Hトレンチ第3遺構面
Pit 129土器出土状況図

C. J区

J区の第3遺構面は、H区南端とI区の状況と一致しており、黄灰・褐灰・灰色の粘質シルトが堆積する。ただ、I区と比べ、最上位を覆う灰、灰オリーブ、オリーブ黄色の砂層が厚く、全体に及んでいる。また、各々の面は、それぞれに凹凸をもっており、b下面にそれがはげしい。

第3遺構面bでは、幅2.0~5.0mの隆起が南北方向に、トレンチからJ2グリッドにかけて存在し、第4遺構面aの状況を踏襲したかっこうとなっている。また、J1グリッドの北東隅において、幅1.0m程の畦畔上隆起を検出している。遺構面はこれより北東が一段、上昇している。

J1・2の両グリッドにおいて、落ち込みと井戸状の土壌を検出している。落ち込みは不整形なもので浅いが、井戸状のものは明瞭に掘り込まれている。J1グリッドのものは、南側にあり、

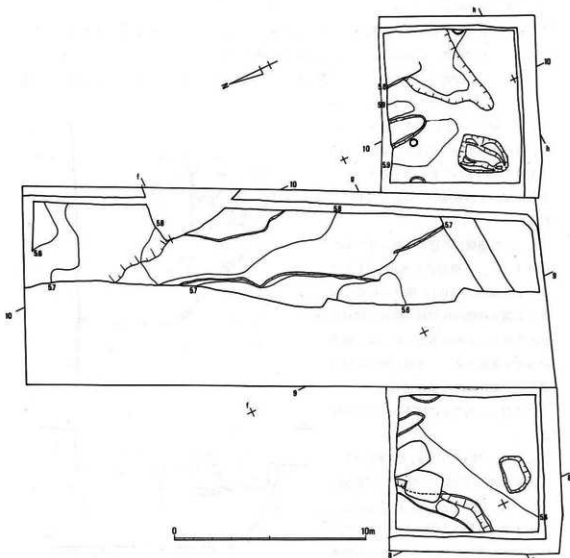


fig. 189 J区第3遺構面b下 平面図

2.0×1.4mの平面形状を呈し、ほぼ垂直に0.5m掘り込まれている。埋土中には、灰色砂層を中心として、粘土ブロックがまばらに混じる。同グリッドの東端、北側には、円形を呈すると考えられるものもある。J2グリッド南西側には、2段に掘り込まれたものを検出しており、上段部の平面形は台形気味の不整形なもので、2.6×1.9mの大きさである。下段部は、細長い三角形形状を呈している。短辺の上部の法面は比較的に垂直に、長辺は比較的にゆるい斜面をなすが、下半部はほとんど垂直な法面となっている。深さは0.7m程あり、埋土は灰色砂及び、砂質シルトを主体とするが、上段部には粘土ブロックが多く含まれている。

第3遺構面の最上位には、先に述べた砂層が覆うが、これら砂層は平面において竊模様のよりに堆積していることが特徴としてあげられる。

第9節 近世以降

A. E区

E区における第2遺構面は中世以降であるが、その大半は近世から現代である。中世に属するものは、第3遺構面aと同一面で検出した第2遺構面dのうち、上面の大畦畔下とその西側に残る幅0.2mの南北溝が挙げられるにしても極わずかである。それらは淡灰色の砂質シルト主体の埋土であり、密集傾向にある。溝中より、黒色土器、瓦器の細片の出土を見るのみである。

第2遺構面dの大半の検出遺構は中世と考えられるのと同様なあり方を示し、それらの溝埋土は灰色粘質シルトを主体とし、その中より伊万里碗の細片が出土している。このことから、上面の大畦畔は少なくとも、江戸時代初頭は溯り得ないことが分かる。

第2遺構面b・c この2面の遺構は5ラインに沿って位置する南北方向の大畦畔を中心として検出している。

大畦畔 この畦畔は幅5.2～6.0mであり、0.3m程の高さがある。そのうち、上部の0.2mは盛土によって構成される。盛土は砂を多く含む粘質シルトであって、東縁部から順次、明褐色、緑灰色、赤褐色の順に積み重ねられている。最も下部の土砂は、畦畔下に掘り残された土と一致し、灰色粘土ブロックも多く含む。その上に積まれた盛土は奈良時代前後の土器の混入が多いことから、主に奈良時代整地層の上部のものがあてられたと考えられる。

大畦畔の東西には、断面皿状の溝が掘り込まれている。東側の溝は幅4.0m程であり、E2グリッド側は大きく2本の溝に分かれる。この溝より東は、幅5.0m程南北方向に高くなった後にまた一段、低くなっている。西側では大きく見ると幅5.4mの南北溝となるが、その西半部は6本程の小溝が切り合う。その溝のさらに西には、幅2.4mの上部の畦畔が残る。そこには小溝などが検出されないことから、上部の畦畔はこれを踏襲したと考えられる。

E区南端は平坦な面をなしており、東西、南北方向に溝を検出している。そのちょうど中央には、幅1.0mの南北溝S-S D05の上層が存在する。

第2遺構面a この面は、中央環状線が布設される以前の水田の状況である。Eトレンチ中央にあげられたため池は昭和に入ってからのもので、水田はそれに切られることから、それよりも遡る。

この面もまた、大畦畔を中心としている。この時期に0.1～0.2mの厚さの土砂が大畦畔上に積みたされており、西側法面とその西側の溝にも同様に積み重ねられる。大畦畔より、約8m西側に離れて南北に平行する幅2.5mの畦畔が存在する。当初、現代のため池の堤と考えたが、その西側には東西方向の幅1.0mの小畦畔がとりついていることから、これは畦畔であって、田地の区画によって現代のため池範囲が制限されたと考えられる。しかしながら、ため池掘削の後には、この畦畔の東側に沿って断面「コ」の字形の新しい幅1.0mの溝が掘られていることから、堤として機能転化したものとなっている。本来は、Eトレンチ南端の状況から、畦畔より10m西側に

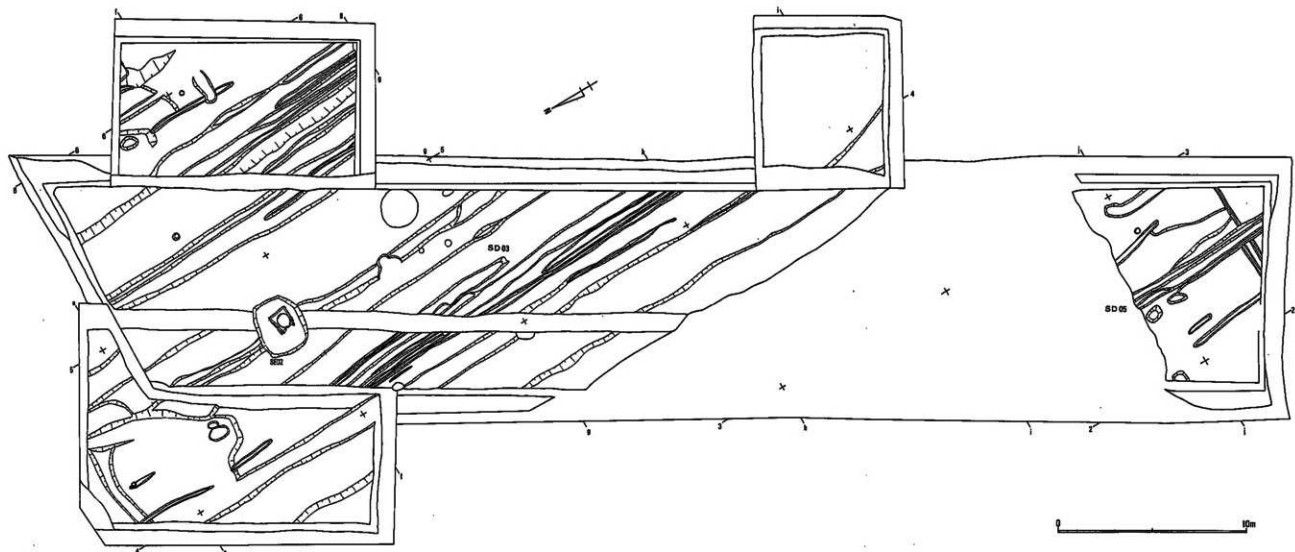


fig. 190 B区第2速精面 b·c 平面图

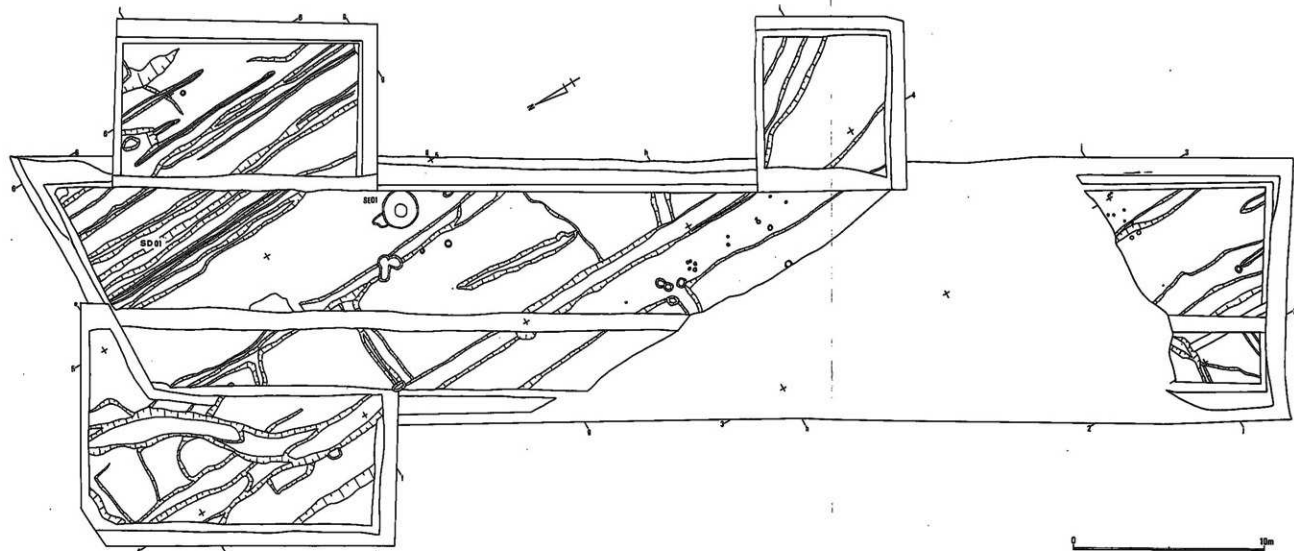


Fig. 191 E区第2透視圖 平面图

幅7.0mの断面皿状を呈する南北溝が存在したのであろう。現代のため池は、現地表面から深さ6.0mまで達しており、E3グリッドはこの範囲内に充分おさまることから、調査対象区からはずした。また、大畦畔と畦畔との間に東西方向の小畦畔が認められる。

大畦畔の東側には、幅6.0mの範囲に大きく2本に分かれる南北溝が平行し、その中央は小畦畔状に隆起する。その他に、それに平行して南北方向の小溝が5本、認められる。

畦畔関連遺構の他に、この第2遺構面では、井戸を2基、検出している。

井戸SE01 a面の大畦畔の上部平坦面上に穿たれたものである。径1.95mのはほぼ正円形の掘り方のもので、深さは3.75mである。井戸枠は、最上段に瓦が2段積まれているが、井戸内最上層にも瓦片が多く落ち込んでいることから、本来3段積みであったと考えられる。これらは、一段積みごとに裏込めされていることが土層の状況より看取される。その瓦積みの下は桶の側板を転用しており、その短径側を上にして、4段積み重ねている。桶井側下3段は25枚程の細い板材を用いたものであり、上1段は16枚使用の幅広い材を用いている。最下層より、

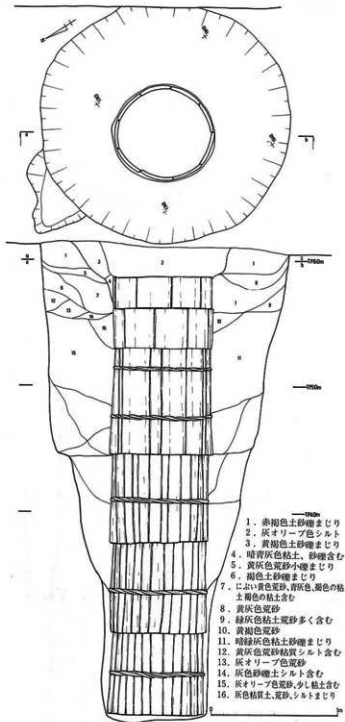


fig.192 Eトレンチ第2遺構面 a
井戸SE01平面、立面図

犬の骨とともに、それに伴うであろう首輪と鎖が出土しており、昭和には確実に使用されていたことが分かる。

井戸S E02 b面の大柱畔に伴うもので、その西側法面に中心をおく。3.0×2.6mの不整形な長

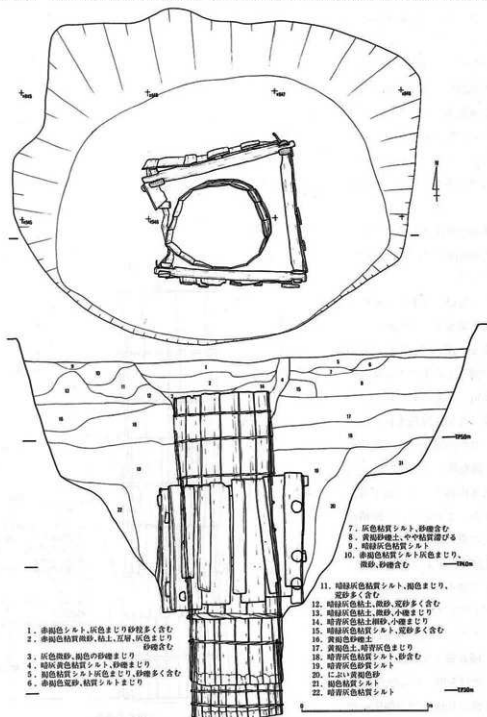


fig.193 Eトレンチ第2遺構面 井戸S E02平面、立面図

方形の掘り方の井戸である。この井戸の枠には、桶井側が4段に積み重ねて用いられ、下3段の重複がはげしい。深さ3.1mの掘り方は3段に掘り込まれている。その中段、すなわち、上から2段目の桶の周囲、方形に板枠を組んでいる。

B. F区

F区の第2遺構面は、E区のような大畦畔を伴わない。しかしながら、F区の東西において、東半部が高く、西半部が低いという段差が認められる。その段差は1ラインの東側に畦畔状の隆起を境にしており、東半部を中心として4面に細分できる。

第2遺構面d この面においては、第3遺構面に見られたような第4遺構面の周溝群の影響はほとんど見られなくなっており、当期において、ようやく、旧地形の起伏が整理されたと考えられる。しかしながら、第1号墓と第3号墓との間は依然、その影響が残り、幅3.0mの溝S D07下層となっている。その溝を中心として、西側は西肩の軸と平行して、南北溝を4本検出している。そのうちの最も西側にあるF3グリッドのものは、下面の溝S D311の輪郭に沿った落ち込み状のものである。東側は、溝S D07下層の東肩に沿って、幅4.0mの範囲で屈曲し、上昇を続ける。その東方は、幅3.0~5.0mの溝S D08の下層となっており、上面の同位置の溝より北側において幅が広がっている。

この溝より東は、断面三角形の畦畔状隆起となって、そこから東側は先に述べたように一段高くなっており、南北軸よりやや西にふる程度で、比較的幅広い溝が南北方向に平行して約5mの範囲で4本を検出している。そして、それより東のF2グリッドでは不整形な落ち込みと南北小溝を検出している。

第2遺構面c この面は全体的には、d面と同様な傾向を示すが、それと異なりを見せるのは各溝がそれぞれ整然と掘削されていることである。特に、西側のF3グリッドでは幅1.0m前後で4本の溝が整然と平行する。しかし、南西隅では溝S D311の影響がまだ残り、落ち込みとなる。また、東側では幅0.5m程の畦畔状隆起が平行する。そこから、溝S D07近辺を境に小溝、畦畔状隆起が方向を変える。その東側の溝S D08は、3.0m幅の直線的な南北方向の溝となっている。その東は1ラインに沿った畦畔があり、その1.0m東には、北端の井戸S E01を切る幅1.8mの幅広い溝S D06を検出している。その溝の東には0.6~0.8mの溝が平行する他、西半で見られるような小溝を検出している。

第2遺構面b この面では、西側のF3グリッドとF区東半部の上段において、主に遺構を検出している。c面で見られた小溝群は存在しないものの、同じような南北溝が展開し、その多くは1.0m前後のものである。

第2遺構面a a面の特徴は、これまでの下面で畦畔状の隆起を保っていた1ラインに沿ったものが東へ拡張され、上坦幅2.0mの道路状の畦畔となっていることである。この南北の畦畔の両肩部には杭列が打ち込まれている。西側において検出しているのは中央の6本にすぎないが、東

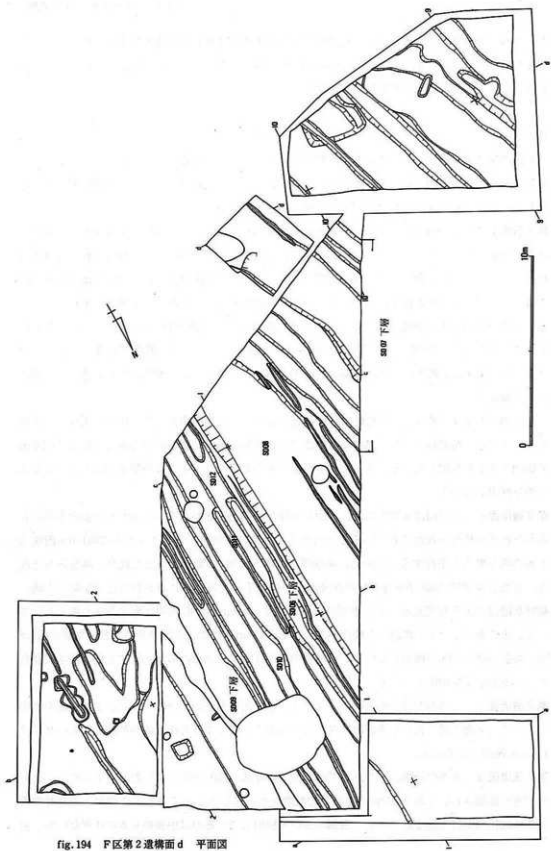


fig. 194 F区第2遺構面d 平面图

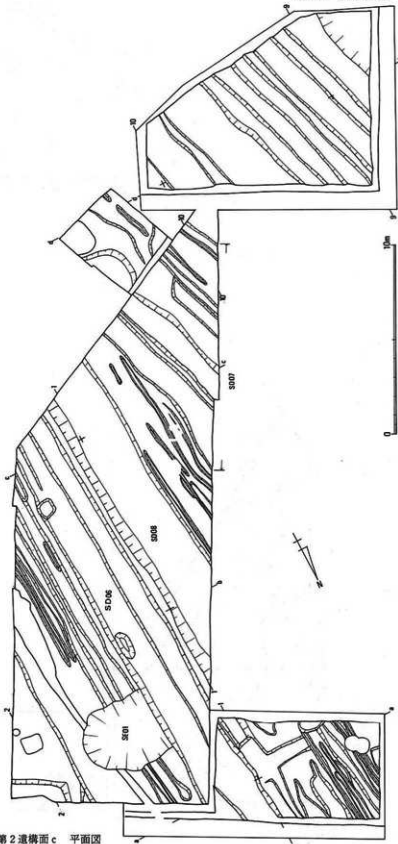


fig. 195 F区第2遺構面c 平面図

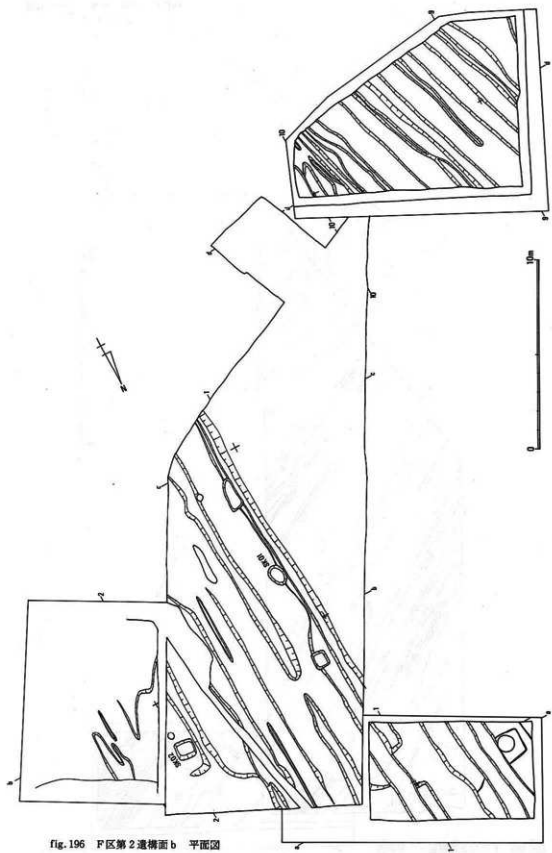


fig. 196 F区第2遺構面b 平面图

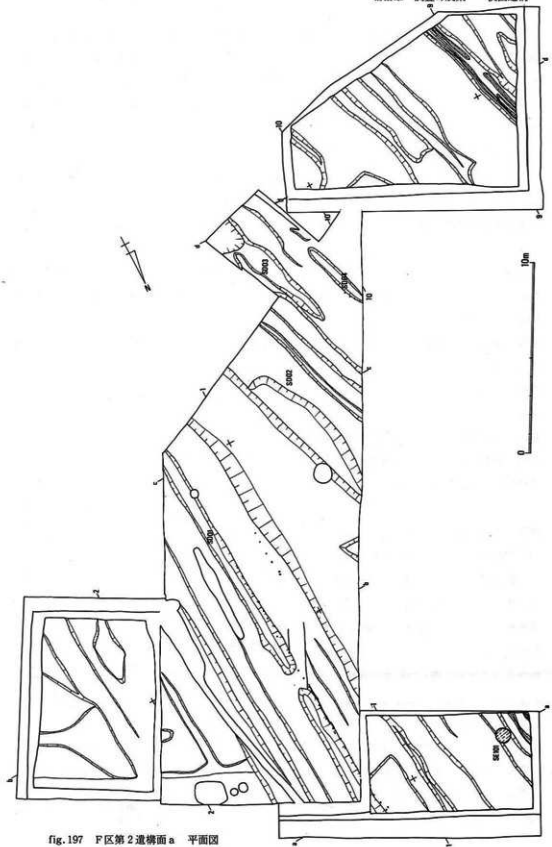


fig. 197 F区第2遺構面 a 平面図

側では、およそ30本の径5 cm程の細い杭が打ち込まれている。特に、北側は0.2~0.4mの密な間隔で打ち込まれており、その東側の溝S D01がとぎれるところには、幅10cm程の薄い板材が杭にはさまれて列をなしている。これは下面の畦畔の拡幅の際の土溜かと考えられるが、それに充填された盛土は、青灰色を帯びた粘質シルトと明褐色の砂まじり土であった。この使用盛土より、近代以降の時期と考えられる。この畦畔より東側、3.0mと6.0m及び9.0mのところには小畦畔状の隆起が認められる。西側は、再び不定形な南北方向の溝がはしっている。その中で幅広いものは3.0~4.0mあり、それらは中央の畦畔と接するものと6 m、14m、19mと離れて、西にふって平行するものがある。

他にF区第2遺構面で検出したのは大きな土塊と井戸3基であり、小規模なものを含めると4基となる。

小規模なものはb面において、1ラインに沿う畦畔の西側に土塊S K01を中心として3基、南北に並ぶ。平面形は方形、楕円形、不整形長方形と様々である。その8.0m東に一辺1.0mの正方形の土塊S K02が存在する。

土塊S K301 第3遺構面a上に含めるべきものかもしれないが、F3グリッド東隣のd面において土塊を検出した。一辺3.0m前後のやや不整形なもので、深さ0.5mである。埋土は大きな粘土ブロックを多量に含む砂層であり、人為的に埋められたと解釈される。また、西側々辺は二段にいびつに掘り込まれたものである。

井戸S E01 トレンチ部北端のc面において検出している井戸である。東西方向に長い長円形の平面プランを呈する。素掘りの4.9×3.7mの大きなものである。トレンチ部は第4遺構面cにおいて保存したので、F1グリッドにかかる西半部を完掘したにすぎない。F1グリッドにおいては、深さ2.2mまでの確認にとどまっており、東側に向かって依然、下降した法面を呈しているので、井戸の最深部は東側にあるようである。断面は、上半部が半円形に大きく開口し、茶灰色砂質シルトを主

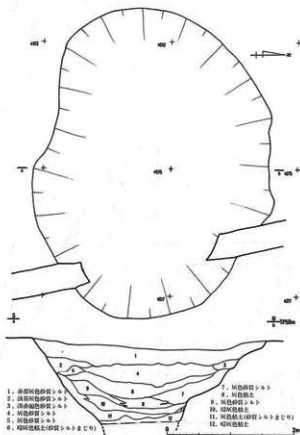


fig.198 F1トレンチ第2遺構面c
井戸S E01平面、断面図

体とした堆積土であり、その下は灰色系の粘質シルト、粘土が主体である。粘質シルトが入る下部は径1.2mの円形の掘り込みとなり、法面は垂直気味に落ちる。

井戸SE101 F1グリッドの西側、a面において検出している井戸である。ただ井戸と称するものの水溜め的なものであったと考えられる。一辺1.4~1.5m、深さ0.2mの方形の掘り方の南より底面に、2個の径0.9mの円形の掘り方をさらに

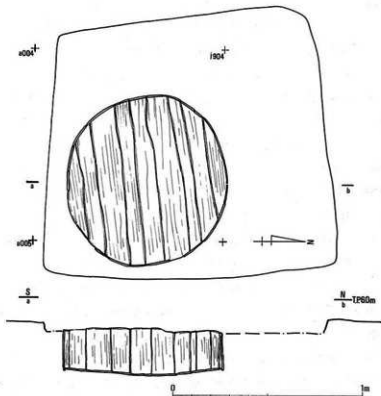


fig.199 F1グリッド第2遺構面a
井戸SE101平面、立面図

下に0.1m深く掘り込んでいます。その2個の円形の掘り込みのうち西側のものに、径0.82mの木桶を設置している。木桶は、幅10cm前後の薄い板材を組み合わせたものであり、22cmの高さで遺存している。その検出状況より、木桶の上半部は地上に露出していたことが考えられる。

井戸としては、第1遺構面の中央環状線布設前に存在した工場に伴うと考えられる径0.9mのコンクリート製の井戸を、トレンチ部中央や南よりにおいて検出している。また、F区中央南北方向には土管がはしる。

C. H・I区

H区の北端及び中央は、南北方向の大畦畔を中心に南北方向の遺構群が展開するのに対して、H区南端とI区の多くは東西方向の遺構群で占められているが、I区南端でまた、南北方向となっている。こうした単位は60m程としてとらえられる。

H区の中央、5ラインと6ラインの間には、幅6.5mの大畦畔が南北方向に存在する。H区第2遺構面dは、その下部、第3遺構面aと接してその東側に遺存する。すなわち、6ライン以西である。この面の主要な遺構は、幅0.3~0.4mの灰色及び明褐色の砂質シルト、砂を埋土とする小溝がある。それら小溝は東西、南北双方の方向のものがある。切り合いによる時期的な前後

関係はとらえ難い状況で交差し合っている。ただ、傾向としては、南北方向のものに新しいものが多いようである。東西方向の小溝は、bラインとcラインの間から南、dラインとeラインの間までのおよそ20m間が、特に濃密に平行して存在する。これら小溝群は、黒色土器を含むものから伊万里を含むものまであり、古代末から近世にかけて掘り込まれたものと考えられる。

H区の第2遺構面cは、主に、南北方向の幅広いものが多い。H区の北端では、幅5.5mと幅2.5mの幅広く浅い溝状の落ち込みが見られ、その溝の間は畦畔状に掘り残る。その溝より西側へ7mごとほどに1.0m前後の溝が重なり合って南北方向に存在する。この時期には、大畦畔の輪郭が整えられている。

大畦畔 E区と同様な形状を呈するものである。E区とそれとは、東西におよそ95mの間が開く。この大畦畔も東側から盛り上げた後、次に西側を盛土して全体の高まりを形成しており、その盛土の厚さは厚いところで0.5mある。盛土に使用した土砂は、全体に褐色系の砂質シルトである。うち、最下層の一部と中層の西側部分では粘質シルト及び粘土が見られる。盛土中よりはE区と同じく、奈良時代の土器が顕著に出土し、それは下位層東半に多い。

H区の第2遺構面bは、大畦畔の上面に約0.1mの砂質シルトの盛土とその東西に粘質シルトが置かれ、それぞれは平坦な面を形成する。前者の盛土以前には、畦畔上坦面中央に幅0.3mの小溝が存在する。後者は、その東側部分に幅1.0m前後の南北溝が3本平行し、その東側の溝中及び溝肩にかけて、0.5~1.0m間隔で南北一列に杭が打ち込まれている。その溝の東側には方形区画の水田跡を検出している。それぞれは幅0.6~1.0mの小畦畔によって区画されている。また、西側部分は、不安定な南北方向の溝を検出している。

fラインを中心とする現代河川を隔てては、I区南端のbラインまで、東西方向の溝が各面に存在する。

H区の第2遺構面aは、大畦畔の西側に畑地の畝が良好に南北方向に平行して存在していた。大畦畔の最終埋没は、畦畔東肩に木製の電柱を検出していることから、昭和に入ってから工場造成時に含まれる。

I区の第2遺構面下位面は、幅0.2~2.5mの比較的安定した溝が多い。I区北半に小溝が多く認められる。bライン以南は、不定形な落ち込みが溝とともに南北方向に平行する傾向がある。

I区の第2遺構面上位面においては、幅1.0~2.0m前後の不安定な溝が東西方向に平行するが、整然としたものではない。それら東西方向の溝はbライン付近でとぎれ、それより南は灰オリブ砂質シルトが0.4mの厚さで堆積し、一段高くなっている。下位面に比べて、小溝及び溝が多い。

H・I区の第2遺構面の上の第1遺構面では、中央環状線布設前の工場跡がH区北端に顕著である。この面では、大畦畔の高まり上面に高さを合わせ盛土されている。H区北半では、6ライン東側に小河川とH区北端にコンクリート製の井戸がある。H区南端には、幅7.0mの現代河川がはしり、それを南限とし、工場建物基礎とそれに付属する施設の跡が見られた。他に、d4区

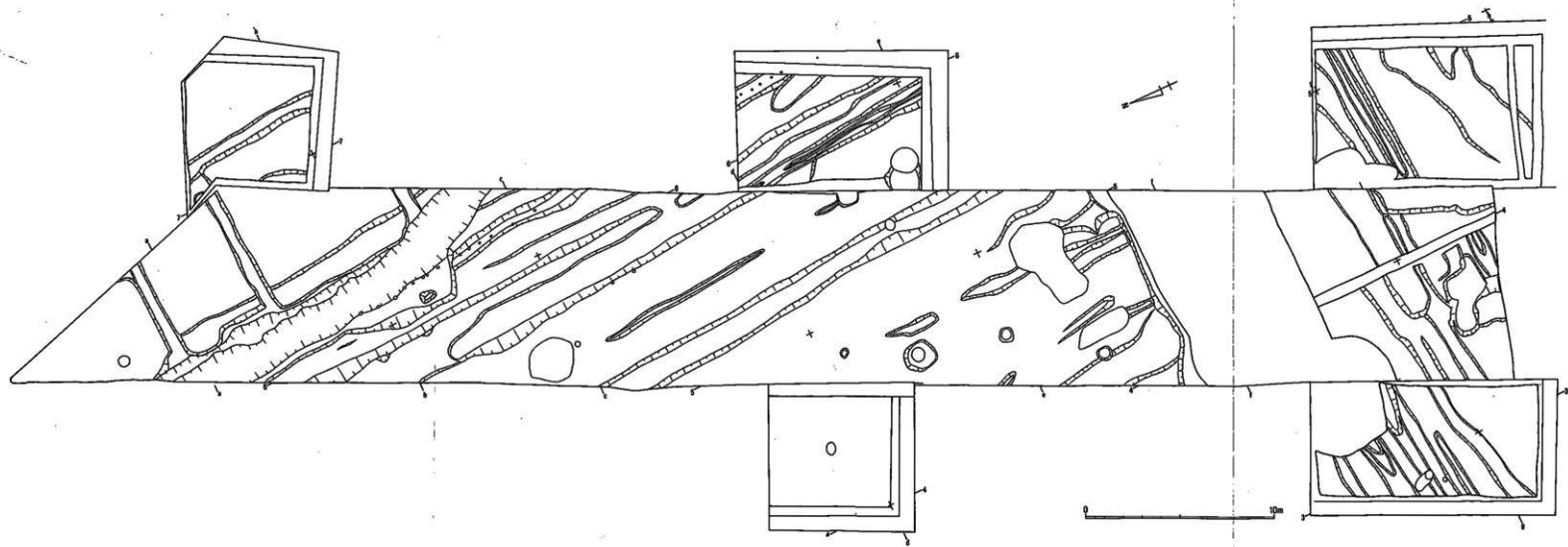


fig. 200 H区第2遺構面b 平面図

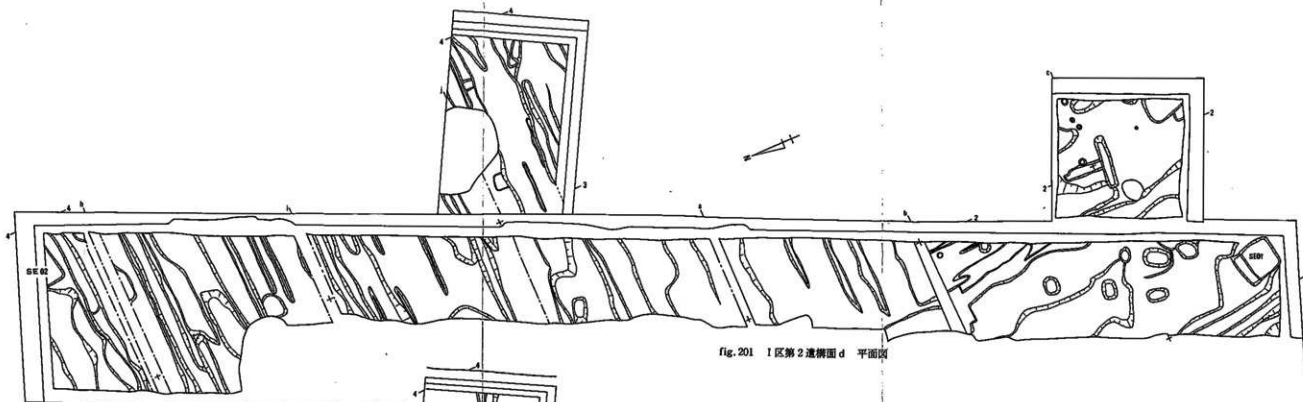


Fig. 201 I区第2遺構d 平面图

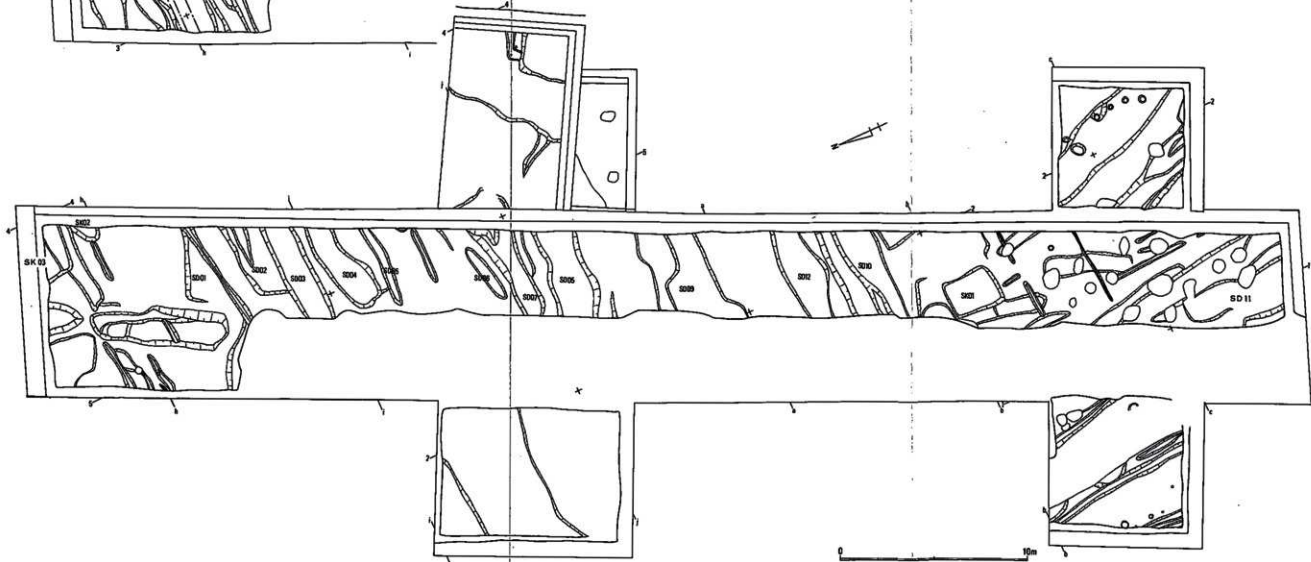


Fig. 202 I区第2遺構a 平面图

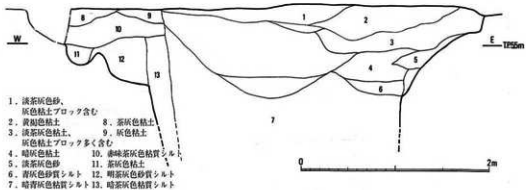


fig. 203 Hトレンチ第2遺構面d 井戸SE01土層断面図

では、浅いコンクリート製の井戸がある。現代河川の南法面には擁壁が打たれており、I区南端の第2遺構面aにおいて低くなっていたところには、砂質シルトが0.2m程盛土され、南端と若干の段差がつく状態で水田となっている。なお、IトレンチとJトレンチの西半部は、中央環状線布設時に行った河川の付け換えが、大きく下面に損壊を与えている。

H・I区でも、E区と同様に井戸を検出している。第2遺構面に属するものに関して、それぞれ記述を行う。

H区井戸SE01 Hトレンチ北端部、d面において検出した井戸である。上部の約0.6mは、周囲が砂層で

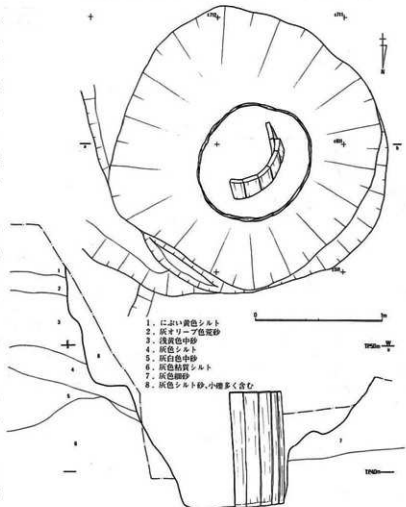


fig. 204 Iトレンチ第2遺構面 井戸SE01平面、立面図

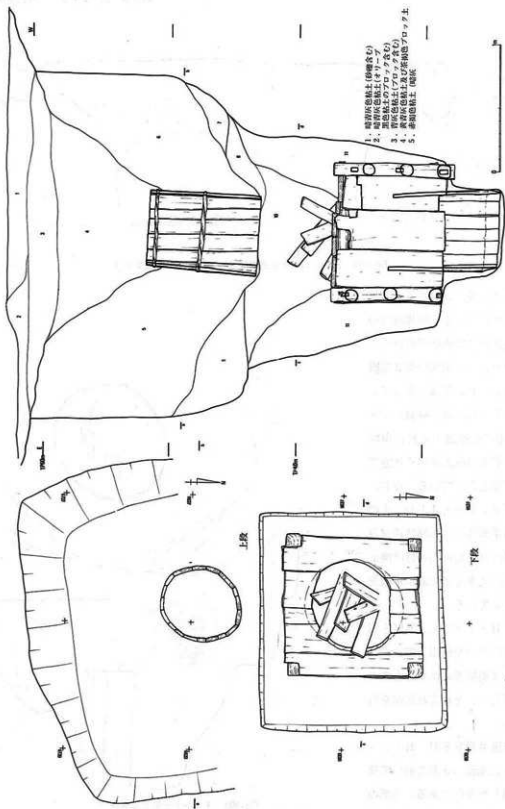


fig. 205 I トレンチ第2遺構面 a 井戸SE02平面、断面図

あるために、大きく断面皿状のものとなっている。したがってその平面規模は、5.4×4.2mとかなり広い範囲の円形を呈している。その中央下部は、径2.6mの円形を呈し、若干の勾配をもって、深さ1.8mまで及び、その下の粘土層にあたる所ではほぼ南北軸で一辺1.5mの方形の掘り方となる。これは井戸枠が存在したことを示唆するかもしれない。全体での深さは3.2mに達する。

I区井戸SE01 Iトレンチ南端のb面において検出している。一辺1.8mの南北軸に合わせた方形のプランを呈し、深さ2.5mである。掘り方は2段になっており、下部1.0mが径1.2mの円形となっている。その中には、長さ90cm、幅10cm前後の比較的厚い板材を用いた桶の3分の1程が残り、その上部周囲にはタガが一条残っている。

I区井戸SE02 Iトレンチ北端a面で検出した井戸である。この井戸は、一度崩壊しているようで、上下に2つの異なる井戸枠があった。掘り方は上の井戸枠に伴うもの2段と、下に伴うもの2段と計4段となっている。上の井戸枠を入れる掘り方は、最上部に深さ0.4mの断面皿状となっている。その部分は井戸が埋没した際の落ち込みとなった部分として解釈される。その落ち込みの下は一辺2.65mの方形の掘り方があり、深さ1.95mを計る。その下部には、長さ85cm、径64cmの桶井側一段分が出土している。

下の掘り方は1.75×1.6mの長方形で、その掘り方の西側に寄せて一辺110cmの方形の箱形の木枠を組み、その中央に径70cmの桶井側を貫通させている。箱形の木枠はほぼ南北軸にのる。四隅に角材を立て3段の横木で継ぎ、板材でもって上面と側面を覆っている。木桶の遺存は下部の一段のみであったが、その上部には桶井側で使用されたと考えられる板材を箱形の木枠に突き

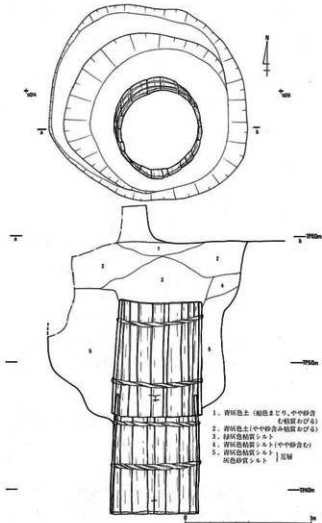
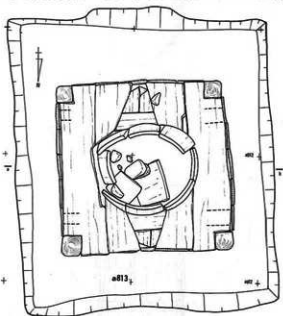


fig. 206 Iトレンチ第2遺構面
井戸SE03平面、立面図

さすように6本投げ込まれていた。したがって、少なくとも桶井側は2段存在していたことになる。下の桶井側は長さ85cmのうちの下半部が下方に突き出しており、その部分のみさらに下方へ円形に掘り込んでいる。深さはすべてで3.9mある。

Ⅰ区井戸SE03 Ⅰトレンチ南端部北よりの現代河川の肩口bライン上において検出したb面の井戸である。掘り方は2段であり、上部は1.7mのやや楕円形気味の平面プランを呈し、下部は



木桶の輪郭とはほぼ一致し、桶井側を挿入しながら、その内側を掘削することによって枠を落し込んだと考えられる。その部分はちょうど桶井側一段分に相当する。井戸枠には木桶が2段あてられている。双方とも長さ90cm、径70cmのものである。木桶に使用する板材の接合面の上下2ヶ所には、両端が尖った長さ5cm程の細い棒状の材を挿入し、その接合をより確実なものとしている。深さは、2.2mである。

Ⅰ区井戸SE04 Ⅰトレンチ南端北側、井戸SE03の1.0m北西側に位置する。上部は、現代河川によって削平を受けている。Ⅰトレンチの第2遺構面の下位面がT.P.6.00mであるので、上部の約1.0mは損壊していることになる。掘り方は2.35×2.05mの長方形の平面を呈し、南北に長い。掘り方、井戸枠ともに南北軸よりやや西にふる。井戸枠は最上部に瓦を積んで径0.7mの井側としている。その中には拳石大の川原石とともに瓦片が入り込んでいる。このことから、上部まで瓦が積まれたと仮定すると長さ28cm程の瓦が4段に積まれ、瓦枠をなしていたことになる。

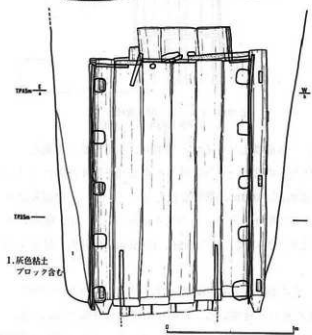


fig.207 Ⅰトレンチ第2遺構面
井戸SE04平面、立面図

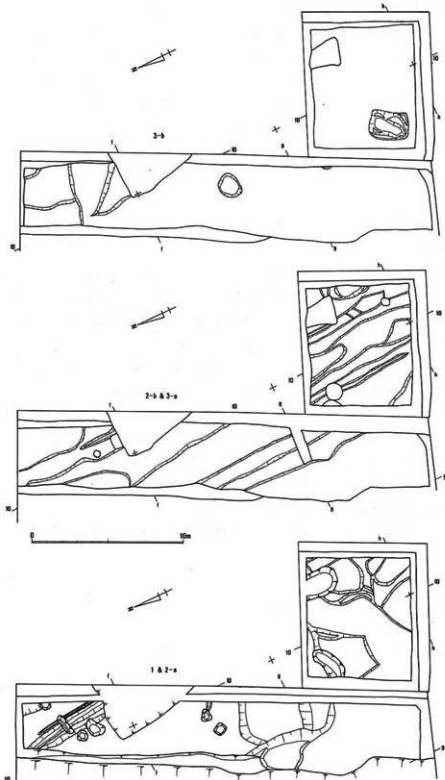


fig. 208 J区第3遺構面a・b上 第2遺構面a・b 第1遺構面 平面図

下段は、箱形の木枠で、一辺1.35mの正方形の平面をなし、高さが2.05mある高いものである。一辺15cmの角材を四隅に配し、5段の横木がとりついており、南北方向を上、東西方向を下に組んでいる。四隅の材にある杓穴は、一本おきに貫通しており、その中間のものは途中で止まり、杓差しとなっている。この角材で組まれたフレームの周囲は、上部が厚い板材を組み合わせ、側面が幅0.2m、長さ1.9mの薄い板材で覆っている。前者は、板材をもたせるため、下に横木をかましている。後者の板材の下端部は、木桶の最下段下部と同様に外側を削り尖らせている。この板材には電気鋸の加工痕がある。この箱形の枠の下部には、径0.75mの桶井側がある。

D. J区

J区の第2遺構面は、全体に南下がりの地形となっている。

第3遺構面上位で覆う灰色、オリーブ砂の上に、第3遺構面aと同一レベルで第2遺構面bがある。9ラインと10ラインの中間付近から東側が少し高くなっており、幅1.0～2.5mの5本程の南北溝が平行している。その上には、東側の高い部分を中心に約0.5mの厚さに盛土されている。にぶい褐・暗灰黄褐色の砂質シルトが東側にまず盛られ、西側に褐色粘質シルト、にぶい黄褐色砂質シルトとなる。

したがって、第2遺構面aは、東側の高い部分と西側の溝状に落ち込む部分と2つに分かれる。その高低差は、0.8mとなる。上段はまた、gラインより南方へも下降しており、J2グリッドは全体に下がることとなる。特に、グリッド中央対角線に沿いに検出する東西方向の幅2.5mの不安定な溝の部分が、最も落ち込んだ状態となっている。その溝の南側はやや高くなるが、不整形な落ち込みが4ヶ所あり、それに削られ残った部分は畦畔状に隆起する部分もある。

上段の北側には、幅1.3m深さ0.4mの断面「レ」の字形の南北溝がある。その東肩沿いには、幅0.2mの小溝を検出する。トレンチ北東隅は落ちている。

なお、トレンチ西半分は、中央環状線布設時の付替河川が南北にはしる。